

玉手山9号墳

1983

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市内には多数の遺跡が存在していますが、とりわけ古墳と古代寺院には注目すべきものがあります。柏原市内の古墳の数は1,500基とも2,000基とも言われ、その実態は定かではありませんが、これは全国最高の数であるという事実を知らない市民が、意外に多いようです。

石川に平行して南北にのびる玉手山丘陵上には、古墳時代前期の前方後円墳十数基を中心とする玉手山古墳群が存在します。玉手山古墳群は前期の古墳群としては府下最大のものであり、その西に広がる中期の古市古墳群との関係を解明することは、古墳時代研究の大きな課題の一つです。玉手山9号墳の発掘調査の成果は玉手山古墳群の解明に大きな役割りを果すものであると考えられます。

玉手山古墳群は、開発によって次々と破壊され、約半数が残るにすぎないうえ、残されている古墳も、墳丘の一部が削られるなど、壊滅の危機に瀕しています。

昨今の柏原市域における開発は、文化財の破壊のみにとどまらず自然破壊も著しいものです。文化財を保護し、自然を保護してこそ、真に快適な生活が営めるのであって、文化財や自然の保護を含んだ開発を実施し、現代の文化の創造をはかるのが本来の姿です。

一度破壊された文化財や自然は二度と戻ってはきません。これを守っていくのは柏原市民の権利でもあり、義務でもあるのです。今後とも、文化財に対して、良き理解者になっていただけることを望みます。

昭和58年6月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、仮称国分第二中学校建設予定地として実施した柏原市円明町所在、玉手山9号墳および玉手山遺跡の緊急範囲確認調査、緊急発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、1982年10月7日から11月27日まで国庫補助事業としての範囲確認調査を実施し、1983年2月4日から4月28日まで造成業者、東洋総業株式会社負担事業としての発掘調査を実施した。遺物等の整理は、調査と平行して行ない、1983年6月に完了した。
3. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課 竹下 賢、桑野一幸、安村俊史が担当した。
4. 遺物の整理は、安村、松田光代が行なった。
5. 本書の編集は安村が行ない、執筆は第四章—3の一部を松田が、その他全文を安村が担当した。
6. 付章1は、玉手山9号墳の石室材・葺石・赤色顔料の分析を 横原考古学研究所研究嘱託 奥田 尚氏に依頼したものである。又、付章2については、文化財保存計画協会が立案した「玉手山9号墳移設基本計画」の抜粋を掲載したものである。
7. 本書で使用した方位は、断わりのない限り真北を指す。なお、磁北(M.N.)は真北より 6°9'西に偏している。
8. 玉手山9号墳は、大阪府教育委員会『大阪府文化財地名表』などでは、玉手山10号墳とされているが、学術的には9号墳の名称が使用されており、本報告書でも9号墳の名称を採用する。
9. 調査の実施に際して、大阪府教育委員会文化財保護課 井藤 徹、四天王寺国際仏教大学 藤沢一夫教授、帝塚山大学 堅田 直教授、奈良大学 水野正好教授のほか、多数の方々に指導、助言を賜った。また、石材鑑定等は奥田 尚氏に、写真撮影の一部は阿南辰秀氏に依頼した。これらの方々をはじめ、調査に御理解をいただいた地元の方々に深く感謝の意を表します。
10. 調査・整理にあたっての協力者は下記の通りである。

石田 博	北野 重	花田勝広	広岡 勉	大塚淳子	西原清美
山内 都	松岡由紀子	苅野絹子	須山早苗	秋田大介	石田成年
井宮好彦	上條裕典	坂井利和	佐藤 尚	山下裕司	山中 茂
竹下彰子	藤岡弘子	麻 栄三郎	朝田行雄	井上岩次郎	奥野 清
川端長三郎	岸本重夫	杉田 茂	王野正一	西岡武重	分才春信
道籬甚蔵	山田貞一	山本芳一	大谷麻弓	村口ゆき子	
竹口文化財土木工業所		株式会社奥村組			

目 次

第一章 調査の経過	
1. 調査に至る経過とその後	1
2. 調査経過	2
第二章 位置と環境	
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
第三章 玉手山9号墳の調査	
1. 墳丘	10
2. 穫穴式石室	24
3. 遺物	30
第四章 西側斜面の調査	
1. 層序	43
2. 造構	43
3. 遺物	48
第五章 玉手山9号墳の検討	
1. 墳丘の築成	51
2. 石室の構築	53
3. まとめ	55
付章1 石室材・葺石・赤色顔料の分析 奥田 尚	
1. 石材とその採石地について	59
2. 赤色顔料について	63
付章2 玉手山9号墳移設基本計画 文化財保存計画協会	65
図1 玉手山古墳群分布図	6
図2 玉手山9号墳位置図(昭和45年)	7
図3 玉手山9号墳位置図(昭和53年)	7
図4 玉手山9号墳調査地区全体図	11
図5 土層図①	15
図6 土層図②	17
図7 萩石実測図①	20
図8 萩石実測図②	21
図9 萩石実測図③	23
図10 墳輪・ピット列実測図	23
図11 穫穴式石室実測図	25
図12 鉄劍先実測図	28
図13 石室排水溝実測図	29
図14 土師器実測図	30

図15 円筒埴輪口縁部実測図	31	図28 玉手山9号墳	
図16 円筒埴輪体部実測図①	32	竪穴式石室構築推定復元図	54
図17 円筒埴輪体部実測図②	33	図29 水銀鉱石の産地	64
図18 朝顔形埴輪実測図	35	図30 玉手山9号墳復原模型	65
図19 墓輪線刻文様拓影	36	図31 整備概念図	66
図20 墓輪基底部実測図	37	図32 柏原市総合整備フロー	66
図21 西側斜面東西断面土層図	44	図33 柏原マップ	67
図22 西側斜面南北断面土層図	45	図34 玉手山古墳群分布図	68
図23 道状遺構-1 実測図	46	図35 玉手山9号墳配置図	70
図24 道状遺構-2 実測図	47	図36 玉手山9号墳平面・立面図	71
図25 西側斜面出土土器実測図	49	図37 後円部断面詳細図	73
図26 西側斜面出土埴輪実測図	50	図38 竪穴式石室平面・断面図	73
図27 玉手山9号墳推定復元図	51		

表1 墓輪分類表	30	表3 大和・河内の竪穴式石室の石材	60
表2 墓輪観察表	38	表4 赤色顔料のX線回折	63

図版1 速景・航空写真		図版14 道状遺構-1	
図版2 舂石		図版15 道状遺構-2	
図版3 土層・杵石		図版16 鉄劍・土師器・埴輪	
図版4 杵石		図版17 墓輪	
図版5 杵石		図版18 墓輪	
図版6 墓輪列		図版19 墓輪	
図版7 墓輪列		図版20 墓輪	
図版8 竪穴式石室		図版21 墓輪	
図版9 竪穴式石室北壁		図版22 墓輪	
図版10 竪穴式石室南壁		図版23 墓輪	
図版11 竪穴式石室東・西壁		図版24 墓輪	
図版12 竪穴式石室礫敷・鉄劍出土状況		図版25 石室石材採石推定地・石材顕微鏡写真	
図版13 竪穴式石室排水溝			

第一章 調査の経過

1. 調査に至る経過とその後

1982年、柏原市円明町、旭ヶ丘町で仮称国分第二中学校の建設が予定され、東洋総業株式会社から、造成に先立つ緊急発掘調査の依頼が柏原市教育委員会に届けられた。しかし、予定地には玉手山9号墳が存在し、弥生時代の遺跡の存在も予想されたため、東洋総業株式会社の負担によって、9月17日から調査準備をし、9月24日から草木の伐採を行ない、現況の航空写真、百分の一航空測量図を作製した。そして、それを基本資料として、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、300万円の国庫補助を得、あくまでも保存を目的とした玉手山9号墳の規模、遺存状況を確認するための範囲確認調査を公費で実施し、その結果によって、本調査の検討を行なうこととした。

調査は1982年10月7日から11月27日まで実施した。その結果、墳丘・葺石が予想以上に良好な状態で遺存していることが判明し、竪穴式石室の構造、墳丘上のピット列、くびれ部のテラス状遺構、特異な埴輪など、次々と貴重な成果があげられた。この成果は新聞でも報道され、現地説明会にも多数の見学者があった。

調査期間中から、このような貴重な成果と共に、数少ない前期古墳の重要性を説明し、保存できるように交渉を続けたが、現在の予定地以外に適当な中学校建設予定地がないこと、9号墳の位置が高く、中学校建設のために削平しなければならないことなどにより、9号墳を削平せざるを得ないという結果に至った。そこで、中学校敷地内に、何らかの方法で9号墳を復元するという条件でこれを認め、その後、復元方法についての検討が重ねられた。復元については、原則として全体を復元する。9号墳の特徴である西からの景観を重視する。復元後、整備し、社会教育施設として公開する。などの条件を示し、中学校建設関係各機関と協議を進めると共に、文化財保存計画協会に基本計画を依頼することになった。その結果、ほぼ意見が一致するに至り、1983年2月4日から造成予定の全面調査に着手した。

調査は9号墳の西側斜面下より実施し、4月末までに1,500m²を調査したが、諸般の事情により土地の売買契約が成立せず、柏原市が当予定地での中学校建設を断念するという結果に至り、調査を中止することとなった。

この結果、9号墳はとりあえず、破壊の危機を免れたが、西側斜面下を1,500m²にわたって調査したため、9号墳および斜面が崩れる恐れがあり、6月8日から復旧工事が実施された。

9号墳がどんな形であれ、破壊されずに済んだことは喜ばしいことであるが、柏原市の行政の安易な態度は批判されなければならない。今後、柏原市は文化財の保存に対して、真剣に取り組んでいかなければならず、そのためには努力を怠ることができないのである。

2. 調査経過

調査は2期にわたり実施した。第Ⅰ期は、国庫補助事業としての玉手山9号墳範囲確認調査であり、トレントを10箇所設定し、1982年10月7日から11月27日まで実施した。第Ⅱ期は、原因者負担事業としての調査であり、標高80m以上の西斜面をほぼ全面調査する予定であったが、調査途中で中止されることになり、斜面下部から約1,500m²を発掘したのみで、墳丘の調査は行なっていない。1983年2月4日から4月28日まで実施した。

第Ⅰ期（1982年）

10月7日、調査開始。第2・3トレント設定。第2トレントで、後円部の葺石が30~60cm幅で残っていることを確認。レベル基準高を東山三角点（玉手山8号墳後円頂部）より移動させる。第2・3トレントから埴輪の細片が少数出土。器壁が薄く、初見のものである。

10月8日 第1トレント設定。葺石が三段に残る。第3トレント土層断面図作製。前方部確認のため、第6トレント設定。葺石が点々と残り、埴輪片多数出土。前方部端確認のため、第8トレント設定。

10月9日 第1・2トレント土層断面図・葺石平面図作製。第8トレントで前方部前面の葺石基礎を確認。

10月12日 後円部・前方部の規模がほぼ判明したため、くびれ部と考えられる位置に第5トレント設定。

10月13日 第6トレント土層断面図・葺石平面図作製。第7トレントをL字状に設定し、前方部の埋葬施設の有無を確認する。

10月14日 第7トレント、埋葬施設は確認できず。第8トレント土層断面図・葺石平面図作製。
奥田 尚氏らが見学に来られ、葺石材は石川の河原石を使用、竪穴式石室石材は安山岩であり亀ノ瀬産のものであるという教示を得る。

10月15日 第4トレント設定。第5トレントでは、葺石が良好に遺存、原位置を留める埴輪を一基確認。これまでの調査により、前方部はほとんど地山整形、後円部は盛土による築成であることを確認。文化庁桑原滋郎氏、大阪府教育委員会井藤徹氏が来られる。

10月16日 第7トレント土層断面図・葺石平面図作製。

10月18日 第5トレントを北側へ拡張。後円墳頂部に、第9トレントとして、竪穴式石室内の擾乱土を取り除く。石室石材が多数出土。大部分が安山岩であるが、緑色結晶片岩も一部見られる。赤色顔料の付着した礫も多数出土。

10月20日 第4トレント土層断面図・葺石平面図作製。第9トレントは写真を撮りながら、慎重に掘り下げていく。

10月22日 前方部東側崖面に遺構らしきものが確認されたため、断面図作製。平板測量開始。

10月23日 第5トレント土層断面図作製。葺石平面図作製のため、1m方眼の割り付けを実施。

- 10月25日 第5トレンチ葺石平面図作製。第7トレンチを拡張し、前方部東側崖面に見られた遺構を掘る。その結果、土塁状を呈することがわかる。埋葬施設の可能性も考えられる。平板測量の結果、墳丘全長約67mと復元。(後、64.6mに訂正)
- 10月26日 第9トレンチは過去の盗掘が著しく、埋土からビニール袋、空き缶等が出る。しかし、粘土棺床が一部残っていることを確認。また、西壁の板石上から鉄剣先の小片出土。状況から考えると、過去に東西方向のトレンチによって盗掘が行なわれていることがわかる。
- 10月27日 セスナ機による航空写真撮影。
- 10月28日 第5トレンチ葺石平面図完成。第9トレンチの擾乱土掘削がほぼ終了。阿南辰秀氏に依頼し、石室・葺石の写真撮影を行なう。
- 10月29日 第5トレンチ埴輪検出部周辺の調査。埴輪底部が2箇所に残り、その中間に、抜き取り痕らしき造構が2箇所で確認される。それぞれの間隔は約1.4mを測る。
- 10月30日 第6トレンチの埴輪列延長部分を精査。埴輪底部を1箇所確認。
- 10月31日 現地説明会実施。約100名が見学に来られる。
- 11月1日 第5トレンチの埴輪抜き取り痕らしき造構を掘削。直径は埴輪とほぼ同じ大きさであるが、深さが約30cmあり、埴輪の抜き取り痕ではなく、ピットであることが判明する。第5・6トレンチ埴輪・ピットの平面図・立面図作製。
- 11月2日 第9トレンチ、竪穴式石室実測のための割り付けを行なう。第4・6・8トレンチ埋め戻し。
- 11月4日 第5トレンチ、原位置を留めていない葺石を取り除いていく。上部から転落したと考えられる葺石に混じって、埴輪多数出土。朝顔形埴輪の胴部と考えられる破片に「く」の字形の線刻が連続して見られる。第9トレンチ、石室実測開始。第1・2・3トレンチ埋め戻し。
- 11月6日 第5・6トレンチ間の埴輪列確認のため、幅1.5mのトレンチを設定し、埴輪1基、ピット1基を確認。第7トレンチ埋め戻し。
- 11月8日 第5トレンチの転落石の除去終了。葺石基石が約20~30cmと大きく、後円部から前方部への変換が見事にわかる。更に、その基石の外側に5~10cmの石を敷きつめた、テラス状の部分が確認される。
- 11月9日 第5トレンチ葺石平面図作製のための割り付けを実施、更に南側へ拡張する。第9トレンチ、石室平面図完成、立面図作製開始。
- 11月11日 第5トレンチ土層断面図・葺石平面図作製開始。
- 11月13日 第9トレンチ、石室立面図完成。東壁の遺存状態が悪い部分を掘り下げ、號体下から礫敷を検出。更に礫敷を掘り下げ、墓塙底を確認。
- 11月15日 第9トレンチ、石室墓塙を確認するため精査に努めるが、あまり明確にできず。

11月16日 第5トレンチ拡張部の葺石検出ほぼ終了。しかし、テラス状の敷石を明確にすることができない。テラス状敷石の上面から、土師器の小型丸底壺が細片になって出土した。奥田氏に第5トレンチの葺石石材を鑑定していただく。

11月18日 第5トレンチ拡張部葺石平面図作製。

11月19日 第9トレンチ、崩壊の危険のある東側を除き、墓塚を掘り上げ、写真撮影。図面補正。また、石室南側で排水溝を確認。底部に、石室と同様の礫を充填している。

11月20日 第9トレンチ、排水溝の平面・立面図作製。第9トレンチ埋め戻し。

11月22日 第5トレンチ拡張部葺石平面図完成。石室排水溝の延長を確認するため、第10トレンチを設定し、石室から前方部にのびる排水溝の南端を確認。排水溝先端はピットにつながる。

11月27日 全トレンチの埋め戻し終了。

第Ⅰ期（1983年）

2月4日 調査予定地2,700m²全域に、方位に合わせ、10m²区画の杭を打つ。

地形上、重機の導入が不可能なため、総て人力で掘削することになる。

2月7日 北西部より掘削開始。土器片・埴輪片出土。100m²ごとに写真・土層断面図作製。

2月17日 南西部掘削開始。

3月5日 C—3区から、玉手山9号墳とは異なる円筒・形象埴輪片出土。

3月11日 中央部南より掘削開始。

3月19日 F—4区から、弥生式土器（壺・甕・高杯）少數出土。

3月29日 F—4区で、東西方向の道状遺構検出。階段状部分も一部に見られる。遺構は更に東へのびるが、E—4区東端で地山が平坦面をなし、遺構はこの平坦面と関係あると思える。9号墳前方部へ登る墓道ではないかと考える。

4月4日 G—4区で、南西から北東へのびる道状遺構検出。

4月5日 G—4区道状遺構は途中で二本に分かれ、それぞれ階段状を呈する。特に、東側は明確な階段となる。また、それぞれの階段の東側（山側）で溝を検出。墓道であろう。

4月6日 G—4区道状遺構は、攪乱で切られており、どの方向へのびるかを確認できない。おそらく、くびれ部に統くのであろう。

4月9日 F—4・G—4区の道状遺構平面実測のため、割り付けをする。

4月11日 F—4・G—4区の道状遺構平面実測開始。

4月26日 中央部の調査が終了。E—5区掘削開始。E—4区の地山平坦面が更に広がっていることを確認。調査中止命令が出され、28日で調査を終了することにする。

4月28日 F—4・G—4区の道状遺構を保存するために埋め戻す。調査終了。

第二章 位置と環境

1. 地理的環境(図1～3、図版1)

玉手山9号墳は、南北にのびる玉手山丘陵上に位置する。玉手山丘陵は北の大和川、東の原川、西の石川、南の駒ヶ谷によって限られ、独立丘陵の觀をなすが、地質的には生駒山地の一部に含まれるものである。丘陵は、西斜面は急傾斜を示すが、東斜面は比較的緩やかな傾斜を示し、西斜面には入りくんだ小谷が數本存在する。9号墳は西へ広がる比較的大きな谷の最奥部に位置する。玉手山丘陵の最高所は玉手山8号墳後円部にあり、標高102.9m、その南に位置する9号墳は後円部で99.7mの高さを示し、ほぼ最高所に位置することになる。現在、9号墳の南に西名阪自動車道が通り、それ以南は比較的なだらかな景観を呈する。丘陵では、砂礫層と粘土層の互層による大阪層群が広範囲に見られる。9号墳付近も同様に、凝灰岩質の岩盤上に、砂礫層、粘質土層が交互に堆積する。

玉手山9号墳は、西方800mの地を北流する石川からの比高差が約75mもあり、現地に立てば、眼下に古市古墳群が一望できる。また、スマッグに覆われた現在でも、空気の澄んだ日には遠く六甲山や淡路島を望むことができる。また、近鉄南大阪線の車中から、9号墳がよく見える。これらのことから、9号墳は西側、すなわち平野部からの眺望を非常に意識して築造されていると考えられる。9号墳に限らず、玉手山古墳群はほぼ同じような立地条件のもとに築造されており、丘陵上に、葺石に覆われた前方後円墳が累々と並ぶ様は、平野部の人々の目に、さぞかし異様に映ったことであろう。

2. 歴史的環境

玉手山丘陵上では、これまでに数点のサスカイト製旧石器が採集されており、その歴史の古さを物語っている。しかし、これまでのところ、その発見は丘陵北端近くに限られている。なお、縄文時代の遺物は石器以外は未発見である。

弥生時代になると、玉手山6号墳下で円形竪穴住居址が発見されており、銅鐸の出土を見る。また、玉手山出土と伝えられる後期の銅鐸がある。最近の調査でも、1号墳の西側で若干の弥生式土器が出土しており、今回の調査でも、9号墳西側から弥生式土器が出土している。また9号墳南東一帯に弥生時代後期の土器が散布する五十村・駒ヶ谷遺跡が存在する。このように、玉手山丘陵一帯に、丘陵頂部からやや西側にかけて弥生式土器の出土を見ることができ、その大部分が後期のものである。標高は100m弱ではあるが、高地性集落と考えてよいであろう。遺構が乏しいため、性格を論することはできないが、石川対岸に位置する著名な船橋遺跡・国府⁽¹⁾遺跡との関係を無視できないと考えられる。



図1 玉手山古墳群分布図

古墳時代になると、全長約150mの玉手山7号墳を始め、前期の前方後円墳が尾根上に密集し、全国でも数少ない前期古墳群を形成する。これが玉手山古墳群であり、玉手山9号墳もその一つである。各古墳は未調査のものが多く、調査済みのものも報告されていないため、著名であるのに反し、実態が把握されていないのが現状である。⁽²⁾

玉手山1～3号墳は正式な調査が実施されていないが、1号墳裾部の調査で出土した円筒埴輪は5世紀初頭前後と考えられる。また、安福寺境内にある剣抜式割竹形石棺の蓋が、3号墳から出土したと考えられている。この石棺は、香川県鷲の山産の石材が使用され、その縁部に直弧文の線刻が見られる。また、3号墳後円部には粘土櫛があり、鉄器類が出土しているということである。4～6号墳は、開発のため、緊急調査の後に破壊されてしまった。いずれも、正報告が出されていないため、詳細は不明である。4号墳は後円部中央に竪穴式石室、その西に粘土櫛が存在し、4号墳の東側から箱式石棺と埴輪円筒棺が発見されている。⁽³⁾ 5号墳も後円部中央に竪穴式石室、その西に粘土櫛が存在し、前方部にも粘土櫛が二箇所に存在した。⁽⁴⁾ 6号



図2 玉手山9号墳位置図（昭和45年）



図3 玉手山9号墳位置図（昭和53年）

墳は後円部に二基の竪穴式石室が築かれていた。いずれも玉類、鉄鎌、銅鎌、鉄製工具類などを出土しており、6号墳東竪穴式石室から内行花文鏡、西竪穴式石室から画文帶神獸鏡が出土している。⁽⁵⁾ 7号墳の後円部からは、滑石製盒子が採集されている。⁽⁶⁾ 8号墳は未調査であるが、1982年8月の豪雨によって西斜面下で地滑りが起こり、そのために徐々に墳丘が崩壊し始めた。崩壊する過程の観察から、墳丘はほとんど地山整形によって築かれていることが判明した。また、前方部中央に土塚が認められ、埋土から土師器小片を数点採集したが、埋葬施設と考えるのは困難である。埴輪は採集されていない。現在、前方部は崩壊してしまい、後円部のみが残る。10号墳とされている北玉山古墳は関西大学から報告書が出されているが、西名阪自動車道建設によって破壊された。その際の緊急調査の概報も大阪府教育委員会から出されている。それによると、後円部には竪穴式石室があり、硬玉製勾玉、滑石製勾玉、碧玉製管玉、銅鎌、鉄鎌、斧、鎌先、鎌、鉢、刀、劍、土師器壺が出土している。前方部にやはり枯土壠があり、捩文鏡、劍、砾石が出土している。更に、南側の駒ヶ谷周辺に宮山古墳を始め、数基の古墳が存在し、埴輪をたて並べた祭祀構造と考えられるものも発見されているが、玉手山古墳群は、地形上から、北玉山古墳までを一古墳群として把握するほうが適切と思われる。

玉手山古墳群の東、大阪平野に流れ込む大和川を見下ろす位置に、松岳山古墳が存在する。竪穴式石室内に長持形石棺の粗型とみられる石棺を有し、石室の両端に有孔立石がたつ。石棺内には多量の鉄製品が副葬されていた。その周辺にも数基の古墳が存在したようであり、三角縁神獸鏡などの出土を見る。

古墳時代中期になると、玉手山丘陵の西、石川の対岸に大規模な古市古墳群が展開する。玉手山古墳群は中期になると、古墳の数も規模も急速に縮少されるようであるが、全く存在しないわけではない。小円墳の西山古墳は小形の竪穴式石室を有し、四獸鏡・劍が出土している。⁽⁷⁾ また、丘陵北端の片山庵寺西側から三角板鉢留短甲形埴輪が出土している。1982年の片山庵寺塔跡調査の際にも、5世紀後葉の円筒埴輪片が數点出土している。片山庵寺南西の調査の際にも5世紀中葉頃と末葉頃の円筒埴輪・大型の家形埴輪片・須恵器などが出土しており、前方後円墳になる可能性もある。このように、玉手山丘陵にも中期の古墳が存在したことが確認されできた。特に、丘陵北端部では、前期以来、断絶することなく、古墳の築造が行なわれていたようである。

後期になると、柏原市域では大和川対岸の高井田横穴群・平尾山古墳群が著名である。玉手山丘陵では、5号墳近くに円墳の東ワカ山古墳が存在した。横穴式石室内に凝灰岩製の組合式家形石棺が置かれていた。また、8号墳北東に、やはり横穴式石室をもつ円墳が存在する。これら以外にも、おそらく存在するであろう。更に、安福寺横穴群、玉手山東横穴群がある。いずれも、凝灰岩の岩盤に営まれた横穴古墳群であり、後者は宅地造成によって、ほとんど破壊されてしまった。また、两者ともに、陶棺を使用した例があることも注目される。

このように、玉手山丘陵には多數の古墳が存在するが、古墳時代の集落遺構はほとんど確認されていない。唯一、片山廃寺塔跡下層から、6世紀後半と考えられる掘立柱穴、溝が発見されているにすぎない。玉手山丘陵は、古墳時代には墓域として意識されており、集落は他の地にあったためであろう。

古墳の築造が終わると、寺院の建立が始まる。柏原市域は古代寺院の密集地であるが、玉手山丘陵周辺でも、片山廃寺、原山廃寺、五十村廃寺、玉手廃寺、円明廃寺などが知られている。また、9号墳の西方で、奈良時代から平安時代にかけての火葬墓群が発見されており、中世の墳墓と考えられる遺構も近くで確認した。また、9号墳西方の丘陵裾部付近は、安宿郡郡衛路⁽⁸⁾としての可能性をもつ地域である。

その後、玉手山丘陵は南北朝争乱、大坂夏の陣の舞台にもなっている。最近では、葡萄畑の開墾がなされ、現在は、宅地開発の波が丘陵斜面を駆け上っている。柏原市域は平野部が少ないので、ある程度の開発はやむを得ないととも思うが、これまでの開発は乱開発以外の何ものでもない。柏原市は、これほど重要な遺跡を破壊し、自然を破壊してきたことを深く反省し、今後、この教訓を生かしていかねばならない。しかし、現在、この誤ちに気付いている人がほとんどいないのが残念である。

註

- (1)『柏原市史』第二巻 本編 (I) 1973
- (2)以下の記述は、森浩一「古墳文化と古代国家の誕生」『大阪府史』第一巻 1978、石部正志『大阪の古墳』1980、に負うところが多い。
- (3)大阪府教育委員会『南河内石川流域における古墳の調査』大阪府文化財調査報告第20編 1970
- (4)北野耕平「玉手山古墳の調査」『大阪府の文化財』1962
- (5)白神典之「玉手山七号墳採集の石製盒子」『史泉』第56号 1981
- (6)関西大学文学部『北玉山古墳』関西大学文学部考古学研究紀要第1冊 1963
井藤 徹『北玉山前方後円墳発掘調査概報』大阪府教育委員会 1966
- (7)小川五郎・水野清一「河内国玉手山西山古墳調査報告」『考古学雑誌』第19巻8号 1929
- (8)古代を考える会『玉手山遺跡の検討——推定河内国安宿郡郡衛遺跡——』古代を考える? 1976

第三章 玉手山9号墳の調査

1. 墳丘（図4～10、図版2～7）

墳丘の調査は第Ⅰ期調査において、第1～8トレンチによって実施した。以下、各トレンチごとに、葺石、層序、埴輪について記述する。

①第1トレンチ

後円部の最も北寄りのトレンチで、 $1.5m \times 7m$ である。第1トレンチ周辺では、一部葺石が露出しているところがある。

葺石は三段状に検出された。上段は20cm前後の比較的大型の石が多く、中段は5～10cmの小型の石、下段は20cm前後の大型の石の下に5cm前後の小石がみられる。上段の葺石は、その大きさ、遺存状況から考えて、葺石基石と考えられる。おそらく、後円部第二段の葺石基石であろう。基石上面でのレベル高はTP 96.4mである。中段の葺石は、その直下に松の根があったためによく残っていた。松の樹令は20～30年のものであり、逆に言えば、20年程前までは、葺石は、墳丘全面にわたってかなり残っていたであろうことを想像させる。下段の大型の石も、葺石の基石と考えられる。これは墳丘第一段、つまり墳丘基底部の基石である。基石上面でのレベル高はTP 93.7m。その外側の小石は、転落石と考えられる。

第1トレンチでは、地山は確認されておらず、後円部北側は、全面にわたって盛土が実施されていることを示すが、一部地山の露出している部分もあり、盛土量はそれほど多いとは思えない。盛土の最下層は黄灰色砂質土、その上に赤褐色粘質土、再び黄灰色砂質土と続く。葺石が転落している部分にみられる暗赤褐色粘質土は流出した封土と考えられる。第一段斜面の復元傾斜角は31°、第一段テラスの復元高TP 96.3m、幅0.8mとなり、第一段葺石基石と第一段テラスの水平距離4.3m、高低差は2.6mとなる。

埴輪はあまり出土していないうえ、小片が多いが、円筒埴輪の底部1点をある程度接合できた。第1トレンチ周辺の第一段テラスに樹てられていたものであろう。

②第2トレンチ

後円部北西部分にあたり、 $1.5m \times 16m$ である。

葺石が0.7mの幅に検出された。これは、墳丘基底部の葺石基石、およびその上部の葺石である。基石には20cm前後の石が使用されており、それより上は、10cm前後の石を使用している。基石上面のレベル高はTP 93.4mである。

この葺石より約0.6m下がると、やや粘質の赤褐色砂礫土の地山が見られるが、やはり、墳丘全面にわたって盛土が実施されている。封土は主として黄灰色砂質土であるが、第一段テラスと思われる部分は、赤褐色粘質土と黄灰色砂質土を細かい単位で積みあげている。しかも、土



图4 玉手山9号墳調査地区全体図

層上面は水平になっており、版築状の断面を呈する。土を積みあげる際に、少しづつ固める行為を繰り返したのである。また、粘質土と砂質土を意識的に交互に積みあげたと考えられる。第一段斜面の復元傾斜角は32°、第一段テラスの復元高TP96.1m、幅0.9mとなる。第一段テラスより0.7~0.9m上面にも細かい水平層がみられる。第一段葺石基石と第一段テラスの水平距離4.3m、高低差は2.7mとなる。原位置を留める葺石はわずかであったが、墳丘盛土は、比較的よく残っていると考えられる。埴輪はあまり出土していない。

③第3トレンチ

後円部西側にあたり、1.5m×20mである。

第3トレンチでは、葺石は全く遺存せず、封土の流失も著しい。TP94.1m以下に、黄褐色砂質土の地山がみられる。地山は28°前後の傾斜をもつ。地山であることを確認するため、黄褐色砂質土を掘り下げたが、地山であることは間違いないと考えられる。また、墳丘をめぐる周溝等の存在の有無を確認するため、西方へ拡張したが、これらは発見されなかった。埴輪はあまり出土していない。墳丘基底部も明確にできなかった。

④第4トレンチ

後円部南西部分にあたり、1.5m×23mである。

葺石は、推定墳丘基底部付近に約1mの幅で遺存していた。しかし、基石は残っておらず、基石よりやや上部の葺石である。大きさは10cm前後の石が多い。

TP93.6m以下で黄褐色砂質土の地山がみられ、それより上は盛土である。TP93.6m付近が墳丘基底部にあたると思われる。封土は、主に黄灰色砂質土であるが、TP96mから96.6mにかけて、第2トレンチと同様の黄褐色砂質土と赤褐色粘質土の細かい水平層が確認された。これを、やはり第一段テラスと考えてよいならば、第一段テラスの復元高TP96.6mとなり、基底部との高低差は3m前後となる。トレンチ西端近くには、転落した葺石がかなり埋没していた。第3・4トレンチは9号墳西側の深い谷に向かうトレンチであり、その地形のために、かなりの封土流失が認められる。埴輪の出土数は少ない。

⑤第5トレンチ

くびれ部にあたり、葺石・埴輪の遺存状態が良好であったため、二度の拡張を行なった。そのため、トレンチは変形L字状をなし、一部第6トレンチに接する。面積は約100m²。

転落石と原位置を留める葺石の識別に苦慮したが、転落石を全て除去した後は、後円部から前方部に移行する見事な葺石基石列が検出された。基石は20~30cmの大型の石を使用しており、斜面の葺石には5~15cmの大きさの石を使用している。

基石上面のレベル高は、後円部の最も北寄りの基石が、TP93.66mを測る。その基石からくびれ部にかけて少しづつ高くなり、くびれ部に位置する基石はTP94.00mである。約5.4mの間に0.34m高くなっている。くびれ部から前方部にかけての基石は、多少の高低差がみられる

ものの、総じてTP93.9m前後の高さを示す。後円部の基石はなめらかな円弧をなさず、直線に並んだ基石列が、1.5m前後で、6°前後の角度をなして屈曲しているようである。これは、明確にできたものではないが[†]、1.5m前後で基石の並べ方がやや乱れ、また、基石の上に更に一段、基石とほぼ同大の石を積み上げる部分と、小型の石を積み上げる部分がみられ、これも1.5m前後の間隔を示す。葺石の葺き方は、これまでにもいくつかの古墳で論じられている。本古墳では明確にできなかったが、敢えて考えるならば、1.5m前後の間隔が作業単位を示すのかもしれない。

葺石は、総て第一段斜面のものであり、くびれ部付近で良好に遺存しており、前方部へ向かうにつれて遺存状態は悪くなる。第一段斜面の傾斜角は後円部で31°、くびれ部で37°、前方部で34°と復元できた。墳丘に盛土が行なわれていない部分では、地山に直接、葺石を葺いている。

葺石基石の外側には、5~10cmの小石を敷きつめた幅2.8mのテラス状遺構が認められた。特に、くびれ部基石付近では、小さい石を丁寧に敷きつめており、傾斜角は8°であるが、前方部へ向かうにつれて石の大きさは不揃いになり、転落石との区別が困難になる。傾斜角も14°と大きくなる。この敷石は、明らかに葺石基石設置後に敷かれている。おそらく、葺石を築いた後の作業によるものであろう。くびれ部の葺石基石から約1.8m南西のテラス状遺構上面から土師器の小型丸底甌が1点出土している。埴輪はテラス状遺構上面、およびテラス状遺構を覆っていた転落石の間から多数出土している。

土層は、トレンチ東側、つまり墳頂に近い部分は、赤褐色砂礫土の地山が表土直下にみられる。トレンチ中央部では、TP95.5m付近からこの地山は深くなるようであり、その部分には黄灰色砂質土の盛土がみられる。そして、トレンチ西端近くになり、黄褐色砂質土の地山が現れる。トレンチ南壁では、墳丘部分は総て赤褐色砂礫土の地山であり、テラス状遺構は灰褐色砂質土を置いている。

埴輪は、原位置を留めるもの2個体と、抜き取り跡1箇所を確認した。各埴輪間の距離は2.7mであり、通例よりも広い。また、埴輪の中間位置に、ピットが3個確認された。ピットの間隔もやはり2.7mであり、埴輪列より約20cm外側に並ぶ。

⑥第6トレンチ

前方部西側にあたり、1.5m×13mである。

葺石は、比較的広範囲で検出されたが、転落が著しく、積み上げている状態は全く留めていない。それゆえ、原位置を留めているかどうかは充分確認できなかった。TP94m付近に、比較的大型の石が残る。基石は確認できなかったが、TP93.8~94m付近に基石が存したものと思える。それ以下は5cm前後の小石が多く、第5トレンチで確認されたテラス状遺構に続くものと思えるが、18°の傾斜を示し、盛土の流失を考えても、少し傾斜が強すぎるようにも思える。トレンチ東端近く、TP95m付近に基石と思える大型の石が5個残っていた。この大型の石の

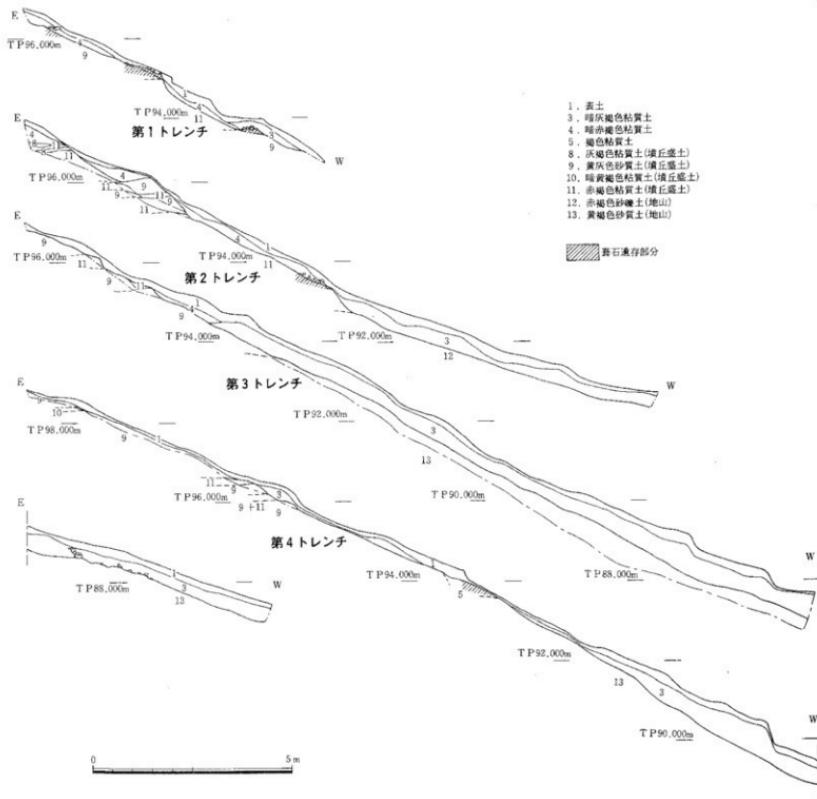


図 5 土層図①

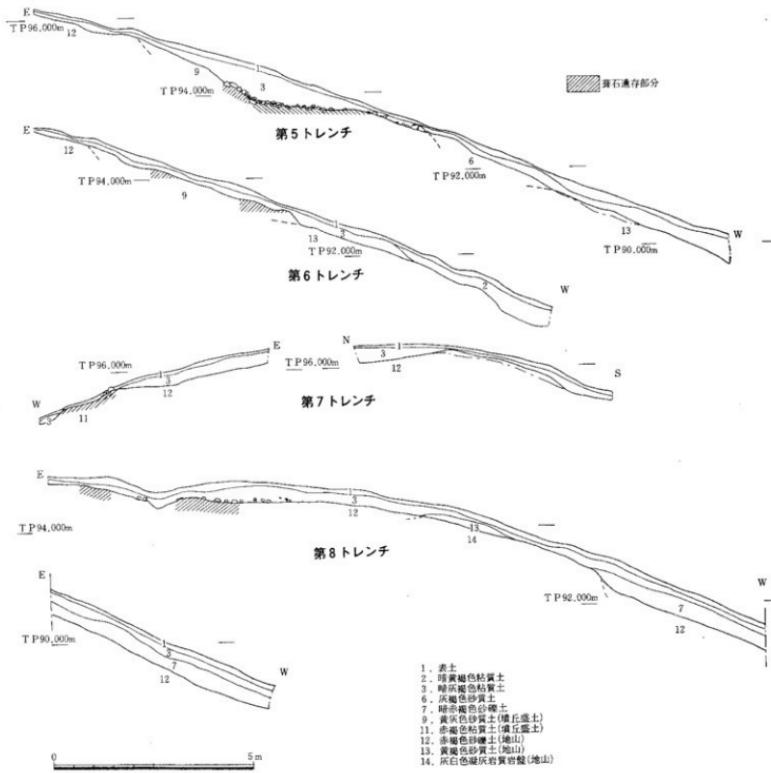


図6 土層図②

すぐに西側に円筒埴輪が残っていたことから、墳丘第二段の基石と考えられる。第一段テラス幅は不明であるが、第5トレンチの状況も合せ考えると、0.8m前後と思える。墳丘基底部をTP93.9mの位置とし、第一段テラスの幅を仮に0.8mとすると、第一段斜面の傾斜角は29°、水平距離2m、高低差1.1mとなる。土層は、やはり東端で赤褐色砂礫土、西半で黄褐色砂質土の地山がみられ、その間は黄灰色砂質土の盛土が行なわれている。埴輪は比較的多く出土している。先述したように、原位置を留める円筒埴輪底部が1個存在した。これは、第5トレンチの埴輪列に続くものであるが、ピットは検出されていない。

⑦第7トレンチ

前方部先端近くの墳頂部から西側にかけて、1.5m幅でL字状にトレンチを設定し、その後、崖面で土塁状の遺構が確認されたため、北側へ拡張した。

葺石の遺存状態は、あまり良好でなかった。葺石はTP95~95.6m付近に残り、おそらく、第二段基石付近の葺石と考えられるが、基石と確認できるものは残っていない。葺石遺存部分の土層は赤褐色粘質土の盛土であるが、その他の部分では、總て赤褐色砂礫土の地山が確認された。地山の最高所はTP96.4mを測り、なだらかな傾斜を示す。

第7トレンチは、前方部における埋葬施設の有無を確認する目的で設定したが、土塁状の遺構が確認されたのみである。土塁状遺構は、過去に東側が削平されているために、その形状を知り得ない。赤褐色砂礫土の地山を掘り込んだものであり、埋土は暗黄褐色砂質土、壁面は比較的なだらかな傾斜を示し、深さは最深部で0.85mである。遺物は全く出土していないが、石室に使用されている安山岩の板石が3点出土した。粘土層の可能性も考えてみたが、粘土は全くみられない。しかし、推定墳丘復元図のほぼ主軸上に位置するため、埋葬施設の可能性を全く否定できないものである。

⑧第8トレンチ

前方部先端から西側にかけてのトレンチで、1.5m×23.5mである。

葺石は、前方部前面の第二段斜面葺石の基石が一部残っていた。基石上面のレベル高はTP94.8m前後である。基石の大きさは約20cm、斜面の葺石は10~15cmの石が多い。基石の外側からは、比較的大きな埴輪片が出土している。第8トレンチの2m南側は10m以上の高さの崖面となっており、前方部前面基底部は遺存しない。しかし、この基石によって、墳丘全長をほぼ復元することができる。遺存する葺石は、いずれも赤褐色砂礫土の地山上に直接置かれている。また、葺石が途切れる部分から西にかけて、灰白色の凝灰岩質岩盤の露頭がみられる。

註

- (1) 数値はいずれも概数である。
- (2) 段築は下方から第一段とする。第一段テラスとは、第一段斜面と第二段斜面の間をさす。



図7 磨石実測図①

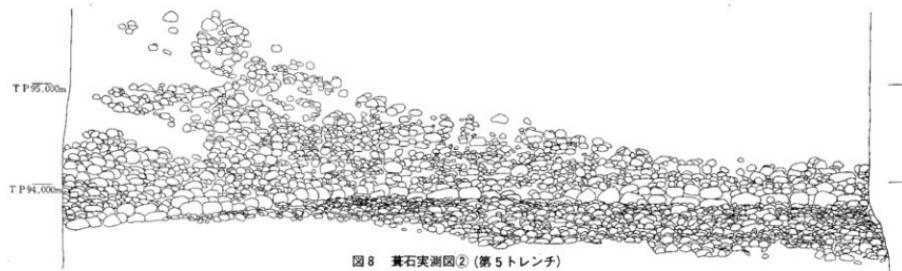


図8 箕石実測図②(第5トレンチ)

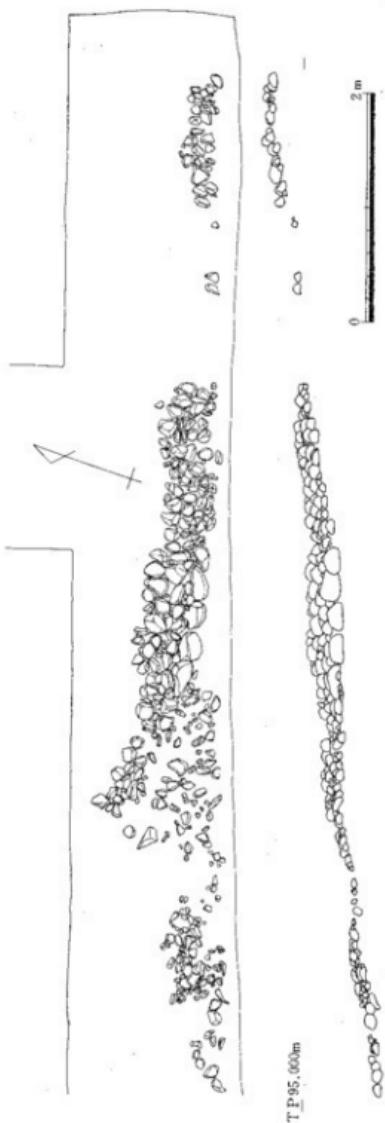


図9 磁石実測図③(第8トレンチ)

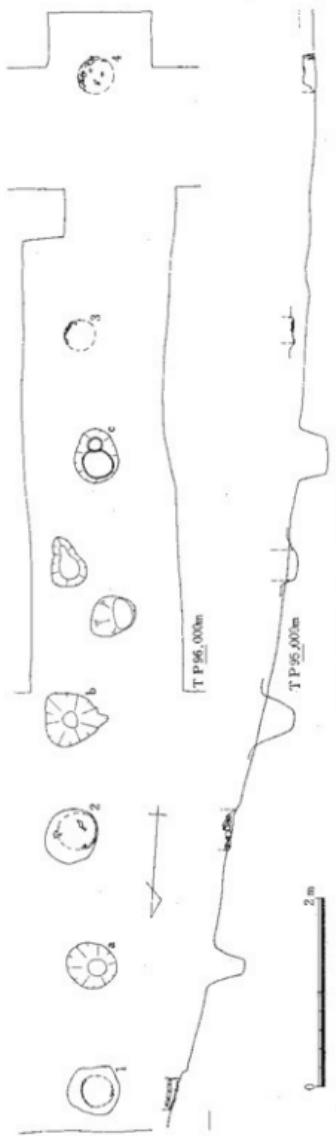


図10 墓輪・ビット列実測図

2. 穫穴式石室（図11、図版8～13）

石室は、安山岩の板石を積み上げて築かれた竪穴式石室である。石室内は、過去に数回の盗掘を受けており、石室の床面近くからビニール袋、空き缶が出るといった状況である。また、石室中央部には、東西方向のトレンチらしき痕跡が認められた。

調査着手前から、石室部分はかなり落ち込んでおり、安山岩の板石が散乱していた。石室の調査は、この石室内の擾乱土を取り除くことから開始した。埋土内からは、崩壊した安山岩の板石や朱の付着した礫が多数出土しており、盗掘のひどさを物語っている。石室内から出土した遺物は鉄剣先のみである。また、墓塚確認の際、石室の南側で排水溝も確認できた。

①墓塚

墓塚は隅丸長方形をなし、東西6m、南北9.3mと推定されるが、南端はやや狭くなった後、更に前方部へ向けてのびている。これは、排水溝を築くための掘り方と考えられる。墓塚は、2m強の深さをもち、二段に掘り込まれている。墓塚上面から約70cmの深さの位置にはテラスがみられ、テラス幅は墓塚北側で約30cm、西側で約50～70cmである。墓塚上面の高さは、北西の最高所でTP99.3m、東側の最低所で98.4mを測る。本来の高さはTP99.5m前後であろう。テラスの高さは、墓塚北端中央でTP98.6m、西側では平均してTP98.5m、南端ではTP98.2mとなる。墓塚底は、墓塚底まで擾乱を受けていた石室中央部と、遺存状況が最も悪かった石室北寄りの東壁下で確認した。石室の復元を実施する余裕のない今回の調査では、むやみに石室材を取り除くことは不要であると考えたため、この二箇所で墓塚底を確認したにすぎない。しかし、この二箇所で、墓塚底の構造は、ほぼ推定できる。石室中央部では、長さ120cm、幅30cmの範囲に地山が露呈された。この範囲では、地山はほぼ平坦になっており、TP97.2mを測る。東壁下では、長さ30cm、幅40cmの範囲で確認した。それによると、側壁下に約25cmの礫敷があり、底面はTP97.2mを測る。この二箇所は、約2m離れており、同一レベルであることから考えると、墓塚底は周溝や基台状敷設をもたない平坦面をなし、そのレベル高は、中央よりやや北にかけて、TP97.2mとなる。

墓塚は墳丘盛土から掘り込まれており、墳丘築成後に掘られたことがわかる。墓塚壁面は、テラス面近くまでは26～30°の傾斜をなし、テラス面近くで55°前後と傾斜が強くなる。テラスの位置を設定した後、再度、テラス面を広く平坦にとるために整形されたので、傾斜が強くなっているのであろう。テラスは、墓塚北半では墳丘盛土である暗黄褐色砂質土を掘り込み、赤褐色砂礫土の地山上面をテラス面としており、南半では暗黄褐色砂質土をテラス面としている。これは、旧地形が北から南へ下がっていたために生じた現象にすぎないが、テラス面の高さが北側を基準にされていることを示す。つまり、墓塚が北から掘り始められたか、あるいは墓塚の荒掘りが終わった後、北から順に整形されたことを示すと考えられる。テラスの幅が、北で狭く、南で広くなっていることは、長方形の墓塚でありながら、石室平面が北で広く、南で狭

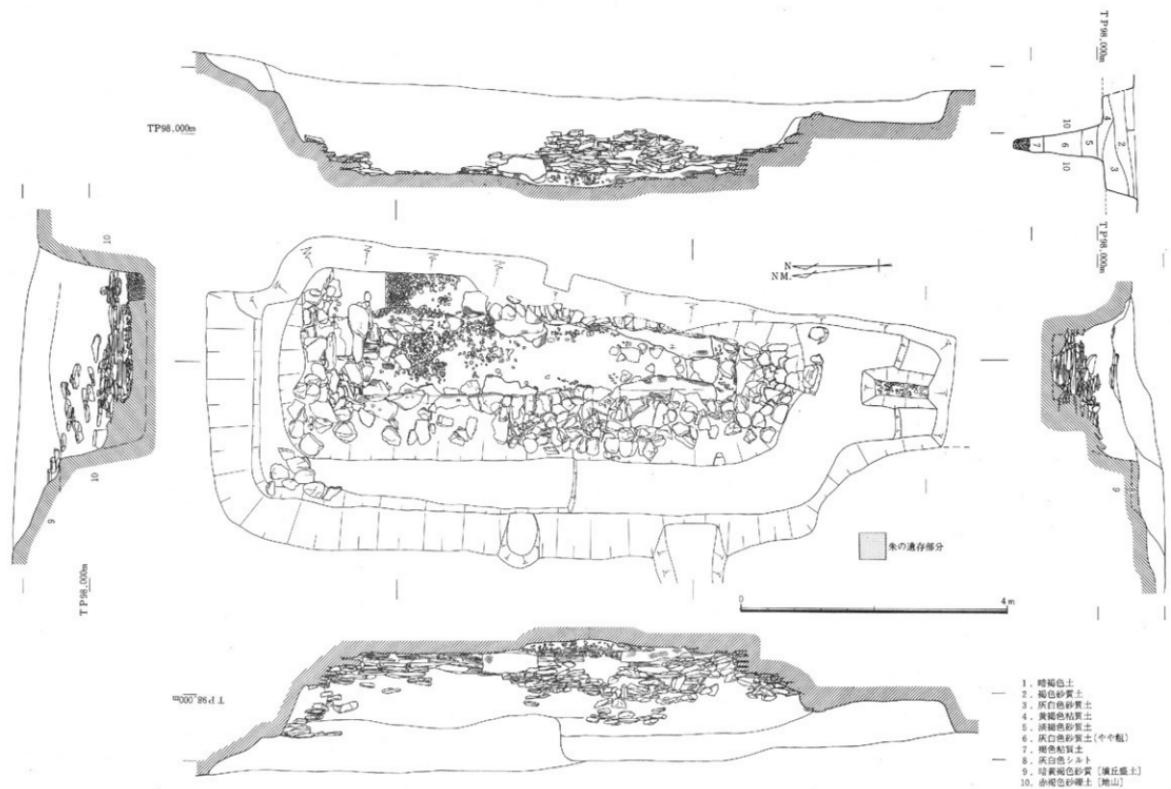


図11 積穴式石室実測図

い台形となっていることによるのであらうが、南では崩れやすい墳丘盛土をテラス面とせざるを得なかつたために、広いテラスをとつたとも考えられる。あるいは、これを考慮して、墓塚平面を長方形としたのかもしれない。

テラスから墓塚底面にかけて、北端では65°であるが、西側では75~80°の強い傾斜を示す。竪穴式石室の壁面としては最も傾斜の強い例の一つであるが、それは、堅固な赤褐色砂礫土の地山を壁面とするために可能だったのであらう。

なお、墓塚底面の傾斜は今回の調査では確認できていないが、北から南へ非常に緩やかに傾斜しているであらうと考えられる。

②竪穴式石室

石室壁体は良好な部分で床面から約60cm、平均約40cmの高さを残す。底部のみであるが、四壁が残っていたため、石室の平面プランはほぼ確認できた。石室内法の床面での長さ558cm、北端幅128cm、南端幅92cmの台形平面をなす。また、石室主軸は1°以内の誤差で真北を指す。当然、幅の広い北側に頭の位置があつたのであらう。

石室材の安山岩には、割石と自然石が併用されている。底面付近では長さ50~60cm、幅20~30cm、厚さ5~6cmの板石を使用しており、上部では長さ30cm、幅20cm、厚さ4~5cmの板石の使用を見る。しかし、石の大きさ、厚さが一様でないため、構築は比較的粗雑である。壁体下には、5cm前後の礫を用いた厚さ25cmの礫敷が施されている。壁体は、ほぼ垂直に積み上げられており、上部においては若干の持ち送りも考えられる。壁体の控え積みは明確にできず、礫の使用も考えられるが、大部分は板石を使用していたようであり、間隙が少なからずあったようである。壁体はTP97.7m前後、下部から4~5段でやや積み方が変わり、この面で一時積み上げを休止したと考えられる。また、この面より下部の石材の石室内側の面には、朱がよく残っている。

石室上部の構造は不明であるが、北端で墓塚のテラス上に板石が並べられている状態が観察され、南半でテラスに置かれた板石を覆う状態で灰白色の粘質シルト層が確認されており、テラス面に最上段の板石が置かれ、天井石を架構した後、灰白色の粘質シルトによって、全面を覆ったものと思える。すなわち、テラス面が事実上の石室上面と考えられる。このように考えるならば、壁体の高さは100~115cmと復元できる。

粘土棺床は、中央部と南端近くで遺存したが、他は総て取り除かれている。粘土棺床下には、礫敷の上に厚さ約3cmの安山岩板石がほぼ全面に敷かれており、礫敷にも板石にも朱の痕跡が認められる。粘土棺床に使用されている粘土は、白色の良質粘土であり、玉手山丘陵ではみることのできないものである。中央部に残る粘土棺床は、約30cmの高さがあり、最高所でTP97.68m、下部で97.35m前後である。削竹形木棺の曲面を残し、朱もよく遺存している。粘土棺床の湾曲から木棺の大きさを復元すると、中央部では直径90cmとなる。南端近くに残る粘土棺床は、

約20cmの高さを残し、最高所でTP97.52m、下部で97.3m、木棺復元直径は約70cmとなる。このように復元すると、石室主軸線上の粘土棺床の厚みがほとんどないことになる。あるいは、粘土棺床は木棺を固定するために両脇に置かれただけで、中心部には置かれなかったのかもしれない。

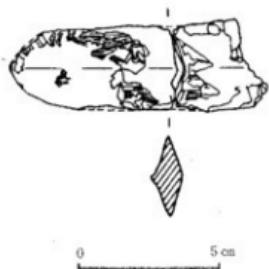


図12 鉄剣先実測図

以上のことから割竹形木棺の大きさを復元すると、長さ500cm強、北端での直径約100cm、南端での直径約70cmとなる。しかし、南北両端で粘土棺床が遺存しておらず、その小口の状態は不明である。

石室内からは、鉄剣の小片が2片出土したのみである。2片は接合でき、鉄剣先となる。この2片は石室中央の西壁板石上で検出されたのであるが、原位置を留めているとは考えられない。接合すると、現存長9.0cm、幅2.8cm厚さ1.2cmとなり、断面菱形を呈する。両面に劍身と平行する木目が遺存している。これ以外には遺物は出土していない。(図12、図版12・16)

③排水溝(図11・13、図版13)

墓塙を追求したところ、石室南端付近で墓塙は一度狭まった後、更に前方部へ向かってのびていることが確認された。そのため、排水溝の存在が想像され、これを確認することにした。

排水溝は、石室から直に南にのびており、赤褐色砂礫土の地山を掘り込んで築かれている。排水溝は上端での幅58cm、底部での幅12cm、深さ136cmを測る。底部のレベル高はTP96.72m、墓塙中央部底面との高低差は約50cmある。未確認ではあるが、おそらく、石室南端付近から深く掘り込まれているのであろう。

排水溝底部には、石室床面と同様の礫を25cmの厚さに充填している。礫層の上は、褐色土、灰白色砂質土、淡褐色砂質土の順に埋土が変化する。堅い地山に、狭く深い排水溝を穿つのは容易な作業ではなかったであろうと想像される。

排水溝の末端は、くびれ部で終わる例が多いが、西側くびれ部でも、墳丘東側の崖面でも確認できないため、前方部へ向かってのびるのではないかと考えた。そこで、石室主軸上、TP96.5m付近に、1.5m×2mの第10トレンチを設定した。

第10トレンチでは、表土直下に赤褐色砂礫土の地山が確認され、この地山を5~10cm掘り込んだ溝の中に、3~15cmの大きさの石が無秩序に積まれている状態が検出された。溝は、70cmの幅を有し、底面でのレベル高TP96.4m、第10トレンチ中央でやや東に向きを変え、ピットにつながり、終わっている。この溝は、石室主軸上に位置するので、排水溝の末端と考えて間違いないであろう。すると、排水溝の全長は、11.5m強となり、底面での高低差30cmとなる。

しかし、石室のすぐ南で確認した部分とは異なり、葺石に使用している石と礫が混じった状況であり、幅も広くなっているのが興味深い。

排水溝の末端が取りつくピットは南北径54cm、東西径59cm、深さ71cmを測る。埋土は褐色土と灰白色砂質土からなり、遺物は出土していない。埋土からは柱穴と考えることも可能である。墳丘主軸上に何らかの立物があったのかもしれない。しかし、排水溝の末端がとりつくことを考えれば、水溜めのピットと考えるほうが自然であろう。ところが、このピットに溜った水は流れ出ることがなく、墳丘に盛土を築くことによって埋められてしまえば、水溜めとしての機能はあまり果たせないことになる。水溜めのピットであるならば、盛土を置かず露呈されていたか、蓋状の施設を想定することも可能であろう。

石室調査中に数回、雨に降られたが、石室内に、雨が溜まることはなかったので、現在でも、排水溝がある程度の機能を果たしているのであろう。しかしなぜ、排水溝をくびれ部へ向けずに、前方部へ向けたのか、理解に苦しむ。

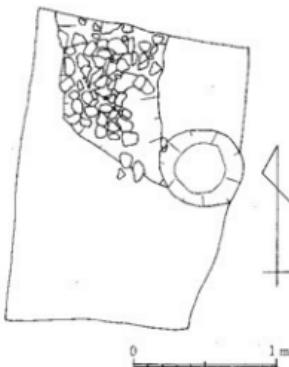


図13. 石室排水溝実測図

3. 遺物

①土器 (図14、図版16)

小型丸底壺1点のみ、くびれ部よりやや前方部よりのテラス状造構上面から出土した。転落した葺石で潰され、細片になっていたが、約半分を復元できた。

復元口径16.8cm、推定高12.3cm、体部は球形をなし底部は丸みをもつと思える。口縁は頸部からほぼ直線状にのび、端部は丸くおさめる。口縁部はヨコナデを施し、体部は内外面ともナデ調整であり、少し凹凸がみられる。焼成良好、胎土は密、石英、長石を含む。色調は淡褐色であるが、一部赤変、黒斑を有する。

②埴輪 (表1・2)

埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪に限られ、形象埴輪は出土していない。埴輪はコンテナに約5箱分出土したが、小片が大部分を占める。

円筒埴輪口縁部 (図15・図版16)

朝顔形埴輪を除く、円筒埴輪の口縁部46点を観察、8点を図化した。a～gの7類に分類したが更に細分可能であり、個体差が著しい。

a類(1)は、直立気味に弱く外反する口縁で、端部は丸くおさめるものと、平坦面をなすものがある。3点、6.5%。3点の中、2点が外面タテハケ、1点がヨコハケを施し、ハケ調整を基本とする。厚さは8mm前後で、他と比べ、やや厚い。

b類(2～5)は、端部近くで外方に屈曲し、端部は肥厚する。8点、17.4%。総て内外面ともナデ調整を施す。

c類(6)は、やや外反の強いもの。6点、13.0%。総て内外面ともナデ調整を施す。

d類(7・8)は、弱く外反し、端部が肥厚する。17点、37.0%で、最も多い。外面をタテハケ、内面をヨコハケとナデ調整するものと、内外面ともナデ調整するものが約半数ずつを占める。

e類は、外方に鋭く屈曲し、端部は平坦面をなす。1点のみである。内外面ともナデ調整を施す。

f類は、端部が下方へ折り返した状

口 縁	a	b	c	d	e	f	g
体 部							
a							
b							
c							
d							
e							

表1 壁輪分類表

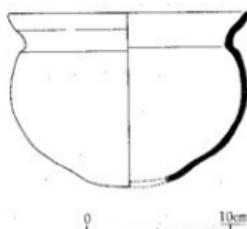


図14 土器実測図

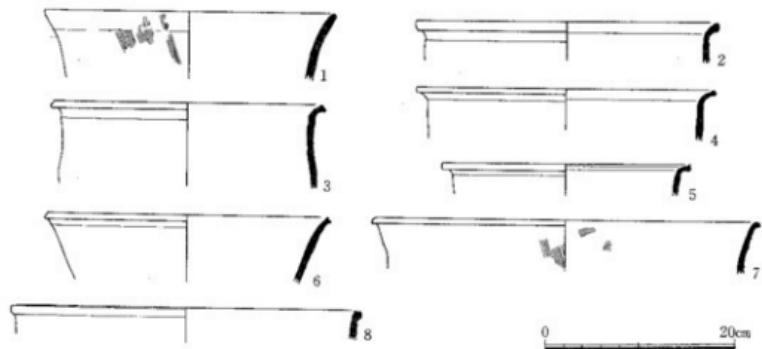


図15. 円筒埴輪口縁部実測図

態で大きく肥厚する。8点、17.4%を占めるが、小片が多く、同一個体と思えるものもあるので、実際の比率はもう少し低くなるであろう。総て内外面ともナデ調整を施す。

g類は、端部が凹面をなし、外方へ張り出す。3点、6.5%。朝顔形埴輪に多くみられるタイプであるが、朝顔形埴輪に比べて非常に薄く、厚さは2~3mmである。総て内外面ともナデ調整を施す。

円筒埴輪体部 (図16・17、図版17~19)

円筒埴輪体部は97点を観察、35点を図化した。体部は凸帯によってa~eの5類に分類できる。凸帯による分類は、しばしば試みられることであるが、破片を対象とする場合、一個体内でも各段の凸帯によってその形態が異なり、一本の凸帯でも部分によって異なる場合があるので、充分に注意する必要がある。9号墳の場合は、凸帯の形態そのものよりも、凸帯を貼り付けた後のヨコナデの施し方に注意して分類してみた。ヨコナデの施し方は、工人のクセがかなり表現されると考えたためである。

a類は凸帯の上面・下面・側面をほぼ均等な力でヨコナデしたものであり、凸帯の断面は正方形に近く、凸帯高は7mm以下である。b類は凸帯の上面・下面を強くナデ、側面のナデが弱い。そのため、凸帯断面は長方形をなし、凸帯高は10mm前後である。c類は凸帯の上面、下面をナデた後、側面をナデている。これはヨコナデが2回施されたのではなく、親指を上面、人さし指を側面、中指を下面にあて、人さし指をのばした状態でヨコナデを施したため、人さし指がやや遅れてナデを施すことになったのである。凸帯断面は、「π」字形になる。d類は凸帯の下面をナデた後、上面・側面を強くナデる。これも、一回でヨコナデが施されていると考えられる。親指と人さし指が密着した状態でヨコナデを施したのである。凸帯断面は側面がやや垂下した状態になる。g類は二本の指でヨコナデされており、断面は三角形状をなす。

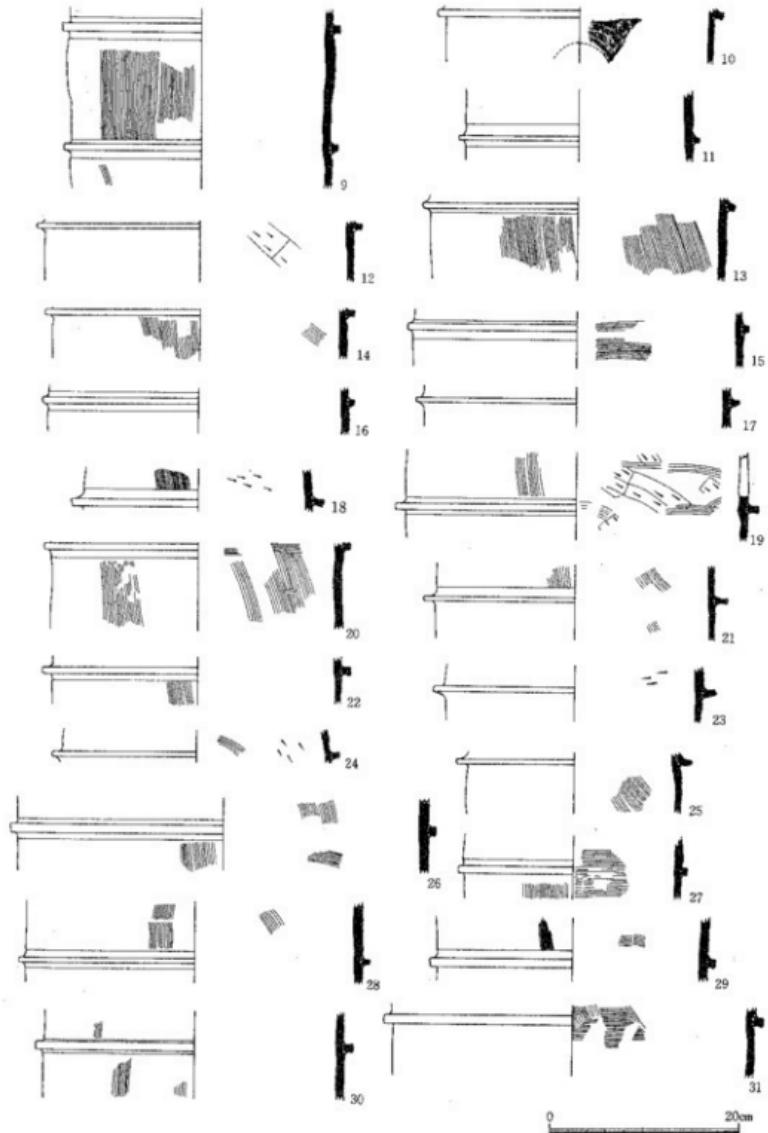


図16 円筒埴輪体部実測図①

○類 (9~17)

28点、28.9%。外面調整はナデが中心だが、タテハケもみられる。内面調整もナデが中心だが、ハケ、ヘラケズリもみられ、これらを併用するものもある。外面に丹が残るもの4点、円形透孔の周囲に弧文を有するもの、弧文を有するもの、逆三角形の透孔を有するものが各1点みられる。

△類 (18~25)

33点、34.0%で、a類と共に、大部分を占める。調整法はa類にはほぼ等しいが、内面調整に占めるヘラケズリの割合がやや高い。内面ヘラケズリを施すものは、朝顔形埴輪の体部になる可能性もある。長方形透孔、円形透孔が1点みられる。

□類 (26~31)

13点、13.4%。内外面のいずれか、もしくは両面にハケ調整のみられるもの7点の中、5点に丹が残り、長方形透孔を有するものが1点ある。内外面ともナデ調整によるものは6点あるが、丹塗りは1点も認められず、これによって、c類は更に二分することが可能である。

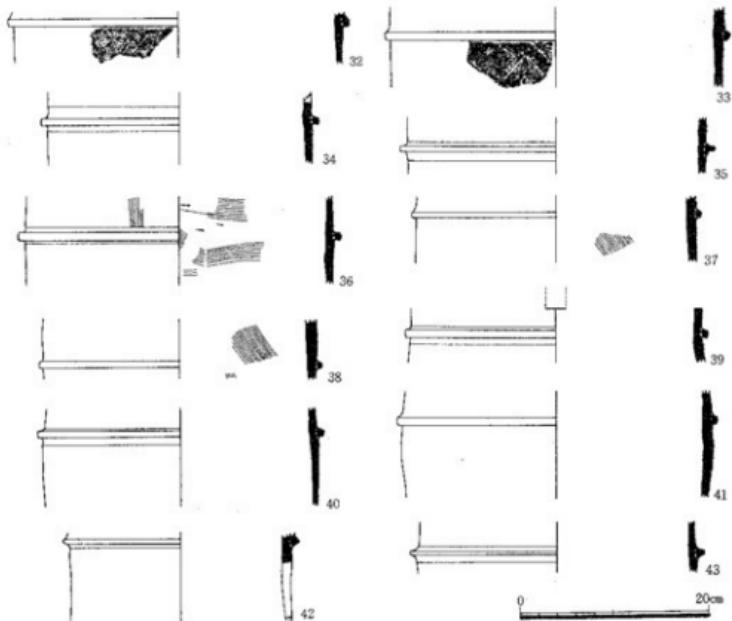


図17 円筒埴輪体部実測図②

d 類 (32~41)

14点、14.4%。外面調整はナデを中心とし、ハケメもみられる。内面調整もナデを中心とし、ヘラケズリ、ハケメがみられ、顕著な特徴はない。左下がりの直線を3本施すもの、連続した山形の線刻を施すものがあり、長方形透孔を有するもの2点、直径8mmの小円孔を有するもの1点、丹が残るもの4点がある。

e 類 (42・43)

9点、9.3%。内外面とも、調整のわかるものは、すべてナデ調整。円形透孔の周囲に弧文を有するもの、長方形透孔を有するものがある。

朝顔形埴輪 (図18、図版19~21)

口縁 (44~49) は、6点を観察、図化した。分類法は円筒埴輪口縁部と同一であり、b・c・d・g 類がみられる。(48) は、くびれ部斜面の葺石上に倒立した状態で発見され、遺存状態がよく、くびれ部付近に樹立されていたと考えられる。他の口縁では、ナデしか観察できないが、(48) は外面左上がりのハケを施した後、全体をナデしており、内面は左方向のヘラケズリの後、タテおよびヨコ方向のナデを施す。頸部内面はヨコナデ、口縁部もヨコナデを施すが、口縁部内面にはヨコハケが残る。外面には、部分的に丹が残っている。口径29.2cm、頸部径16.2cm、残存高18cm。

口縁から頸部にかけての破片 (50~56) は、16点を観察、7点を図化した。図化できたものは、総て b 類であるが、b 類11点、e 類5点となる。凸帯高は平均11mmと高く、凸帯を高くする意識が働いたために、b 類・e 類しかみられないのではないだろうか。内外面ともナデ調整が中心であるが、内面にヨコハケを施すものが3点みられる。

頸部 (57~60) は、6点を観察、4点を図化した。a・b・e 類がみられ、凸帯は7mm前後であり高くない。総て外面ナデ調整、内面ヘラケズリを施し、ヨコハケを併用するものが1点ある。

肩部 (61~68) は、20点を観察、8点を図化、2点を拓本にした。a 類が3点、b 類が14点みられるが、a 類の凸帯は総て高さ7mmと、a 類の中では高く、b 類に含めるべきかもしれない。凸帯の平均高は10mmである。外面は総てナデ調整、内面はヘラケズリを施すものが大部分を占め、ナデを施すものもみられる。ヘラケズリの後、部分的にナデが施されていると考えるべきであろう。肩部の破片の中、14点に連続した「く」の字形の線刻がみられる。肩部には2条の凸帯が貼り付けられるが、線刻は凸帯より上に施される場合 (65・66) と凸帯間に施される場合 (67・68) がある。線刻は深さ約3mm、左方向へ、下から上の順に、刀子状の鋭い工具で施している。また、凸帯より上に、長方形透孔をもつもの、三角形透孔をもつものが各1点みられる。

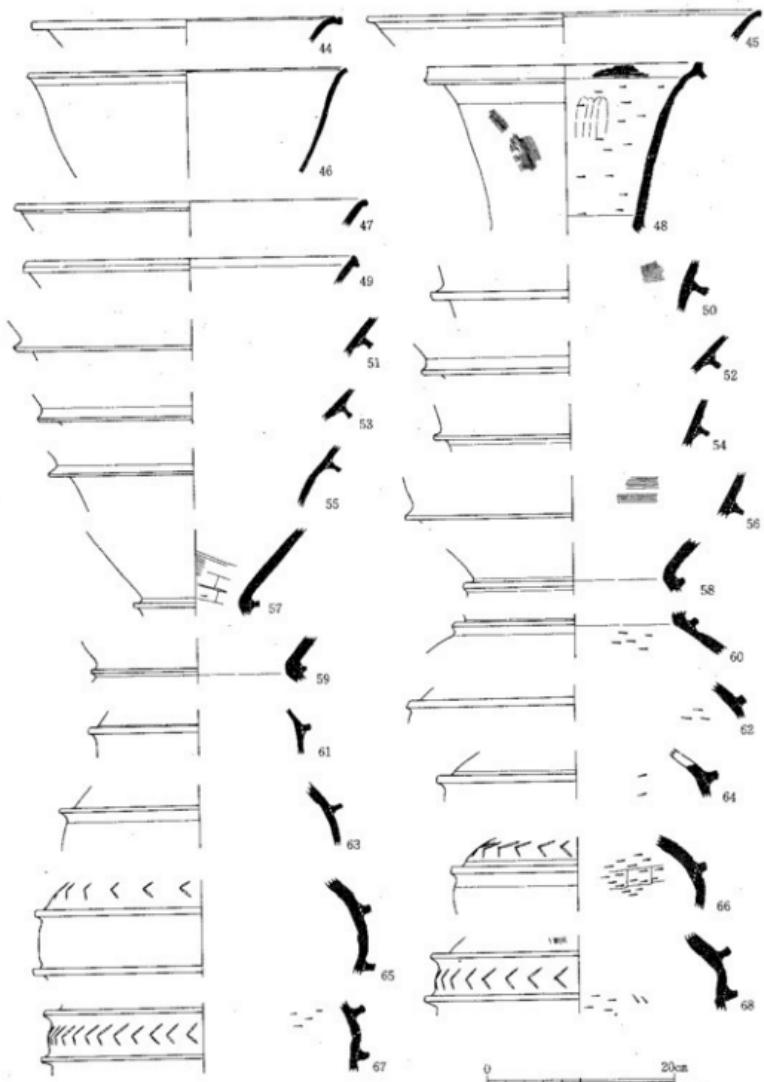


図18 朝顔形埴輪実測図

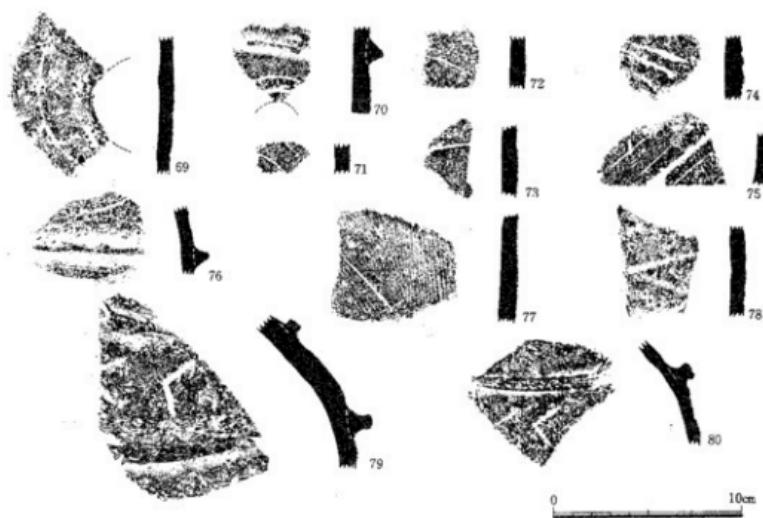


図19 塗輪線刻文様拓影

線刻を有する破片（図19、図版22）

埴輪には種々の線刻がみられるが、朝顔形埴輪の肩部に施されるもの以外は小片が多く、良好な資料に乏しい。(10・69・70) は円形と思える透孔の周囲に、同心円状に2~3本の線刻を施すもので、全部で4点ある。巴形の透孔と直弧文を連想させるものであるが、巴形透孔も直弧文も見られない。その退化した文様ではないだろうか。二~三重の孤線を有するもの(71~73) は、円形透孔に伴うものを除いて5点みられる。円形透孔に伴うとも考えられる。

(74) はやや太い右下がりの線刻を3本以上施す。(75) は左下がりの鋭い線刻を4本以上施し、これ以外にも1点認められる。(76) はなめらかな弧線を2本施す。(77) は右下がりの鋭い直線がみられ、他の1点と共に、外面タテハケ調整、丹塗りがみられる。(78) は鋭角的な「く」の字形の線刻がみられ、他にも1点ある。(33) は連続した山形文が施され、他にも1点認められる。(79・80) は先述した朝顔形埴輪の肩部である。

埴輪基底部（図20、図版23・24）

埴輪基底部は非常に出土数が少なく、7点が出土しているのみである。(81) は第1トレンチから出土したものであり、(82~85) は第5・6トレンチで原位置を留めていたNo 1~4に対応する。(86) は道状遺構-2の埋土内から出土したものである。いずれも内外面ともにナデ調整を施すが、(82・83) は内面にハケメが残る。底部は総て倒立状態でヨコナデを施し、端部が肥厚する。平均の厚さは約5mmで、体部より薄い点が注目される。

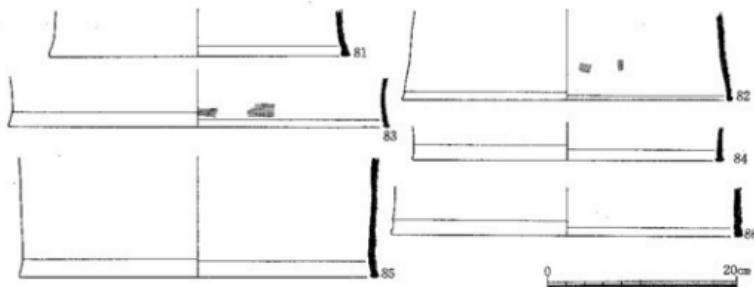


図20 増輪基底部実測図

埴輪は、器壁が6mm前後と非常に薄く、凸帯も細く突出度が高いという特徴があり、平均直径は25~40cmとなる。胎土は総て近似しており、石英・長石の砂粒を含む。色調は淡赤褐色と淡黄褐色のものが多い。調整は外外面とも丁寧なナデ調整を基本とするが、大部分の埴輪は、ナデの前に、外面はタテハケ、内面はヘラケズリ、ヨコもしくは左上がりのハケメを施しているものと思われる。凸帯はナデの後に貼り付け、ヨコナデを施す。ヨコナデの施し方によって5類に分類できるのは前述の通りであるが、ヨコナデの際に凸帯にあたる指の面積が小さいものが目立つ。一部の埴輪が、女性によって製作されている可能性も考えられる。

朝顔形埴輪は、外面の丁寧な調整とは逆に、内面にヘラケズリを残すものが多い。形態は、肩部が外方へ張り出した古い型式を示す。肩部から下部の状態が不明であるため、壺形埴輪になる可能性も否定できない。また、口縁から頸部にかけて、あるいは頸部に、凸帯を貼り付けるものと、貼りつけないものがみられる。

口縁・体部に比べると、基底部の出土数が非常に少ない。そして、出土した7点は総て同一の特徴を有する。器壁は非常に薄く、倒立後にヘラケズリなどを施した後、ナデ調整し、端部をヨコナデしたものと思われる。埴輪はピットを掘って樹立されているが、ピットは非常に浅く、器壁の薄さを考えると、埴輪は樹立後、あまり時を経ずして損壊したであろうと想像される。

線刻文様については、前述したように多種多様のものが見られる。また透孔は、縦長の長方形になると思えるもの7点、三角形1点、逆三角形1点、円形になると思えるもの3点があり、性格不明の径8mmの小円孔が1点みられる。

埴輪は、外外面の調整、透孔、朝顔形埴輪の形態等から考えると、川西編年のI~II期、春成編年のII期に該当し、両氏の年代観から考えると、4世紀中葉~後葉となる。⁽¹⁾

註

(1) 川西宏幸「円筒埴輪緯論」『考古学雑誌』第64巻2号 1978

春成秀賢「埴輪」『考古資料の見方「遺物編」』地方史マニュアル6 1977

表2. 埋輪観察表

類	番号	調整		法量			焼成	粒土	色調	出土地区	備考
		外面	内面	直徑	厚さ	凸凹					
IT 縁部	a 1	タテハケ (5本/cm)	不明	31.3cm	8mm		不良	粗	赤褐色	5トレンチ	端部の詳細は不明
	2	不明	ナデ	32.0cm	6mm		不良	粗	外面: 淡黃褐色 内面: 淡赤褐色	7トレンチ	端部ヨコナデ
	b 3	ナデ	ナデ?	29.4cm	4mm		良好	粗	淡黃褐色	G-4区	端部は垂下し、 ヨコナデ
	4	ナデ	ナデ	31.8cm	6mm		やや不良	やや粗	外面: 淡黃褐色 内面: 淡赤褐色	5トレンチ	端部ヨコナデ
	5	ナデ?	ナデ	26.2cm	5mm		やや不良	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ	端部は肥厚し、 ヨコナデ
	c 6	ナデ	ナデ?	29.6cm	4mm		やや不良	やや粗	淡赤褐色	I-4区	端部はやや肥厚し、 ヨコナデ
	d 7	タテハケ (5本/cm) +ナデ?	ヨコハケ (5本/cm) +ナデ?	41cm	5mm		やや不良	やや粗	外面: 黑褐色 内面: 淡赤褐色	5トレンチ	端部ヨコナデ
	8	ナデ	ナデ	37.2cm	6mm		やや不良	やや粗	淡赤褐色	8トレンチ	端部は平坦に終り、 ヨコナデ
体部	a 9	タテハケ (5~6本/cm)	ヘラケズリ + ナデ?	29.4cm	6mm	6mm	良好	粗	淡黃褐色	G-4区	外面丹塗り
	10	ナデ	ナデ	30.2cm	7mm	7mm	やや不良	粗	外面: 淡黒灰色 内面: 淡赤褐色	7トレンチ	黒経、円形透孔 及び背面に弧文
	11	ナデ	ナデ?	25.6cm	5mm	6mm	やや不良	粗	淡赤褐色	I-3区	
	12	ナデ	ヘラケズリ + ナデ?	34.4cm	6mm	6mm	良好	密	淡赤褐色	5トレンチ	
	13	タテハケ (5本/cm) +ナデ?	ナナメハケ (5本/cm) +ナデ?	33.2cm	7mm	7mm	良好	やや粗	外面: 淡黃褐色 内面: 淡赤褐色	5トレンチ	
	14	タテハケ (7本/cm)	ナナメハケ (5本/cm)	32.8cm	7mm	7mm	良好	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ	外面丹塗り
	15	ナデ?	ヨコハケ (5本/cm)+ 凸凹轍ナデ	36.2cm	5mm	5mm	不良	粗	外面: 淡褐色 内面: 淡赤褐色	G-4区	
	16	ナデ?	不明	33.2cm	8mm	5mm	やや不良	粗	淡赤褐色	5トレンチ	
	17	ナデ?	ナデ	34.2cm	5mm	7mm	やや不良	やや粗	外面: 淡黃褐色 内面: 淡赤褐色	I-4区	
	b 18	タテハケ (5本/cm) +ナデ?	ヘラケズリ	26.6cm	7mm	10mm	やや不良	やや粗	外面: 淡黃褐色 内面: 淡赤褐色	5トレンチ	

類	番号	調 整 量				焼成	胎土	色 調	出土地区	備考	
		外 面	内 面	直 径	器 型						
b	19	タテハケ (5本/cm)	ヘラケズリ +ヨコハケ (5本-2本/cm)	38.4cm	7mm	11mm	良 好	密	淡赤褐色	5トレンチ	長方形透孔
	20	タテハケ (5本/cm) +ナデ	ナナメハケ (5本/cm) +一部ナデ	32.2cm	9mm	8mm	やや不良	粗	赤褐色	8トレンチ	内面部分的に粘土補充
	21	タテハケ (5本/cm) +ナデ	ハケ (5本/cm)	32.0cm	5mm	13mm	やや不良	やや粗	淡赤褐色	7トレンチ	
	22	タテハケ (5本/cm) +ナデ	ナデ	32.6cm	7mm	8mm	良 好	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ	
	23	ナデ	ヘラケズリ +ナデ	30.0cm	8mm	10mm	やや不良	やや粗	淡黄褐色	5トレンチ	
	24	ナデ	ヘラケズリ +ハケ (5本/cm)	34.0cm	6mm	9mm	良 好	やや粗	外面：淡黄褐色 断面：黑色 内面：淡赤褐色	5トレンチ	
	25	ナデ	ナナメハケ (5本/cm) -ナデ	25.0cm	6mm	9mm	やや不良	やや粗	淡黄褐色	5トレンチ	黒斑
	26	タテハケ (5本/cm) +ナデ	タテハケ (5本/cm) +ナデ	44.0cm	8mm	7mm	良 好	密	外面：淡黄褐色 内面：淡赤褐色	8トレンチ	黒斑 長方形透孔
	27	タテハケ (5本/cm)	ヨコハケ (5本/cm)	24.2cm	6mm	5mm	良 好	密	外面：淡赤褐色 内面：淡黄褐色	5トレンチ	黒斑 外面丹塗り
	28	ハケ (5本/cm) +ナデ	ナデ	37.2cm	6mm	6mm	良 好	やや粗	外面：黑色 内面：淡赤褐色	G-4区	黒斑 外面丹塗り
c	29	タテハケ (10本/cm) -ナデ	ヨコハケ (5本/cm)	30.2cm	8mm	7mm	良 好	密	淡赤褐色	5トレンチ	凸部より上丹塗り
	30	タテハケ (5本/cm) +ナデ	ナデ	33.8cm	7mm	7mm	やや不良	やや粗	外面：淡黄褐色 内面：淡赤褐色	5トレンチ	黒斑
	31	ナデ	ヨコハケ(5本/ cm)+ナナメハ ケ(5本/cm)	39.8cm	9mm	9mm	良 好	密	外面：茶褐色 内面：淡黄褐色	8トレンチ	外面丹塗り
	32	ナデ	不明	36.2cm	7-10 mm	5mm	不 良	粗	淡黄褐色 凸部：黑色	5トレンチ	外面内窓下に左 下がりの直線2-3本
	33	タテハケ (5本/cm) +ナデ	不明	36.4cm	8mm	5mm	やや不良	やや粗	外面：淡黄褐色 内面：淡赤褐色	5トレンチ	外面凸部下に山 形の線刻
d	34	ナデ	ヘラケズリ ?	29.6cm	5mm	7mm	不 良	粗	淡黄褐色 断面：黑色	G-4区	長方形透孔 外面丹塗り
	35	ナデ	ヘラケズリ ?	33.6cm	4mm	6mm	不 良	粗	淡赤褐色	G-4区	外面丹塗り
	36	タテハケ (5本/cm) +ナデ	ヨコハケ(5本/ cm)+ハラケズリ ?+ナデ	34.2cm	8mm	7mm	やや不良	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ	外面一部丹塗り 黒斑

類	番号	調 整				法 量		焼 成	胎 土	色 調	出土地区	備 増
		外 面	内 面	直 径	都 値	凸 高						
博 谷	37	ナデ	ナナメハケ (5本/cm) +ナデ	30.6cm	10mm	6mm	やや不良	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ		
	38	ナデ	ナナメハケ (5本/cm)	30.0cm	12mm	6mm	やや不良	密	淡赤褐色	5トレンチ		
	39	ナデ	ナデ	32.5cm	6mm	5mm	良 好	やや粗	外面：淡黄褐色 内面：淡赤褐色	I-4区	長方形透孔	
	40	ナデ	ナデ	30.8cm	5mm	5mm	やや不良	粗	淡赤褐色	G-4区	外面丹波り	
	41	不明	不明	34.0cm	8mm	6mm	不 良	粗	淡黄褐色	5トレンチ		
	42	不明	ナデ?	25.4cm	5mm	6mm	不 良	粗	淡赤褐色 断面：黑色	J-4区	長方形透孔	
断 頭 口 球 部	43	ナデ	ナデ?	31.6cm	4mm	6mm	不 良	粗	外面：淡黄褐色 内面：淡赤褐色	G-4区		
	44	ナデ	ナデ	36.2cm	4mm		不 良	やや粗	淡赤褐色	G-4区	端部は上に肥厚 しヨコナデ 外表面丹波り	
	45	ナデ	ナデ	41.8cm	7mm		良 好	密	淡赤褐色	5トレンチ	端部は平坦に終り、ヨコナデ	
	46	ナデ	ナデ	33.4cm	5mm		良 好	密	淡赤褐色	5トレンチ	端部ヨコナデ	
	47	ナデ	ナデ	37.6cm	7mm		やや不良	やや粗	外面：淡赤褐色 内面：淡黄褐色	5トレンチ	端部上面は平坦 に終りヨコナデ	
	48	タテハケ (5本/cm) +ナデ	ヘラケズリ +ナデ	29.2cm	8mm		良 好	密	赤褐色— 淡黄褐色	5トレンチ	端部ヨコナデ 外表面丹波り 削面	
剥 離 口 球 部	49	ナデ	ナデ	35.6cm	7mm		良 好	やや粗	淡赤褐色	8トレンチ	端部ヨコナデ 黒斑	
	50	ナデ	ヨコハケ (5本/cm)	29.2cm	6mm	14mm	やや不良	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ		
	51	ナデ	ナデ	38.0cm	7mm	10mm	良 好	密	淡赤褐色	5トレンチ		
	52	ナデ	ナデ	31.5cm	5mm	8mm	不 良	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ		
	53	不明	ナデ	33.2cm	7mm	10mm	やや不良	やや粗	外面：淡黄褐色 内面：淡赤褐色	5トレンチ		
	54	ナデ	ナデ	29.2cm	7mm	8mm	良 好	密	淡赤褐色	5トレンチ		

部	番号	調 整		法 量		焼 成	胎 土	色 調	出土地区	備 考
		外 面	内 面	直 径	器壁					
朝顔 上種 脇 頭 部	55	不明	ナデ	31.2cm	6mm	12mm	不 良	やや粗	淡黄褐色	5トレンチ
	56	不明	ヨコハケ (5本/cm)		7mm	12mm	不 良	粗	茶褐色 裏面:黒色	5トレンチ
朝 顔 b	57	ナデ	上:ナデ 中:12ペタ (日本/cm) 下:ヘラケズリ	13.3cm	9mm	12mm	良 好	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ
朝 顔 a	58	ナデ	ヘラケズリ	23.6cm	10mm	6mm	良 好	やや粗	淡赤褐色	H-4区
朝 顔 頭 部	59	ナデ	ヘラケズリ	22.8cm	10mm	7mm	良 好	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ
朝 顔 a	60	不明	ヘラケズリ	26cm	12mm	7mm	やや不良	やや粗	淡黄褐色	5トレンチ
朝 顔 頭 部	61	ナデ	ナデ	23.8cm	5mm	7mm	不 良	やや粗	淡赤褐色	J-4区
朝 顔 頭 部	62	ナデ	ヘラケズリ	35.6cm	8mm	7mm	不 良	粗	淡赤褐色	5トレンチ
朝 顔 頭 部	63	ナデ	ヘラケズリ	30.0cm	8 ~ 11mm	10mm	やや不良	やや粗	淡赤褐色	6トレンチ
朝 顔 頭 部	64	ナデ	ヘラケズリ +ナデ	30.0cm	8mm	10mm	良 好	粗	淡赤褐色	H-4区 三角形透孔
朝 顔 頭 部	65	ナデ	ナデ	35.6cm	8 ~ 12mm	10mm	良 好	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ 縫刻
朝 顔 頭 部	66	ナデ	ヘラケズリ +ナデ	27cm	9 ~ 12mm	8mm	良 好	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ 縫刻
朝 顔 頭 部	67	ナデ	ヘラケズリ	34.2cm	10mm	12mm	やや不良	やや粗	外面:淡黄褐色 内面:淡赤褐色	5トレンチ 縫刻
朝 顔 頭 部	68	ナデ 一部タテハケ	ヘラケズリ +ナデ	33.0cm	14mm	12mm	良 好	密	淡赤褐色	5トレンチ 縫刻
体 部	69	ナデ	ハケ (5本/cm) ナデ		7mm		やや不良	やや粗	外面:淡黄褐色 内面:淡赤褐色	5トレンチ 円形透孔の 周囲に孤線
体 部	70	ナデ	ナデ		9mm	6mm	やや不良	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ 円形透孔の 周囲に孤線
体 部	71	ナデ	ナデ		7mm		やや不良	密	淡黄褐色	5トレンチ 縫刻
体 部	72	ナデ	ナデ		7mm		やや不良	やや粗	淡黄褐色	5トレンチ 縫刻

類	番号	調 整		法 量			焼 成	胎 土	色 調	出土地区	備 考
		外 面	内 面	直 径	器 型	高 度					
体 部	73	ナデ	ナデ		6mm		やや不良	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ	縫刻
	74	不明	不明		9mm		やや不良	粗	淡黄褐色	5トレンチ	縫刻
	75	ナデ	不明		8mm		やや不良	粗	淡黄褐色	5トレンチ	縫刻
	76	不明	不明		7mm		やや不良	やや粗	外面：淡黄褐色 内面：淡赤褐色	5トレンチ	縫刻
	77	タテハケ (5本/cm) +ナデ	ヘラケズリ		8mm		やや不良	やや粗	淡黄褐色	5トレンチ	外面丹塗り 縫刻
	78	ナデ	不明		6mm		やや不良	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ	縫刻
	79	ナデ	ヘラケズリ	22.8cm	10mm	7cm	良 好	やや粗	淡赤褐色	6トレンチ	朝顔面部 縫刻
	80	ナデ	ヘラケズリ		9mm	8mm	良 好	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ	朝顔面部 縫刻
	81	ナデ	ナデ	31.2cm	6 ~ 4mm		不 良	やや粗	漆赤褐色	1トレンチ	底部ヨコナデ 端部肥厚
	82	ナデ	ナデ (5本/cm) +ナデ	35cm	4 ~ 5mm		不 良	やや粗	外面：黒色 内面：淡赤褐色	5トレンチ No.1	底部ヨコナデ 端部肥厚
基 底 部	83	ナデ	ナデ	40cm	3 ~ 6mm		やや不良	やや粗	淡赤褐色	5トレンチ No.2	底部ヨコナデ 端部肥厚
	84	ナデ	ナデ	33cm	3 ~ 4mm		不 良	粗	淡赤褐色 一部黒色	5トレンチ No.3	黒斑 底部ヨコナデ 端部肥厚
	85	ナデ	ナデ	38cm	6mm		不 良	やや粗	淡赤褐色 一部黒色	6トレンチ No.4	黒斑 底部ヨコハデ 端部肥厚
	86	ナデ	ナデ	36.8cm	4mm		やや不良	粗	淡黄褐色	道状遺構 - 2	底部ヨコナデ 端部肥厚

第四章 西側斜面の調査

玉手山9号墳下の西側斜面の調査であり、第Ⅱ期調査にあたる。この調査では、9号墳に伴うと考えられる道状遺構が二箇所で検出され、墓道と推定できるものである。また、この墓道に隣接してテラス状遺構も検出されたが、それ以外の遺構は認められない。遺物は9号墳の埴輪片以外に、弥生式土器、9号墳以外の埴輪片、中世の土器などがみられるが、いずれも少量である。

1. 層序 (図21・22)

東西方向の断面は、二箇所について記述する。まず、南側のA—A'断面は、尾根筋にあたり、水平距離20mを測る。地山は東から赤橙色粘土、黄褐色粘質土、赤褐色粘土と変化し、前者が下層にあたる。地山は地表から0.2~1.4mの深さで検出され、その間には暗灰褐色粘質土、暗褐色土が堆積する。地山は西端で最も低く、TP 78.3mであり、西端から17mでTP 85.7mと最も高く、平均23.5°の傾斜を示す。それ以東は、調査区東端までほぼ平坦面をなす。これはテラス状遺構とも呼ぶべきものであり、道状遺構—1に接することから考えると、古墳に伴う何らかの施設と考えられる。

北側のB—B'断面は、比較的なだらかな傾斜を示し、水平距離35mを測る。地山は黄褐色砂質土であり、東端のみ赤褐色粘質土となる。地山は浅く、地表から0.1~0.6mの深さで検出され、その間には9号墳封土の流失土と思われる暗灰褐色粘質土が堆積する。地山は西端でTP 78.7m、東端でTP 90.6m、平均18.8°の傾斜を示す。

調査地区東端の南北断面C—C'は長さ60mである。地山は変化が激しく、層序も複雑である。北端でTP 90.1mの地山は、北から10mの位置でTP 90.6まで高くなる。その後、徐々に下がり、谷の最奥部にあたる北から32mの位置でTP 85.9mと最も低くなる。再び地山はTP 86.5m前後まで高くなり、道状遺構—1、テラス状遺構へとつながる。

調査地区中央に位置する広い谷は、最大傾斜角60°を示し、調査以前は最近の地崩れによって形成されたものと考えていたが、調査の結果、古墳に伴うと考えられる道状遺構が谷斜面に築かれていることが確認され、古墳築造以前に形成された谷であることが判明した。

2. 遺構

道状遺構—1 (図23・図版14)

斜面の傾斜に沿った東西方向の遺構であり、赤橙色粘土の地山を掘り込んで築かれている。幅は1.5m前後を有し、長さは4mまで確認できた。西端は、おそらく下方へ続いているのであろうが、消滅しており確認できない。東端は、調査地区的東方へ更にのびている。一見すると、溝状に見えるが、低い段状の施設が11段認められる。本来は階段状を呈していたものと思える。

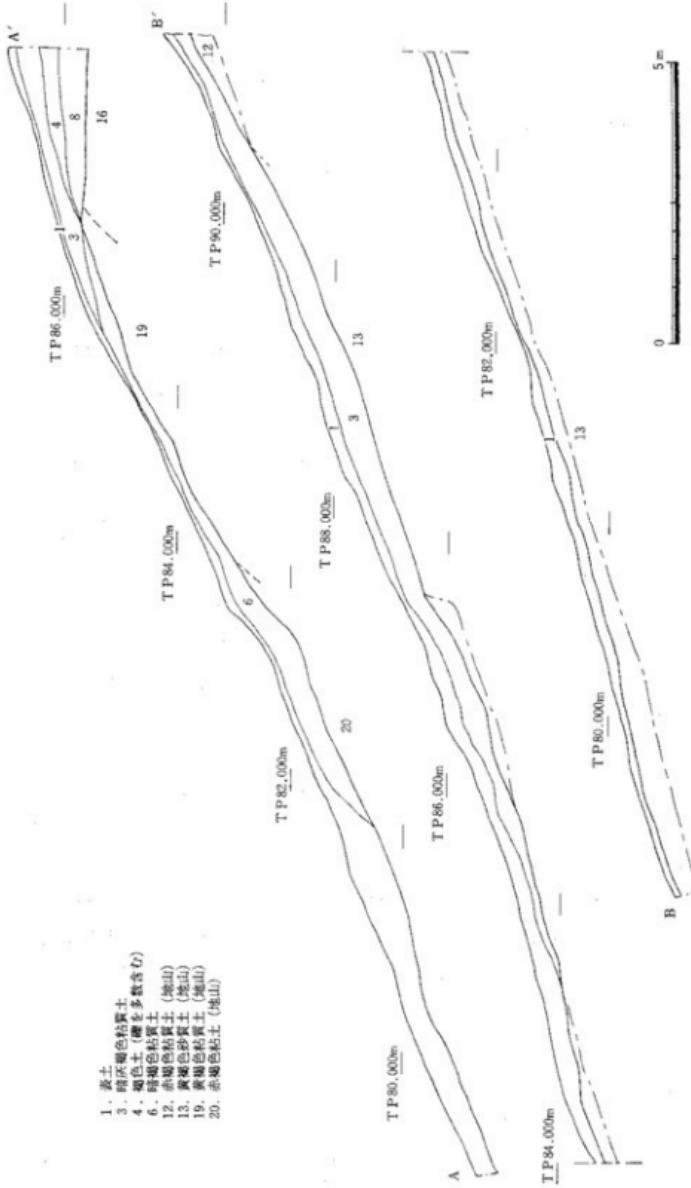


図21 西側斜面東西横面土層図

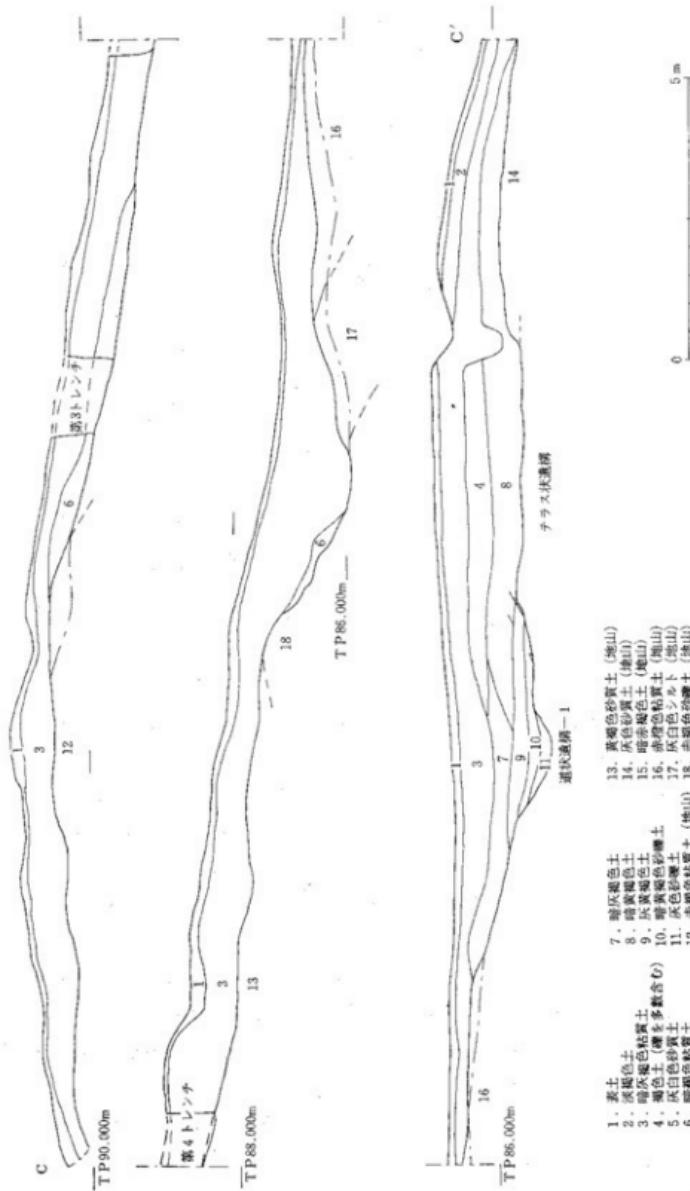


図22 西側斜面南北断面土層図

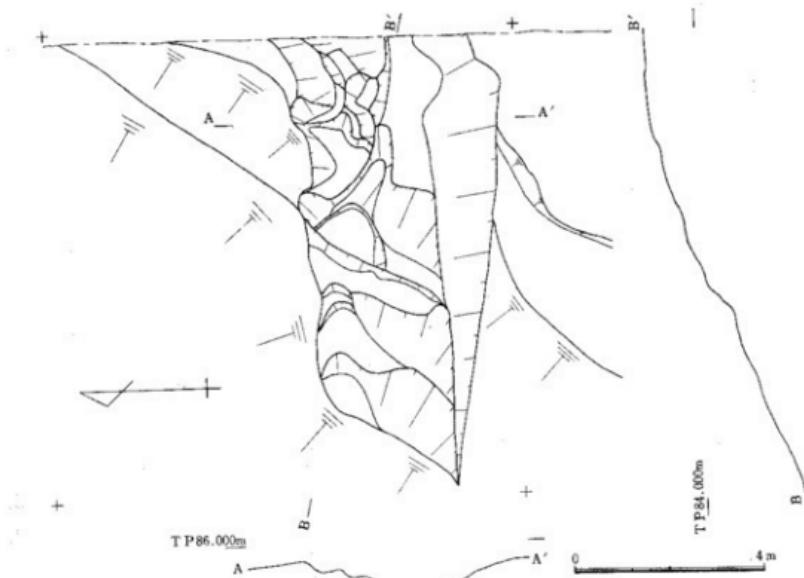


図23 道状遺構-1 実測図

各段の間の距離は平均80cm、各段の高低差は平均38cmである。

遺構内からは遺物は出土していないが、9号墳前方部へとりつく墓道と考えられる。

道状遺構-2 (図24、図版15)

西へ向かって開く谷の最奥部に築かれた遺構であり、南西から北東へ湾曲しながらのびる。幅は3m前後を有する。南西方向へは更にのびており、遺存状況も良好であると思えるが、未調査である。北東方向へも更にのびていると思えるが、攪乱を受けていることもあり、詳細は不明である。おそらく、墳丘くびれ部へまっすぐに取りつく墓道ではないだろうか。検出部分は、谷であるために、遺存状態が良好だったのであろう。

道状遺構-2は、階段状を呈し、途中で二本に分かれ、いずれも10段前後の段を有する。東側では明確に階段と確認できるが、西側ではあまり良好な状態ではない。東側の階段は、各段の奥行き約40cm、高さ約22cmとなり、それぞれ道状遺構-1のほぼ半分の数字になる点が興味深い。東側の階段には、一部で溝を伴う。この溝は長さ240cm、幅20cmで、雨水によって階段が崩壊することを避けるために設けられているのであろう。東側の階段と西側の階段の間に一本の溝が存在する。西側の階段は、下方では段の奥行き44cm、高さ約25cm、上方では段の奥行き約42cm、高さ14cmとなる。

埋土は下層では礫を含む灰色シルト、上層では暗黄褐色粘質土である。遺物は、9号墳の埴輪片、土師器小片が少量出土しているが、弥生式土器、中世の土器は出土していない。

テラス状遺構

E-4区東半にテラス状遺構が検出された。赤橙色粘土の地山がほぼ平坦面をなし、道状遺構-1と接するので、古墳に伴う施設と考えられる。調査地区東方へ更に広がっているため、広さは不明である。古墳築造の際の資材置場、あるいは儀式・祭祀の場であったのかもしれない。

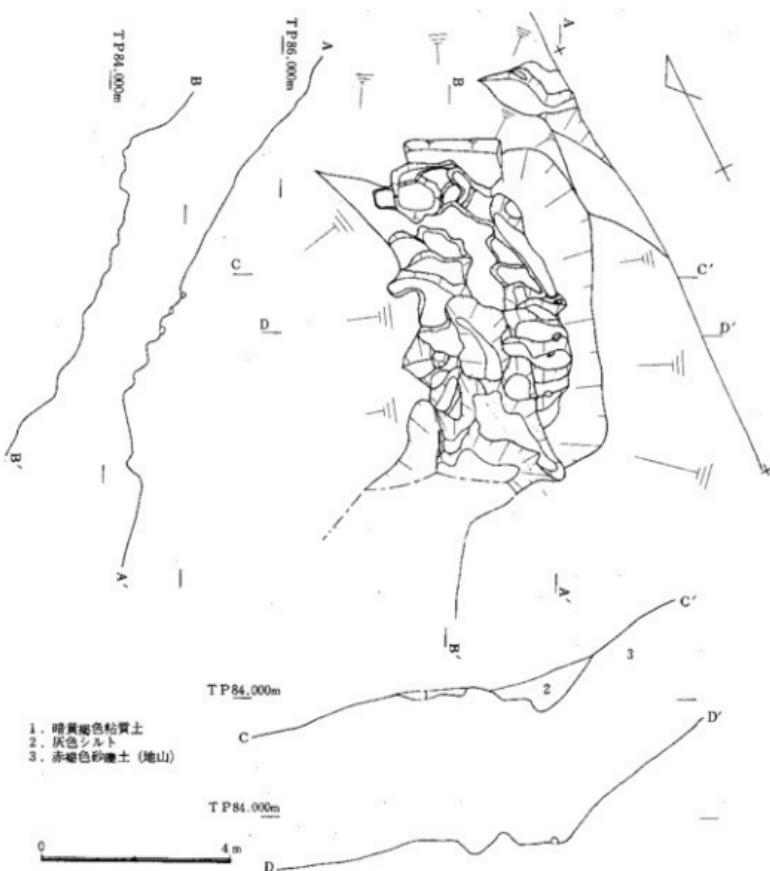


図24 道状遺構-2実測図

3. 遺物

①土器 (図25)

第Ⅰ期調査では土器の出土はほとんど見られなかったが、第Ⅱ期調査においては少量ではあるが、弥生式土器、土師器、須恵器、瓦質土器の出土を見た。そのうち図化できたものが1～24である。

弥生式土器 (図1～21)

(1)は壺の口縁部。大きく開く口縁部に外傾する面を持つ。内外面共にヨコナデを施し、特に外面には部分的に強いヨコナデが見られる。(2)は甕。ゆるやかに外方へ立ち上がる体部に外反する口縁部を持つ。内外面共にナデ調整が見られ器壁は薄い。(3～17)はいずれも壺あるいは甕の底部であるが、底部にわずかにくびれを持つもの(3～9)、底部より大きく外方へ広がる体部を持つと思われるもの(10～12)、底部よりゆるやかに立ち上がる体部を持つと思われるもの(13～17)がある。(3)は底部に穿孔を持つ。(4～6)の外面にはユビオサエが見られ、(6・10・15)の内面には工具のあたり痕が見られる。(7)は二次焼成を受けていると思われる。(14)は外面にタタキ目をもつ。(17)は内面にくもの巣状のハケメを持つ。(18～20)はいずれも高杯である。(18)は杯部外面にタテ方向の丁寧なヘラミガキ、内面にもヘラミガキを施している。(19・20)は色調、胎土、焼成ともによく似ている。いずれも脚部外面にタテ方向のヘラミガキを施し、内面にしづり目をもつ。(19)の杯部内面は黒色を呈しており、ヘラミガキが見られる。(20)は脚部内面にヨコナデが見られ、三方の透孔を持つ。(21)は器台。外面にタテ方向のヘラミガキを施し、三方二段の透孔を持つ。

土師器 (22～24)

(22)は壺の口縁部。外開きに立ちあがり、外反する口縁で端部はわずかに面をなす。(23)は甕の口縁部。「く」の字形に外反し、端部は面をなす。内外面共にヨコナデ調整。(24)は擂鉢。焼成は非常にあまい。平底より外方へ大きく開き口縁部に至ると思われる。口縁部はやや尖り気味に終わる。内面に一束10本のおろし目が見られるが、使用痕は認められない。

以上であるが。記載できなかったものに、瓦質あるいは土師質の火舎、火鉢等の破片の出土があり、須恵器においては壺になるであろうと思われる破片が出土した。内面に同心円文、外面にはタタキの後にカキ目を施したものである。

(松田)

(24)の擂鉢はI-3区から出土しているが、他はいずれもF-4、G-4区を中心とした範囲で出土している。谷の奥部にあたるため、弥生式土器は9号墳築造以前に丘陵頂付近で使用された土器が転落したものと思える。土器は小片が多く、時期を決め難いが、時期を確定できるものはいずれも後期のものであり、一部、中期まで遡るかと思われるものもある。9号墳築

造以前に、弥生時代後期の高地性集落が存在したと考えられるが、土器量は多くない。中世の遺物も、集落に伴うものとは到底考えられない。墓地か、もしくは何らかの祭祀に伴うものであろう。

(安村)

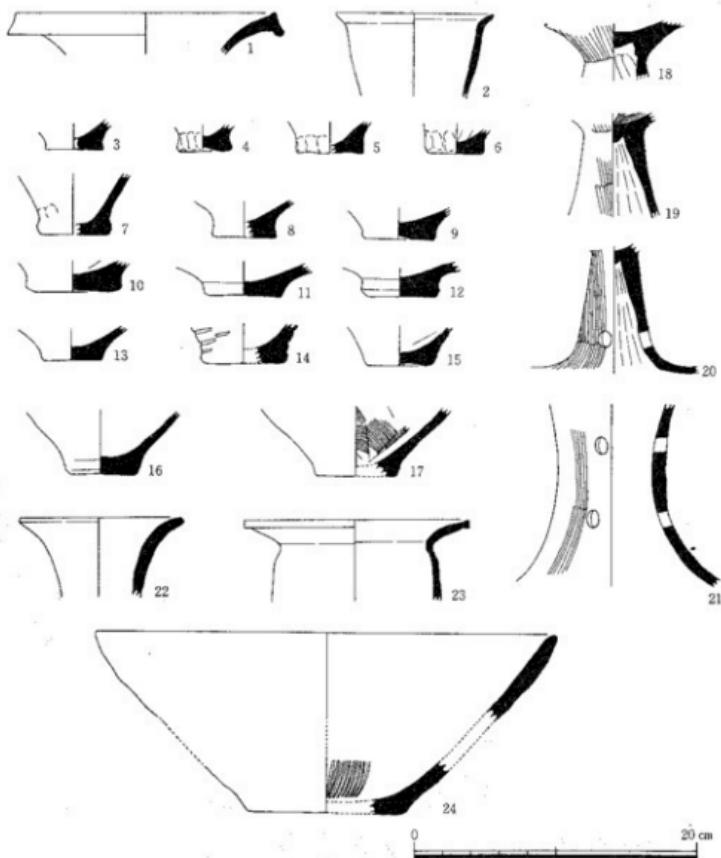


図25 西側斜面出土土器実測図

②埴輪（図26、図版24）

玉手山9号墳以外の埴輪である。(25・26)は円筒埴輪片、それぞれ復元直径52.4cm、44.8cmを測る大型のものである。凸帯断面は正方形となり、厚く、高い。内面はナデ調整、外面は磨滅しているが、ナデ調整と思われる。(27)は盾形埴輪であろう。綾杉状の線刻が計11本みられ、厚さは現存する両端で1.4cm、2.2cmである。内外面ともナデ調整を施す。(28)は不明の形象埴輪片。外面に幅2.4cmの凸帯状の粘土帯が貼り付けられ、断面は湾曲し、一端が厚く、一端が薄い。蓋形埴輪とも考えられる。内外面ともナデ調整を施す。

この4点の埴輪は、いずれも外面暗黄褐色、内面淡赤褐色、断面黒色を呈し、胎土はやや粗、石英・長石等の砂粒を多く含む。黒斑は認められないが、断面が黒色を呈することから、野焼きと考えてほぼ間違いないであろう。また、9号墳より後出のものであることもほぼ間違いないであろう。5世紀前葉墳のものではないだろうか。4点はいずれも第Ⅱ期調査のC—3区から出土しており、現在削平され、崖面をなす9号墳の南側に古墳が存在したと考えられるが、現在では確かめようがない。

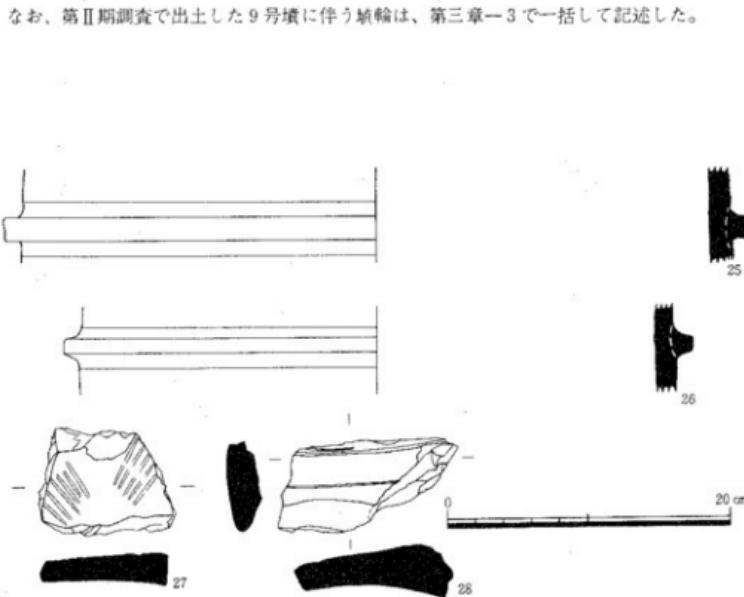


図26 西側斜面出土埴輪実測図

第五章 玉手山9号墳の検討

1. 墓丘の築成(図27)

トレンチ調査ではあるが、墳丘の規模を復元すると、全長64.6m、後円部直徑33.2m、高さ5.7m、前方部幅17.7m、高さ2.6mとなる。墳形は擬形に開く可能性も考えられたが、前方部がほとんど広がらずにのびる、いわゆる柄鏡形と考えるほうが自然である。段築は、後円部三段、前方部二段と考えられるが、後円部と前方部の各段の高さが大きく異なる。しかし、埴輪列、葺石の検出状況から、この復元が妥当であろう。

墳丘基底部はTP93.4mから94.0mの範囲内にあり、最も低い後円部西端と最も高い北側部では、0.6mも高さが異なる。これは、西側が低くなっている地形に影響されたものであろう。基底部の高さが異なるため、第一段テラスもやはり後円部西端が最も低くなるようである。第一段テラスの高さは、後円部で96.1~96.6m、前方部で94.8~95m。第二段テラスの高さは、後円部で97.5~97.8m、前方部で96~96.4m、後円部の高さは99.5m前後と考えられる。後円部斜面の傾斜角は32°である。

9号墳は、南北にのびる丘陵頂に位置し、地形を有効に利用して築かれている。墳丘のかなりの部分が地山を削り出すことによって築かれており、特に前方部はその大部分が地山から成る。墳丘の盛土は、黄灰色砂質土と赤褐色粘質土を中心とするが、黄灰色砂質土は地山の黄褐色

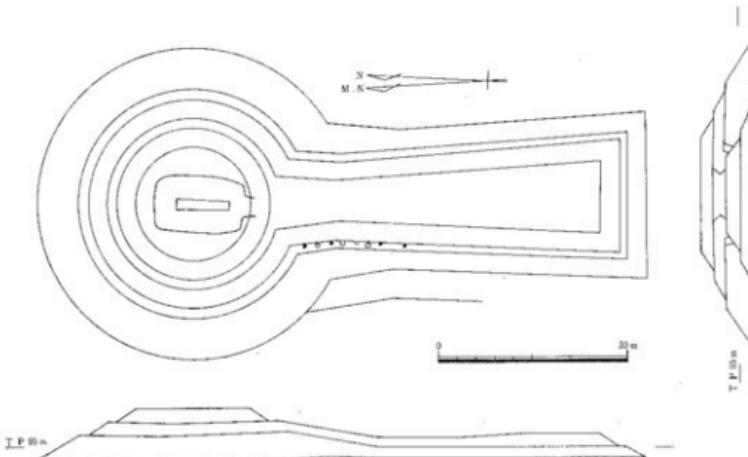


図27 玉手山9号墳推定復元図

色砂質土を利用したと考えられ、赤褐色粘質土は赤橙色粘土の地山を利用したと考えられる。後者は、赤褐色砂礫土の利用も考えられる。赤褐色砂礫土は5~10cmの大きさの石を多く含んでいるため、これらの石を取り除いて利用し、これらの石は葺石に転用したのであろう。

墳丘の盛土は、ほぼ水平層をなし、墳丘テラス付近では細かい層をなす。墳丘の盛土が下方から順次行なわれたものか、ほぼ積み上げてから再度テラス等を築いたものかは、墳丘断面を調査していないために不明である。しかし、テラス部分を意識的に丁寧に築いているのは間違いないであろう。砂質土と粘質土を交互に積み上げ、叩き締めることによって、テラスの補強をはかったものと思える。

葺石は、一部地山内の石と思えるものがあり、安山岩の板石、緑色結晶片岩もごくわずかにみられるが、大部分が河原石であり、石川の石が使用されているということである。また石室に使用されている安山岩は龜ノ瀬産ということである。龜ノ瀬は大和川河岸に位置し、石川との合流点から上流へ向かって約4.5kmの位置にある。これらの石をどのようにして9号墳まで運びあげたのであろうか。当然考えられるのが水運である。9号墳に最も近い石川右岸まで船によって運び、そこで陸上げされたのであろう。ここで注目されるのが西斜面で検出された墓道と考えられる2本の道状遺構である。最近、群集墳に伴う墓道の発見例が増加しているが、前期古墳に伴う墓道は初見であろう。墓道とは、その性格上、古墳築造のために築かれたものと、古墳築造後の祭祀等のために築かれたものとに大別できると思うが、両者を区別するのは困難であり、また多くは両者の性格を兼ね備えていたのであろう。玉手山9号墳の場合は、前者の性格が濃厚であると考える。

西側斜面の調査当初から墓道が発見されるのではないかと注意していたが、墓道は尾根上に築かれているであろうと考えていた。ところが、予想に反して、谷の最奥部で発見された。墓道が谷に築かれた原因是、資材の運搬に関係があると思える。資材は一旦、一箇所に集積され、そこで石の選別等が行なわれた後、墳丘に運び上げられたと考えられる。それは、葺石基石に大型の石を使用していること、葺石の中にチャートの占める比率が高いことなどから考えられる。それならば、谷の奥まで資材を運び、そこで選別した後に谷斜面を上るほうが、尾根の先端から上るより能率的である。古墳築造に駆り出された人々が、一列に並び、手渡して資材を運び上げたならば、谷斜面の傾斜が強いことはそれほど問題にならないであろう。このように、墓道が谷に築かれていることを考えれば、古墳築造のために築かれた墓道であると考えられるのである。9号墳の東側に墓道が存在したか否かは、今となっては確認しようもないが、地形上、西側にしか存在しなかったのではないかと考えられる。

くびれ部基底部で検出されたテラス状遺構も類例の少ないものである。このテラス状遺構がくびれ部だけに存在するのか、前方部へも続いているのかは、遺存状況が良好でないため確認できなかった。祭祀の場とも考えられ、中期古墳の造り出しを連想させる。立地から、9号墳

は西側を正面にすると考えられるが、墳丘の西側のみにみられる遺構かもしれない。

埴輪列は第5・6トレンチで、第一段テラス上の4個体の底部が原位置に存在した。抜き取り跡1箇所を含め、各埴輪の心々距離は2.7mとなり、一般例と比べ、非常に間隔が広いことが注目される。4個体の埴輪は、いずれも胎土・技法等に共通した特徴がみられる。

各埴輪の中間位置には直径50cm、深さ30~40cmの円形ピットが存在した。これらのピットは、No 3と4の埴輪の間には存在せず、他のトレンチでも確認されていないことから、くびれ部にのみ存在すると考えられる。このピットには、木製品が樹立されていたのではないだろうか。⁽²⁾ 形象埴輪成立以前には、実物が墳丘に樹てられていたと考える説があるが、9号墳からは形象埴輪が全く出土していないことが注目される。ピットには、形象埴輪に代わる何らかの木製品、例えば蓋、鳥形、高杯、盾などの木製品が樹立されていたのであろう。⁽³⁾ このピット列と、くびれ部のテラス状遺構がセットとなり、9号墳における古墳祭祀の一端を示しているとも考えられる。

2. 石室の構築(図28)

竪穴式石室については前述したので、ここではその構築方法について考えてみたい。まず、墓塚の掘削から始まるのは当然だが、墓塚は墳丘の盛土が行なわれた後に、墳頂から掘り込まれている。墓塚の輪郭を検出するのは困難であったが、西側の一部で確認され、それを追求することによって明らかにできた。墓塚は二段に掘り込まれ、床面は平坦面をなす(1)。この際に、排水溝も同時に掘削されていると考えられる。

次に、墓塚床面に、約20cmの厚さに礫を敷きつめる(2)。そして、粘土棺床設置部分に板石を敷いて範囲を決めた後(3)、その外側に約30cm、4~5段の高さまで壁体を積み上げる。その際に、壁体下に更に約5cmの厚さに礫を敷いている(4)。粘土棺床下の板石・礫には朱の付着が認められるが、壁体下の礫敷には、石室内側に面する礫にのみ朱が認められ、壁体下に隠れる礫には朱が認められない。壁体も石室内側の面にのみ朱が認められる。これらの事実から考えると、(4)の工程が終了した段階で石室内側の全面に朱が塗布されたと考えられる。あるいは、それまでも、石室中央にのみ1~2回朱が塗布されている可能性もある。ここで初めて粘土棺床が設置される(5)。粘土棺床にも全面に朱が塗布されたようである。粘土棺床上面の平坦面にも朱が認められるので、木棺内の朱が遺存したと考えるよりも、粘土棺床に直接朱が塗布されたと考えるほうが適切である。この段階で割竹形木棺を安置し、葬送儀礼、および首長權繼承儀礼が行なわれたのであろう(6)。その後、壁体を上部まで積み上げ、天井石を架構した後、灰白色の粘質シルトで覆い、完全に埋められたのであろうが、この間の工程は現状では充分に確認できない(7~10)。

石室の構築方法を以上のように復元したが、ここで問題となるのは粘土棺床よりも壁体4~

5段が先に築かれたと考える点であろう。椿井大塚山古墳など一、二の例外を除くと、粘土棺床のほうが先に築かれるのが一般的なようである。9号墳で壁体を先に築いていると考えた理由は以下の事実による。

第一に、粘土棺床は壁体に密着しており、一部の粘土が壁体にかぶさるような状況を呈すること、第二に、壁体の積み方が4～5段までとそれより上部とで大きく異なること、第三に、壁体、および壁体下の礫敷の石室内側、つまり粘土棺床によって隠れる部分に朱塗りが認められることである。第一点については、粘土棺床設置後に壁体を積み上げても不可能ではない。しかしその場合、壁体の石室内側の面をま

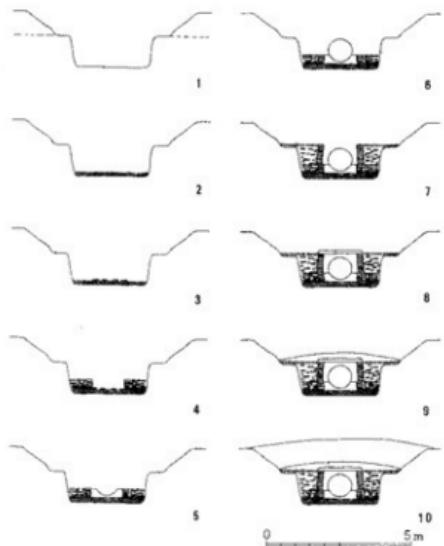


図28 玉手山9号墳竪穴式石室構築推定復元図

っすぐに揃えることが非常に困難だと思えるが、現実には揃っているのである。第二点については、4～5段までは板石の長辺を石室主軸と平行に丁寧に積んでいるが、それより上部では板石の長辺を石室主軸に直交させ、粗雑な積み方となる。これは、壁体上部の板石を控え積みの板石で押えることによって、壁体を強化したためであると考えられるが、明らかに、その間に一時的な積み上げの休止があったことを示す。また東壁においては、この面より上部では壁体が約5cm外側から積み上げられている。これは、安置された木棺の大きさ、位置等が原因となり、壁体を外側へ広げざるを得なかつたためではないだろうか。更に、4～5段までの板石にはほとんど朱が塗布されているが、それより上部の板石には朱の塗布は認められない。第三点については、壁体に使用された板石に、あらかじめ朱が塗布されていたとも考えられるが、それならば、壁体下の礫敷の石室内側の面にのみ朱が認められるという事実を説明できないうえ、板石も石室の内側の面とその近くの上下面にしか朱が認められない。また、朱の遺存状況は、板石を朱につけたのではなく、ハケ状のもので塗布したと考えられるものである。⁽⁴⁾

一般の竪穴式石室では、粘土棺床上面から壁体を築いているが、9号墳の場合は、粘土棺床下面から壁体を築いている。この構築法の差が、壁体下部を先に築くか否かに関わってくるものと思えるが、この構造は他地域では類例が少なく、玉手山の地域的特色であるとも考えられる。⁽⁵⁾

玉手山9号墳が、いつ、どのように調査されたのかは不明であるが、石室断面の模式図が北野耕平氏によって報告されている。⁽⁶⁾また、この模式図を実測図として山本三郎氏が論考している。⁽⁷⁾しかし、この模式図は実際とはかなり異なったものである。それは、北野氏が墓塚底部に基台があるか否か、粘土棺床下に礫を敷くか否かに注目し、石室構造を分類した模式図だから当然のことである。北野氏の本文中の記載「墓塚の床面は平坦であって、その上面に10匁余りの礫石を敷きつめ、更に薄い板石で全面をおおった上に粘土棺床を設けて竪穴式石室を構築したものである。」という話は事実と合致する。このような経過から、9号墳が誤った評価をされているのは残念である。

石室に使用されている板石は、大部分が安山岩であるが、緑色結晶片岩がわずかにみられる。しかも、20cm前後の小片が多い。確実に原位置を留めているものがなかったため、どのように使用されていたかは不明であるが、石室内の礫敷上面付近で比較的多くみられた。紀ノ川産の緑色結晶片岩と思えるが、緑色結晶片岩に宗教的な意味があったとも考えられる。あるいは、紀ノ川周辺の首長との政治的関係を示すものかもしれない。緑色結晶片岩は、葺石からも數点見出された。

3.まとめ

狭義の玉手山古墳群内においては、北玉山古墳（玉手山10号墳）以外に正式な報告が出されていないが、北野氏らの報告を参考にし、9号墳の位置づけを試みてみたい。

玉手山古墳群においては、4号墳・5号墳・6号墳・9号墳・北玉山古墳が調査されており、6号墳は東西に2基の竪穴式石室が存在したということである。これらの竪穴式石室の構造を比較すると、共通点は、いずれも墓塚床面に礫を充填している点である。

相違点を見ていくと、4号墳・6号墳の両石室は、9号墳と同様に墓塚床面が平坦であったようであるが、壁体が粘土棺床下面から築かれているか、上面から築かれているかは不明である。⁽⁸⁾5号墳と北玉山古墳は、墓塚床面に基台を有する構造であるが、基台と粘土棺床の間に礫を充填し、北玉山古墳では粘土棺床と基台の大きさが一致しないことから考えると、都出比呂志氏の指摘するように、周溝の変形とみなすべきであろう。⁽⁹⁾粘土棺床下に板石を敷くものは、9号墳以外に4号墳と5号墳がある。4号墳は厚手の板石を二枚重ねにしており、5号墳はやはり板石を二重に敷き、粘土棺床側面にも板石を貼り付けている。いずれも、9号墳より丁寧な構造である。

玉手山9号墳の石室内からは、鉄剣先が一点出土したのみであり、遺物によって時期を決定することは困難である。他の古墳では、遺物の顕著な差違は認められないが、北玉山古墳から滑石製勾玉が出土しており、6号墳東石室からも滑石製勾玉が出土しているようであり、やや時期が下ると思われる。これらのことから考えると、山本氏の指摘するように、玉手山古墳群内

においては、粘土棺床下に板石を敷く構造のほうが古いと考えられる⁽¹⁰⁾。しかし、墓塚床面に基台を有する石室が古いと考える根拠はない。現に、北玉山古墳でこの構造がみられるのである。

再び玉手山9号墳の石室構造を考えてみると、粘土棺床下面と壁体下面の高さが一致する点、二段掘りの墓塚である点は、やはり特異である。粘土棺床下面と壁体下面の高さが一致する石室は、椿井大塚山古墳、安山瓢箪山古墳、寺戸大塚古墳などがあげられ、比較的古式の古墳が多い。特に寺戸大塚古墳は二段掘りの墓塚を持つ点で、最も9号墳に類似する。石室の規模もあまり変わらない。しかし、寺戸大塚古墳にみられる墓塚床面の周溝は9号墳ではみられないし、寺戸大塚古墳では壁体は粘土棺床設置後に積み上げられているということであり、この点も異なる。⁽¹¹⁾

山本氏の指摘するように、玉手山古墳群は山城の影響を受けていると考えられ、寺戸大塚古墳との類似点を考えてみると、9号墳も例外ではないと思える。むしろ、最も強い影響を受けているように思われる。4・5号墳と9号墳を比較した場合、いずれが古いとも決し難い。あるいは、5号墳は9号墳とは異なる時期に他地域、特に山城からの影響を受ける機会があったのかもしれない。玉手山古墳群は3～4グループに分けることが可能であり、各グループ間における性格の差を考えることも必要であろう。

また、内部構造の不明である玉手山古墳群内の古墳の中、1号墳の埴輪、7号墳の滑石製盒子は、いずれも新しい様相を呈する。3号墳から出土したと言われる割竹形石棺も、その直弧文の構成などから考えると、あまり古くならないように思える。9号墳の埴輪は、薄手であり、透孔の形態、線刻、内面のヘラケズリ調整、朝顔形埴輪の形態などは古い特徴を示しているうえ、墳形や、墳丘が地山の削り出しを中心とする点なども古い特徴を示す。

これらのことから考えると、9号墳は玉手山古墳群内における最古の古墳の一つと考えてよいであろう。もちろん、古墳群が3～4グループで形成されている以上、9号墳に並行する時期の古墳は存在するだろうが、現在は確認できない。ただし、未調査である8号墳は、9号墳に先行する可能性を残している。墳丘はほとんど地山整形によって築かれており、玉手山丘陵の最高所に位置している。しかし、何度も表面観察を繰り返したが、埴輪の破片すら採集できなかったため、これを確認する方法はない。

玉手山9号墳の年代は、頗著な遺物が出土していないため確定することは困難であるが、現在のところ、4世紀後葉前後と考えておきたい。今後、もし9号墳から出土した遺物の内容が明らかになれば、年代は更に明らかにされるであろう。

今回の調査では、9号墳に伴う遺物以外に弥生時代後期の土器片が出土している。調査では遺構は確認されていないが、谷からその大部分が出土しており、9号墳築造以前に周辺に弥生時代後期の高地性集落が存在したのであろう。

また、9号墳以外の埴輪の出土が注目される。その出土が調査地区南端付近に集中すること

から、9号墳の南側にも古墳が存在したのであろう。9号墳の南には、黄金塚古墳という円墳が存在したということであるが、その実態、正確な場所は不明であり、この埴輪が黄金塚古墳に伴うものか、他に古墳が存在したのか、削平されてしまった現在では確かめようがない。埴輪は野焼きと考えられ、大型で、厚く、9号墳より新しい時期のものであることは疑いない。5世紀前葉頃のものではないだろうか。最近、玉手山古墳群内の中期古墳の実態が徐々に明らかにされつつあるが、これまでには1号墳周辺の丘陵端部に限られていた。しかし、9号墳周辺にも中期に下る時期の古墳が存在する可能性が示された資料である。

大阪府下では前期古墳を調査する機会は非常に稀になった。それ故、玉手山9号墳の調査は学術的に貴重なものであると言えよう。その成果においても、石室構造、埴輪間のピット列、くびれ部のテラス状造構、特異な埴輪など例を見ないものが次々と確認された。充分な調査、報告ができたかどうか不安も残るが、本報告をもって、玉手山9号墳発掘調査報告とし、不満があれば、後日改めることにしたい。

註

- (1) 奥田尚氏教示
- (2) 伊達宗泰「高杯形埴輪について」『櫻原考古学研究所論集』第四 1979 ほか
- (3) 京都府今里大塚古墳から出土した木製蓋が注目される。
京都府立山城郷土資料館『南山城の歴史と文化』 1982
- また、兵庫県五色塚古墳で、同様の遺構が確認されている。五色塚古墳では、前方部・後円部の東側中段の埴輪溝に接して、円形掘方の柱状造構が検出され、遺構の間隔は前方部で約5.3m、後円部で約6mあり、9号墳よりも間隔は広い。掘方の径約40cm、柱穴径約16cm、深さ40~70cmであり、これは9号墳と近い数値を示す。また、掘方内には葺石と同質の石を入れて柱を固定していたようである。
- 神戸市教育委員会『史跡五色塚古墳 復元・整備事業概要』1975
- (4) 長々と説明を加えたのは、粘土棺床が壁体より先に築かれていることを論じた山本三郎氏が、9号墳もそのように理解していることと、第七回大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(1982)でこの考え方を発表した際、二・三の方から説明を求められたためである。
山本三郎「畿内における古墳時代前期の政治動向についての一視点——埋葬施設の構造を中心として—」
『ヒストリア』87号 1980
- (5) 鳴田暁氏が同様の指摘をしている。
鳴田 暁「古式古墳の堅穴式石室の構築について」『愛泉女子短期大学紀要』2号 1967
- (6) 北野耕平「前期古墳における内部構造の問題」「河内における古墳の調査」大阪大学文学部国史研究室
1964
- (7) 山本三郎 前掲論文
- (8) 6号墳東石室では、壁面と約10cmの間隔を置いて礎層の上に直立した形で粘土棺床が存在し、壁体の下半を積み上げてから木棺を安置し、壁体上半を積み上げたと考えられている。(鳴田暁 前掲論文)
事実であるならば、9号墳と非常によく似た構造となり、9号墳との関係が注目される。しかし、6号墳東石室からは滑石製勾玉が出土しているということであり(石部正志『大阪の古墳』1980)、9号墳の時

期が新しくなる可能性もある。

- (9) 都出比呂志「埴輪編年と前期古墳の新古」『王陵の比較研究』京都大学文学部考古学研究室 1981
- (10) 山本三郎 前掲論文
- (11) 京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団『京都向日丘陵の前期古墳群の調査』『史林』54巻6号 1971

付章1 石材・赤石顔料について

1. 石材とその採石地について（図版25）

石室の石材の岩石種・礫敷の礫種・葺石の岩石種とその採石地について述べる。

①石室の石材の岩石種

石室に使用されている石材は板状節理が顕著な黒色の安山岩である。角が明瞭に見られる割り石である。岩石の肉眼及び偏光顕微鏡による観察について述べる。

肉眼による観察：玻璃質の輝石安山岩

岩石の表面は風化して灰色であるが、断面は灰黒色である。板状節理が顕著である。節理の厚さは3cm～10cmである。節理面には発泡孔が僅かに見られる。最大孔径は4mmである。造岩鉱物は長石、輝石である。長石は無色透明で自形である。粒径は0.5mmである。量は多い。輝石は黒色で短柱状の自形である。粒径は0.5mmで、量はごく僅かである。石基は淡黒灰色で、玻璃質で固い。

偏光顕微鏡による観察：單斜輝石斜方輝石安山岩

鏡下では、微斑晶として斜方輝石、斜長石、單斜輝石が見られ、この他に斜長石、石英の破片が捕獲品として見られる。粒径は0.2mm～0.8mmである。單斜輝石の反応縁をもつものがある。石基は斜長石、斜方輝石、單斜輝石、ガラス、不透明鉱物からなる。粒径は0.016mm以下である。斜長石は自形短骨状で、配列は流理を示す。粒径は0.03mm～0.2mmである。斜長石の組成はAn=73%～46%である。斜方輝石、單斜輝石は自形短柱状である。粒径は0.03mm～0.1mmである。單斜輝石は粒径0.5mmに及ぶ集合体を作る。ガラスは汚濁した褐色を呈する。この他に、カンラン石？の仮像がある。粒径は0.1mm～0.2mmである。

この石材の採石地について述べる。

玉手山9号墳を中心にして、近距離で同質の岩質で、板状節理の顕著な岩石を採石できる地点は、柏原市峰南方亀ノ瀬の現在地にり地となっている部分の大和川右岸である。この岩石について、肉眼、偏光顕微鏡による観察について述べる。

肉眼による観察：玻璃質の輝石安山岩

風化面は淡茶褐色～灰色で、断面は灰黒色である。板状節理が顕著である。節理の厚さは3cm～15cmである。造岩鉱物は石英、長石、輝石である。石英は茶褐色透明である。周囲に凹みがあり、球状の捕獲品である。最大粒径は7mmで、量はごく僅かである。長石は無色透明で、自形である。最大粒径は0.5mmである。量は多い。輝石は無色で柱状の自形である。最大粒径は0.5mmで、量はごく僅かである。石基は灰黒色で玻璃質で固い。

偏光顕微鏡による観察：單斜輝石斜方輝石安山岩

鏡下では、少量の斜方輝石、単斜輝石、斜長石の微斑晶が見られる。石基は主に短冊状の斜長石、斜方輝石と粒状の単斜輝石や不透明鉱物からなり、少量のガラスを伴う。この他に、石英の捕獲晶が見られる。粒径は0.08mm±である。斜長石は自形短冊状である。粒径は0.02mm~0.08mmである。微斑晶は0.2mm~0.8mmである。両者共に正常累体構造を示す。組成は核部で、An=73%である。斜方輝石は自形短冊状である。粒径は0.02mm~0.08mmである。微斑晶は自形短柱状で、粒径は0.25mm~0.5mmである。しばしば単斜輝石と平行連晶することが多い。単斜輝石は自形短柱状である。粒径は0.04mm~1mmである。時計盤構造を示す場合がある。

古墳名	所在地	岩石種	産地	備考
箸墓古墳	奈良県桜井市箸中	カンラン石輝石玄武岩	芝山火山岩	
波多古塚古墳	奈良県天理市萱生町	カンラン石輝石玄武岩	芝山火山岩	
アンド山古墳	奈良県天理市柳本町	カンラン石輝石玄武岩	芝山火山岩	
玉手山3号墳	大阪府柏原市旭ヶ丘	カンラン石輝石玄武岩	芝山火山岩	割竹形石榴
西ノ山古墳	大阪府八尾市樂音寺	カンラン石輝石玄武岩	芝山火山岩	
ヒエ塚古墳	奈良県天理市萱生町	カンラン石輝石安山岩	芝山火山岩	
マバカ古墳	奈良県天理市萱生町	カンラン石輝石安山岩	芝山火山岩	
下池山古墳	奈良県天理市成願寺	カンラン石輝石安山岩	芝山火山岩	
東殿塚古墳	奈良県天理市中山町	カンラン石輝石安山岩	芝山火山岩	
柳本大塚古墳	奈良県天理市柳本町	カンラン石輝石安山岩	芝山火山岩	
松岳山古墳	大阪府柏原市国分市場	カンラン石輝石安山岩	芝山火山岩	長持形石榴
櫻山古墳	奈良県天理市柳本町	輝石安山岩	明神山火山岩	長持形石榴
玉手山9号墳	大阪府柏原市円明町	輝石安山岩	明神山火山岩	
津堂城山古墳	大阪府藤井寺市津堂城山	天井石・流紋岩質溶結凝灰岩 側壁石・輝石安山岩	蛭路酸性岩 明神山火山岩	長持形石榴
メスリ山古墳	奈良県桜井市高田	天井石・片麻状石英閃綠岩 側壁石・石英安山岩	寺山火山岩?	
鎌子塚古墳	奈良県御所市坂上	石英安山岩	寺山火山岩?	
宮山古墳	奈良県御所市室	天井石・流紋岩質溶結凝灰岩 側壁石・結晶片岩	蛭路酸性岩 紀の川の川石	長持形石榴
野神古墳	奈良市京終町南細井	天井石・黒雲母花崗岩 側壁石・黒雲母花崗岩 片麻状黑雲母花崗岩	天理市東部 川原石 川原石	剝抜式 家形石榴

表3 大和河内の竪穴式石室の石材

河内・大和で堅穴式石室の側石又は側石と推定される石材の岩石種は表3に示すように、カンラン石輝石玄武岩、カンラン石輝石安山岩、輝石安山岩、石英安山岩等である。カンラン石輝石玄武岩・カンラン石輝石安山岩は柏原市国分市場芝山の岩石と同質である。輝石安山岩は前述のように亀ノ瀬付近の大和川右岸の岩石（明神山火山岩）と同質である。石英安山岩は柏原市田辺南方の寺山火山岩の岩相の一部に相当（？）する。

石材の切り出した採石順を推定すれば、芝山→亀ノ瀬→寺山？となる。岩石の偏光顕微鏡による観察は政岡邦夫氏によるものである。

②礫數の礫種

石室内の礫数の礫形は亜角礫、亜円礫、円礫である。礫種は石英閃綠岩、石英安山岩、礫岩、砂岩、チャートである。石英閃綠岩・チャートは多く、石英安山岩、礫岩、砂岩は僅かかごく僅かである。石英閃綠岩は亜角礫が多く、チャートは亜角礫か円礫である。砂岩は円礫である。最大礫径は10cmである。礫の上面に赤色顔料が付着している場合が多い。

各礫種の特徴について述べる。

石英閃綠岩：灰色で、亜角礫である。最大礫径は8cmである。表面は磨滅して川原石様である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明である。粒径は3mmで、量は僅かである。長石は白色である。粒径は3mmである。量は多い。黒雲母は黒色板状である。粒径は2mmである。量は僅かである。

石英安山岩：灰色で、亜角礫である。礫径は5cmで、量はごく僅かである。表面は磨滅して川原石様である。造岩鉱物は石英、長石である。石英は無色透明で、球形である。表面は溶融され、灰色である。粒径は5mmで、量はごく僅かである。長石は白色で自形である。粒径は5mmで、量は多い。石基は灰色でやや玻璃質で固い。

礫岩：暗灰色で亜円礫である。礫径は8cm～6cmで、量はごく僅かである。構成礫種はチャート、火山岩である。チャートが非常に多い。チャートは暗緑色で、亜円礫である。礫径は8mmである。火山岩は灰色で亜角礫である。礫径は5mmで、量はごく僅かである。基質は中粒砂である。

砂岩：灰色、暗灰色で円礫である。礫径は10cm～4cmで、量は僅かである。構成砂粒は中粒～細粒である。数cmのチャート礫が僅かに含まれる場合がある。

チャート：白色、灰色、暗灰色、淡茶色で、亜角礫、亜円礫である。亜円礫が多い。礫径は8cm～4cmである。量は多い。

礫數の礫を同じ場所で採取したとすれば、次のように推定される。当古墳付近の河川は北に大和川、東に原川、西に石川がある。大和川の礫種としては花崗岩類、輝石安山岩、チャートが主を占める。原川の礫種としては石英安山岩、チャート、花崗岩類が主を占める。石川の礫種としては花崗岩類、チャート、礫岩、砂岩等が主を占め、石英安山岩、凝灰岩が見られる。

以上のことから、礫敷の礫は当古墳西方の石川から採取したと推定される。

③ 莖石の岩石種

莖石の礫形は角礫、亜角礫、亜円礫、円礫である。亜角礫、亜円礫が多い。岩石種はアブライト、石英斑岩、毬果流紋岩、石英安山岩、輝石安山岩、溶結凝灰岩、礫岩、砂岩、泥岩、チャートである。チャートが非常に多い。他は僅かである。

アブライト：礫形は亜角礫が多い。灰白色、暗灰色である。造岩鉱物は石英、長石である。石英は無色透明で多い。最大粒径は6mmである。長石は白色である。最大粒径は10mmである。量は多い。1.6%。⁽¹⁾

毬果流紋岩：角礫で、ごく僅かである。黄土色である。淡黄土色の毬果が点在する。毬果の粒径は3mmで、僅かである。石英は無色透明の自形である。量は多い。粒径は2mmである。石基は黄土色で、緻密である。0.2%。

石英安山岩：亜角礫である。茶褐色である。量は僅かである。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は表面が溶融され、球形である。粒径は7mm～2mmで、量は僅かである。長石は白色で、自形である。粒径は5mmである。量は多い。黒雲母は黒色で、六角形板状である。粒径は2mmで、量はごく僅か認められない場合がある。石基は茶褐色で緻密である。2.0%。

輝石安山岩、輝石安山岩には黒色玻璃質で表面に流理を残すように風化している安山岩と表面が灰色で、形が板状の安山岩がある。1.6%。

輝石安山岩A：表面は灰色で線状に風化している。風化して表面に鋭い稜部が見られる。断面では黒色玻璃質である。細粒の輝石、長石が僅かに認められる。石基は黒色で玻璃質である。

輝石安山岩B：表面は灰色である。板状で、角が僅かにとれた亜角礫である。断面では灰黒色である。細粒の輝石と長石が僅かに認められる。石基は灰黒色でやや玻璃質である。

溶結凝灰岩：暗灰色、黒色である。亜角礫である。溶結構造が顕著である。構成礫種は軽石、火山岩である。軽石は白色で、レンズ状である。礫径は3cmである。量は多い。火山岩は青灰色で玻璃質の流紋岩である。礫径は2cmで、量はごく僅かである。石基は黒色で、玻璃質である部分と灰色で玻璃質の部分とがある。0.04%。

礫岩：灰色で、亜角礫である。構成礫種はチャート、砂岩である。チャートは灰色、青灰色の亜角礫である。礫径は5mm～3mmである場合が多く、稀に1cmを越す場合もある。量は非常に多い。砂岩は灰色で、亜円礫である。礫径は3mmである。量はごく僅かである。基質は暗灰色で、中粒から細粒の砂岩である。2.7%。

砂岩：灰色で、亜円礫、円礫である。礫質の場合もある。礫種は主として、チャートである。砂粒は中粒である。11.3%。

泥岩：灰色、黒色で亜円礫である。量は僅かである。1.8%。

チャート：灰白、灰白色、暗灰色、暗赤色、黒色で、亜角礫、亜円礫、円礫である。亜円礫

が多い。量は非常に多い。74.1%。

当古墳を中心にして、葺石の礫種を採取できる川としては、石川が推定される。

原川はチャート、石英安山岩を採取できるが、溶結凝灰岩、礫岩、砂岩は採取できない。大和川ではチャート、輝石安山岩、石英斑岩を採取できるが、原川と同じように、溶結凝灰岩、礫岩、砂岩を採取できない。石川ではチャート、毬果流紋岩、溶結凝灰岩、石英安山岩、礫岩、砂岩、泥岩が採取できる。また、石川の礫種構成では花崗岩類、チャートが多い。しかし、葺石の礫種ではチャートが非常に多いため、意図的にチャート礫を多く採取したと推定される。

2. 赤色顔料について

石室内の礫敷の礫に赤色顔料が付着していた。この赤色顔料の鉱物種をX線粉末法により調べた。回析結果は表4に示すとおりである。最強線が $d=3.350\text{ \AA}$ であり、 $d=2.866\text{ \AA}$ 、 $d=3.174\text{ \AA}$ 、 $d=2.080\text{ \AA}$ 、 $d=1.984\text{ \AA}$ と順次強度が弱くなる。X線の反射強度と同析面間隔が一致する鉱物は辰砂である。A STMAカードによれば6-0256の六方晶系の辰砂に一致する。他に、石英、長石のピークが見られる。螢光X線分析によればHgは検出されたが、Asは検出されない。また、原子吸光による元素確認でも、Asは検出限界以下であった。

含有される石英、長石については、辰砂の原岩の一部か、後の混入物か、混和剤か不明である。

当古墳を中心にして、辰砂を採取できる場所は図29に示すようである。分布を大きく区分すれば、大和と伊勢の2地域となる。大和の辰砂は黄鉄鉱をごく僅かに伴うこともあるが、鷦鷯石は含まれない。伊勢の辰砂は鷦鷯石を伴うことが多い。以上のことから、当古墳に使用された赤色顔料の辰砂は大和産であると推定される。大和に分布する水銀鉱山跡

玉手山9号古墳赤色顔料				振砂 ASTMA card 60256	
X線回折		鉱物種		d(Å)	%
d(Å)	%	辰砂	石英	d(Å)	%
4.269	33		○		
4.057	5				
3.784	5				
3.492	4			3.59	6
3.350	100	○	○	3.35	100
3.254	15				
3.197	17				
3.174	25	○		3.16	30
2.997	5				
2.939	5				
2.866	83	○	○	2.866	95
2.461	25				
2.385	8	○		2.375	10
2.281	8		○		
2.237	5		○		
2.131	8		○		
2.126	7		○		
2.080	16	○		2.074	25
2.027	6	○		2.026	6
1.984	18	○	○	1.980	35
1.820	15		○	1.900	4
1.771	7				
1.764	6	○		1.765	20
1.736	8	○		1.735	25
1.677	13	○		1.679	25
1.544	9		○	1.583	6
1.383	7			1.562	6
1.376	7				
1.373	11		○		
1.343	6	○		1.344	12
1.306	4	○		1.305	10
1.257	7	○		1.269	4
				1.258	8

表4 赤色顔料のX線回析

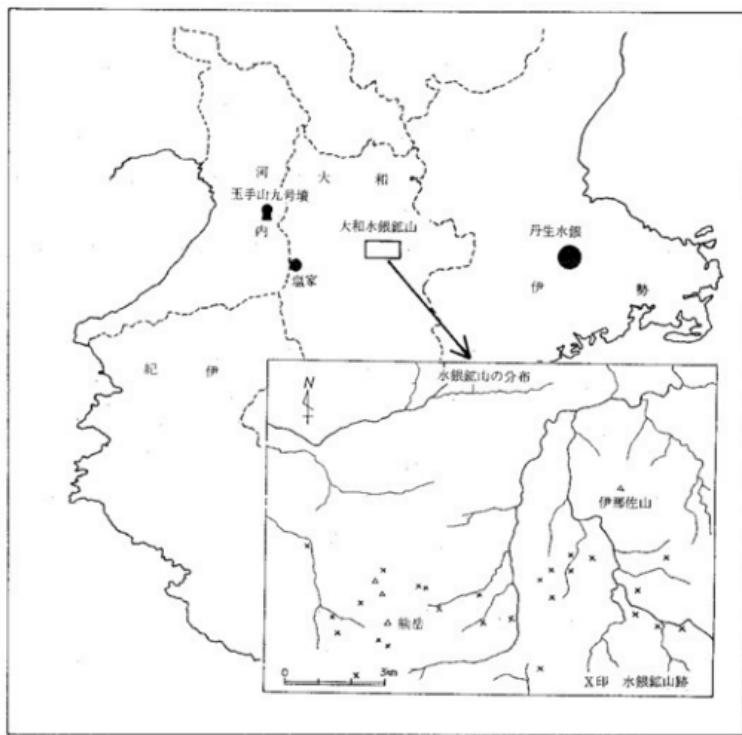


図29 水銀鉱石の産地

は図29に示すとおりである。宇陀郡大宇陀町を中心に桜井市の東部に至る地域と御所市塩家付近である。このいずれから辰砂が採取されたか決めるることはできない。兎田野の古老人によれば、「昭和の初め頃、新羅貴鉱山では砂礫中の辰砂を採取していた。」と、言うことであった。大和水銀鉱山の技師の話によれば「十谷斜坑3番樋付近に旧坑があり、奈良時代の祭器が残っていた。」ということであった。奈良時代には地表下30cmぐらいまで、坑道掘りがされていたことがうかがえる。新羅貴鉱山では昭和になても砂礫の辰砂を採取していることから、古墳時代では、鉱脈付近の砂礫を採取した可能性がある。

X線回析、螢光X線分析、原子吸光分析は秋山隆保氏にお願いした。感謝する。

(奥田)

註

(1) 第5トレンド、くびれ部の葺石2,724個に占める比率である。

付章2 玉手山9号墳移設基本計画

1. はじめに

国分第2中学校建設予定地となった玉手山丘陵には、日本でも数少ない古墳時代前期後半の前方後円墳を中心とする古墳群がある。特に計画地には、東側半分は破壊を受けているが西半分は残存良好な玉手山9号墳が存在することから、その保存と活用が問題となった。

このため柏原市教育委員会は、玉手山古墳群の全体整備を含めた玉手山9号墳の保存を検討する委員会を設け、歴史教育的、社会教育的な活用を図る上での移設復原構想を策定した。その骨子としては、①中学校建設計画地内に移設し、歴史教育的な教材として広く市民に活用すること。②移設復原にあたっては、古墳軸線をなるべく変更せず校舎配置計画と融合を図ること。などがあげられる。市教育委員会は、それらを具体化する上での基本計画策定を行うこととし、文化財保存計画協会に当事業の基本計画の策定を依頼した。

このレポートは、「玉手山9号墳移設復原基本計画」の中から、玉手山9号墳の移設復原についての計画を抜粋したものである。

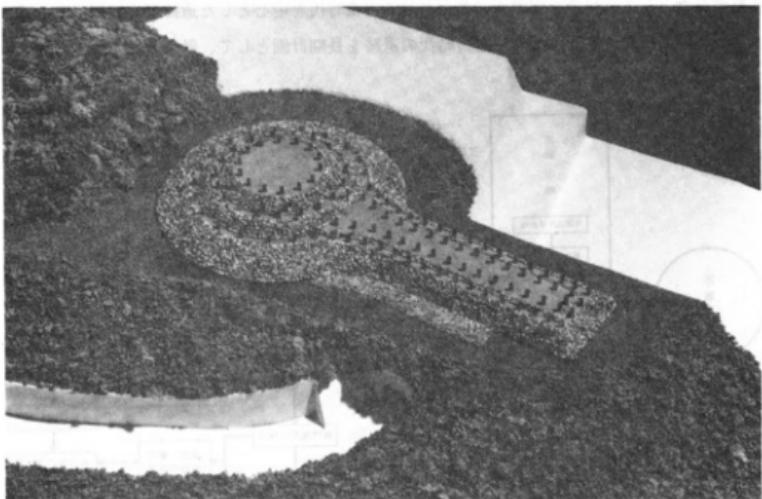


図30 玉手山9号墳復原模型

2. 移設にあたっての基本方針

玉手山9号墳の移設にあたっては、柏原市全域の遺跡群の中での歴史的、地域的な位置づけを明確に行い、唯一築造当初の姿を示すものとして復原整備し、活用を図ることとする。そのためには、現在市内で崩壊の危機に瀕している遺跡群の保存を図り、それらの全体整備計画の一環として玉手山9号墳の移設復原を位置づけ、歴史教育の場として広く公開できる場を提供し、市民の生活環境の創造に寄与できるものと思われる。

3. 柏原市の文化財整備

柏原市は、奈良盆地から大阪平野へ流れる大和川が石川と合流する地点に位置し、古くから交通の要衝として栄えたところで、先史時代から近世に至るまで各時代の遺構・遺跡が豊富にみられる所である。特に古墳時代全般にわたる古墳群、飛鳥から平安時代に至る古代寺院遺構の豊富さは、目を見張らせるものがある。遺跡は、大和川・石川を中心とする平野部と、生駒山地を中心とする山間部にわかれ、これらの遺跡群のほとんどは急激な宅地開発にともなう崩壊の危機に瀕しており、早急な保護および整備の計画が必要とされた。このため、柏原市全体を遺跡の町とし、順次保護していくなかで古代遺跡の野外博物館として整備する。これらは全体整備計画として、早急な保護が必要とされる古墳時代を中心とした遺跡群を短期計画、確認および規模の想定が必要な飛鳥・奈良時代の遺跡を長期計画として、計画した。

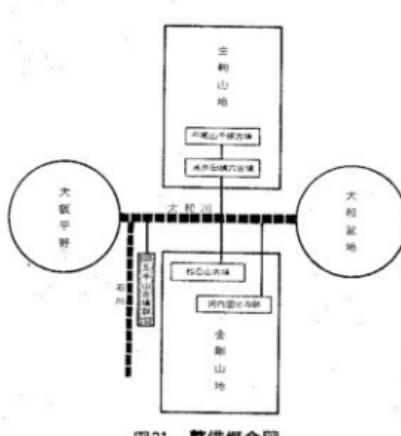


図31 整備概念図

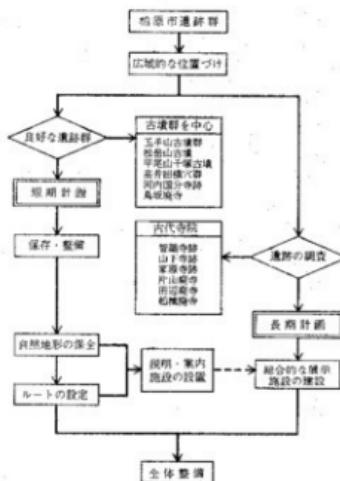


図32 柏原市総合整備フロー



図33 柏原マップ

a) 短期計画

比較的良好な環境を残している遺跡を中心として行う。遺跡は、前期古墳を中心とした玉手山古墳群、古墳時代前期から中期の変遷を示す松岳山古墳、古墳時代後期の斜面を利用した大規模な平尾山千塚古墳、高井田横穴群、全国でもめずらしい丘陵地を利用した河内国分寺跡、鳥坂寺跡があげられる。これらを調査・発掘していくなかで、遺跡自体の整備と展示施設を含めた周辺整備を行い、遺跡相互の関係を知るためのネットワークを形成し、歴史を体験学習できる場として位置づける。これらのネットワークについては、古代からの主要交通路である大和川および古道を想定したルート作りを行う。

b) 長期計画

短期計画を行うなかで、現在不明な点が多く遺跡の確認が進まない古代寺院の調査を行い、順次整備を行う。聖武天皇の東大寺大仏造立の機縁となった智識寺跡、和氣氏との関係が語られる山下寺跡、家原寺跡、片山廃寺、田辺氏の氏寺として塔基壇を残す田辺廃寺、飛鳥時代の貴重な瓦を検出する船橋廃寺などがあげられ、長期的に遺跡規模の確認、遺物の発掘・整理を行い、総合的な展示施設を含めた整備を行う。

4. 玉手山古墳群整備構想

玉手山古墳群は、南北に連なる玉手山丘陵の尾根上に十数基存在していた。4世紀から5世紀にかけて築造され、前期古墳の中で1カ所にまとまって作られたのは全国でも外に例を見ない。現在、1、2、3、7、8、9号墳しか残っていないが、それらも墓地、宅地、崖崩れ等によって消滅の危機に瀕している状況である。

また、丘陵の東西両斜面に、凝灰岩地層を利用した安福寺横穴群と玉手山東横穴群が存在する。これらは長年の風雨に伴う乾燥収縮による傷みが激しい。

整備は、これらの遺跡を早急に史跡指定および土地の買上げを行い、遺跡の保護および整備を主体としたルートの設定、緑地の保護、説明・案内導標等の新設などを行い。歴史教育の場として、市全体の文化的な都市づくりの一環として行う。構想の骨子としては、遺跡の保護、環境整備にわけ、

①遺跡の保護

○現在残っている玉手山古墳群の史跡指定および土地買上げを行う。

○玉手山1、2号墳は、墳丘が墓地として利用されており古墳のイメージが損なわれているため、墓地等の移転をはかり、原状復帰する。



図34 玉手山古墳群分布図

- 玉手山3号墳は、建造物により前方・後円部とも形状が著しく損なわれているため、これ以上の宅地の進出を防ぎ、緑地としての景観を残す。
- 玉手山7号墳は、現在前方部と後円部の土地所有者が異なり、境界にフェンスが設けてあるため全体を見渡しにくい。また墳丘上に設けられている墓・休憩施設の撤去を行い、古墳の景観保全と緑地の保護を行う。また、後円部側にある石棺（6号墳と思われる）についても保存施設等を設ける。
- 玉手山8号墳は、早急に地崩れ対策を行い、遺跡の崩壊を防ぐ。特に地崩れによる段差（3mにもおよぶ）については、調査を行い、原状復帰とする。
- 玉手山9号墳は、玉手山古墳群の中で唯一築造当初の姿を見れるものとし、完全復帰する。
- 安福寺内の割竹形石棺は、現在野ざらしになっており、風化等による石棺の損壊、装飾である直弧文の消失を防ぐため、保存施設を設ける。
- 安福寺横穴は、それぞれの横穴について調査を行い、崩壊度のカルテを作成し、公開展示するものと、保護するものにわけて計画する。また線刻のある横穴は、外気に直接接しないような保存施設が必要である。

②環境整備

- 玉手山丘陵を地形的に、(a)玉手山1、2、3号墳、(b)玉手山7、8、9号墳、(c)安福寺横穴・割竹形石棺にわけ、それぞれ案内・説明施設を設ける。
- 丘陵全体の説明・案内施設については、新たに9号墳の復原位置で行う。また、消滅した遺跡についても説明を行う。
- 3つのグループをつなぐルートの設定を行う。
- ルート設定は、良好な環境を残している石川の河川緑地、安福寺境内の自然林、安福寺付近の町並み群、伯太彦神社の森等を含めた計画とする。それらにより、中世・近世の状況を見せる。
- それぞれのグループは、(a)玉手山7、8、9号墳を古墳時代前期、(b)玉手山1、2、3号墳を古墳時代前期中葉、(c)安福寺横穴を古墳時代後期として、それぞれの位置および築造当時の状況を、眼下に広がる大阪平野、大和川流域を含めて説明、展示を行う。

5. 玉手山9号墳の移設復原

玉手山9号墳は古墳時代前期の特徴を示す柄鏡状をした前方後円墳であるが、このような前期古墳の復原は全国でも例がない。このことから、復原は正確かつ完全に行うべきであり、その結果学術的にも高い評価が得られ、市民の古墳に対する認識も正しくなり、歴史教育の場として、柏原市民だけでなく、全国的にも活用されることになるだろう。

1) 配置計画

9号墳は、前期古墳の特徴をよく示している。移設復原にあたっては、単に墳丘だけの問題ではなく、それをとりまく環境の基本構造を踏襲すべきである。すなわち「当時の古墳は、共同体の首長墓として、共同祭祀の場として平野部から仰ぎ見る位置にあること、裏返していえば、古墳から平野部を見渡すことができる」という点を不可欠の要素として考えるべきである。

古墳復原活用とからめて要約すると、

- ①玉手山古墳群全体整備の視点から、9号墳だけは墳丘・石室とも完全に復原する。かつ前期古墳の性格上敷地西端部に復原する。
- ②移設という非常手段を使う以上、文化財の活用という観点に力を置いた計画をするため、野外博物館として利用する。このため、完全に復原し、市民が見学しやすい西端部に移設する。
- ③中学校の施設配置上、西端部に移設するのが好ましい。

となり、9号墳の移設場所は、学校敷地の西端部が望ましい。

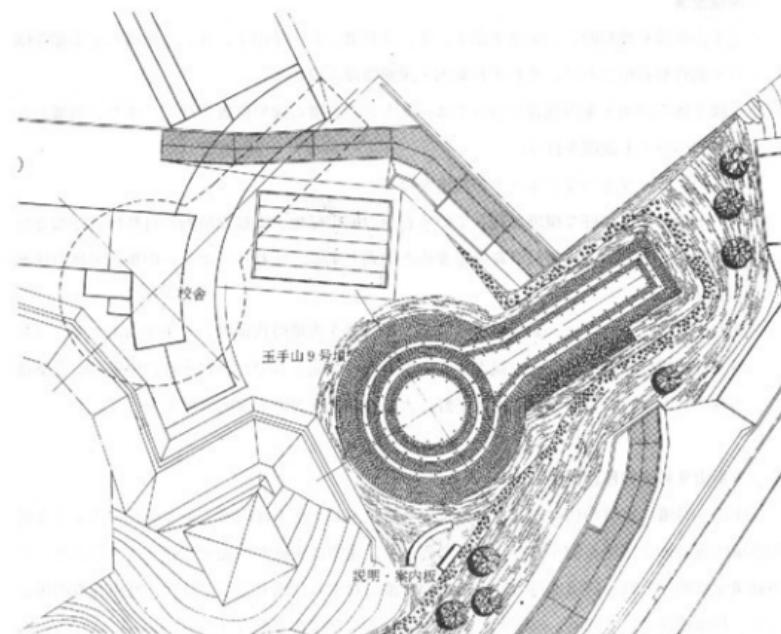
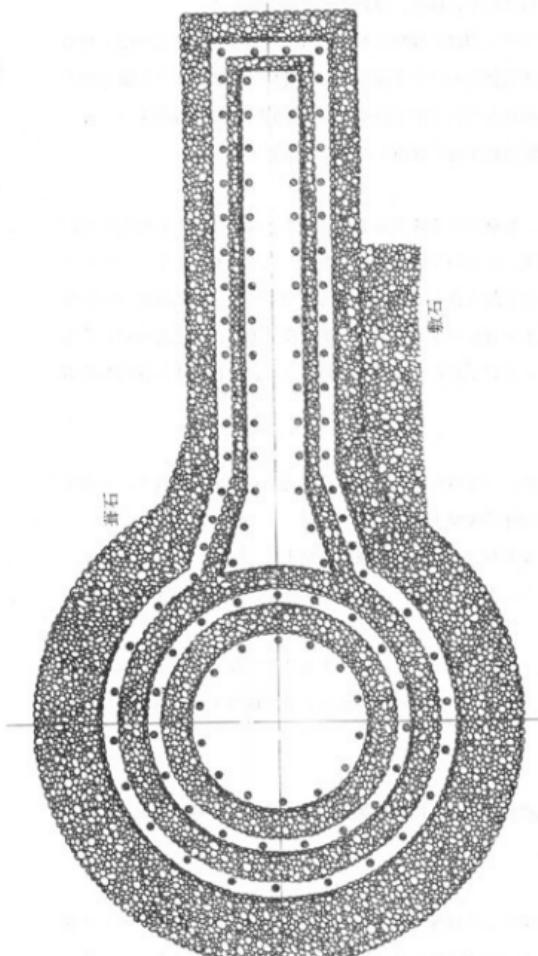
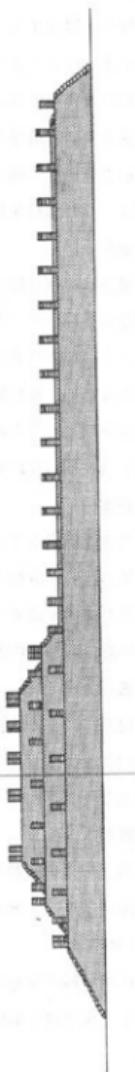


図35 玉手山9号墳配置図

图36 玉手山9号填平面·立面图

10M
0



2) 移設復原計画

移設については、遺構のうち遺存良好なところ、すなわち敷石部、葺石部、柱穴状ピットを切り取り、移設する。工法は、遺構面をウレタンまたはエポキル系樹脂で硬化保護し、土層ごと水平ボーリングまたは鉄板圧入で切り取り、移設、設置する方法を用いる。

復原にあたっては、古墳をわかりやすく市民に理解させるため、できるだけ築造当時の材料・工法を用い、墳丘および石室を築造当初の形に完全復原する。墳丘は可能な限り古墳立地の基本形をえない様にし、石室は新補材を用いて旧工法で復原し、同時に見学施設をつくる。葺石は一部新補材を用い、埴輪は実験考古学的に復原したものを設置する。

① 墳丘

墳丘は現状地盤の砂礫土を用い、版築による締固め工法により、強固な封土を形成する。墳丘およびテラス部は、雨水の浸透、人為的な摩耗を防ぐため、ソイルセメント（マサナセメント）により表面を保護する。前方部の葺石部の斜面は勾配50°以上になり、崩壊の危険性があるため、RC擁壁を設け、封土・葺石の安定を図る。また移設地は、人工造成による盛土部分に当たるため、地盤沈下によるひび割れ、地崩れを防ぐため、墳丘全体に強固な基礎盤を設ける（RC耐圧板）。

② 石室

石室を構成している石材、裏込め、一部残存が認められる粘土床、石室上部盛土、石室床版築の調査・分析を行い、同様の仕様で復原する。

また遺構が認められない木棺、天井石についても同様に復原する。

外部から石室内部が見られるよう、内部を半裁した状態で保存し、展示施設を設ける。

③ 蔷石

復原図による墳丘法面勾配では、石材を積み上げ、維持することはほとんど不可能である。今回はモルタルを下地として積み上げ、石の間隙は樹脂モルタルで補強する。樹脂モルタルは土色仕上げとする。

④ 敷石

切り取られた敷石については、礎盤を設け、原状位置に設置する。切り取り目地、葺石の間隙には石材を補充する。

⑤ 円筒埴輪

円筒埴輪の復原は、公開展示方法により現地に窯を設け、見学者の実施体験学習として製作し、復原時に製作・展示するもの、順次復原して展示していくものとに分ける。

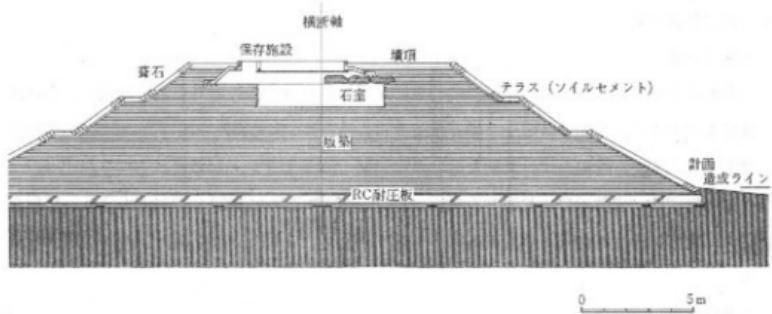


図37 後円部断面詳細図

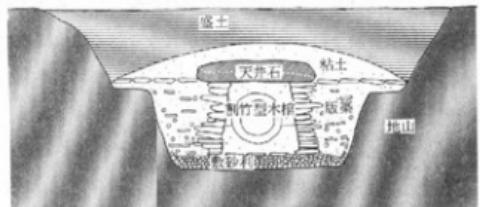
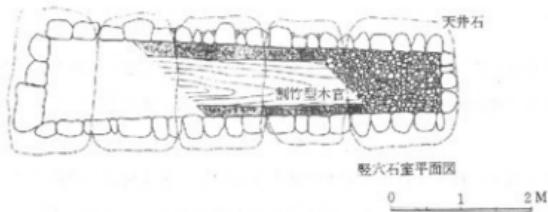


図38 壁穴式石室平面・断面図

3) 周辺整備計画

①施設計画

市民にわかりやすく古墳および市内の遺跡を理解させるための野外の説明施設と、市内遺跡整備の中でネットワークの中心的な位置を占めるため、休憩施設を設ける。移設は、柏原の歴史性をふまえ、景観および美観を損なわない統一的なデザインが必要とされる。

説明施設は、大阪平野が見渡せる位置に設け、眼下に広がる遺跡との対応も図る。休憩施設は、造成に伴う斜面を利用して、内部に掘り込むような形で、ベンチ・ボックス等を設ける。

②導線計画

復原敷地内は、特に沿路を設けず、敷地内を自由に周回できるようにし、墳丘には階段等を設けず自由に登らせる。

③植栽計画

古墳の築造当初は、幾可学的かつ人工的なものである。この人工的なイメージを強調するため、廻りの人工物を、野芝、低木、蒿類で隠す。

4) 展示計画

復原された9号墳の石室を見ることのできる見学施設および、野外の9号墳の説明を行う説明板、市内および玉手山丘陵の遺跡分布と案内をする案内板、道順を示す導標を設ける。

①竪穴式石室見学施設

竪穴式石室は、構造上、完全に復原すれば見学不可能となるので、見学施設を設置する。施設は、上部から入り、竪穴式石室の天井石を一部はずして内部をのぞくことができるようになり、施設入口には格子状の扉またはガラス扉を水平に設け、施錠する。施設はプレキャストコンクリートまたは鉄筋コンクリート現場打込製とし、表面は樹脂と土による土色仕上げとする。施設自体も景観を妨げないように土中になるべく隠す構造とする。

②説明・案内施設

後円部西側に大規模な説明施設を設ける。ここでは9号墳および築造された当時の人々の生活をイラスト・写真によりわかりやすく展示し、かつ市内および玉手山丘陵の遺跡を案内する展示を行う。施設は景観を妨げないように低く押さえたもので、プレキャストコンクリート製とし、説明板は屋外にあっても耐候性にすぐれ、自然環境に調和する磁器板製とする。一部に出土遺物のレプリカを展示するボックスをつくる。

敷石部、墳丘部、石室部、埴輪には小規模の説明板を設置する。その他に導標、名称板(古墳の部位等の名称を標示する)を設置する

5) 管理計画

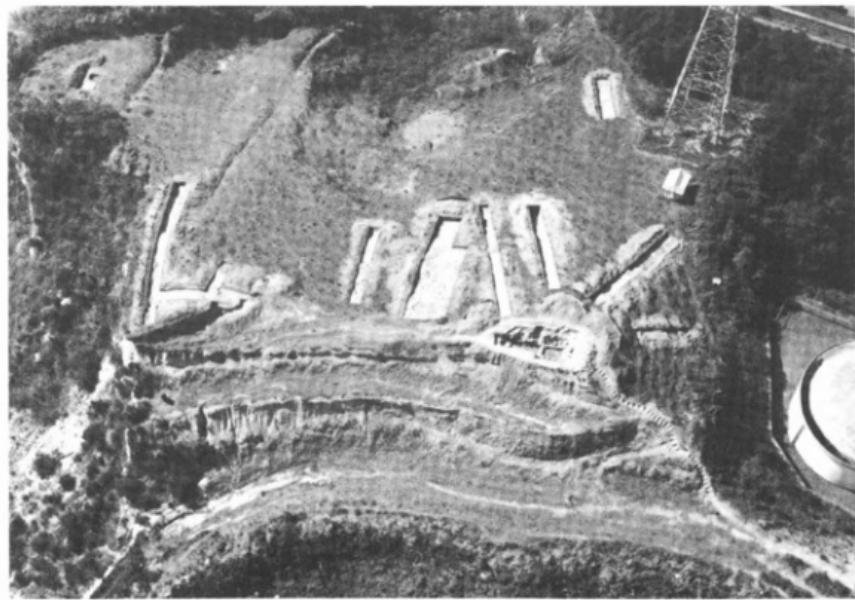
復原した9号墳の管理は、柏原市教育委員会の手に委ねられるが、原則として、日常の管理は中学校で処理し、修理等は社会教育課で行うようにしたい。

日常の管理の中で、樹木等の手入れ、見学者（特に児童、小中学生）への説明などは、中学校の考古学同好会等のクラブ活動で行うものとする。この同好会は、柏原市の遺跡、特に玉手山丘陵の遺跡を中心に学習・調査を行い、文化財パトロール的役目も果たすようにし、生きた教育の場としたい。

図 版



玉手山 9号墳遠景・前方中央（西から）



調査中航空写真（東から）



1 トレンチ葺石



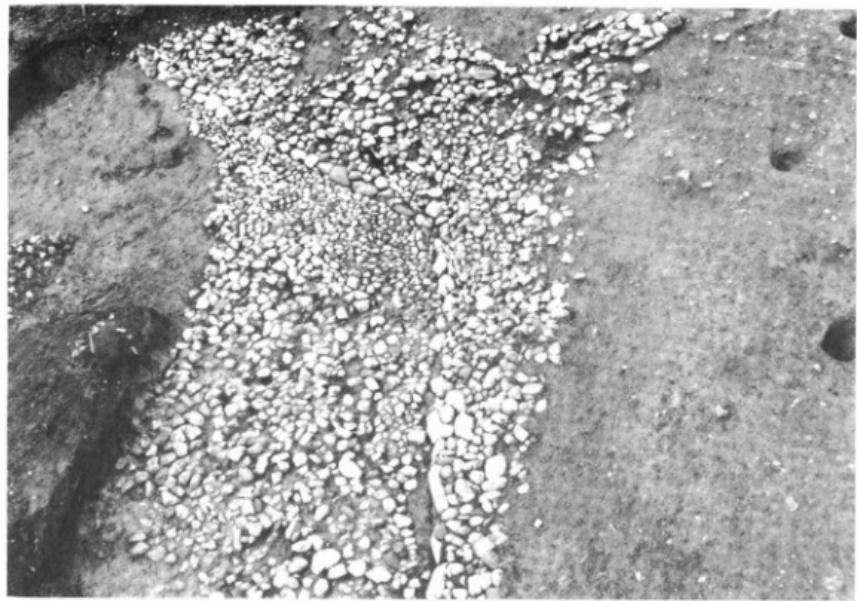
2 トレンチ葺石



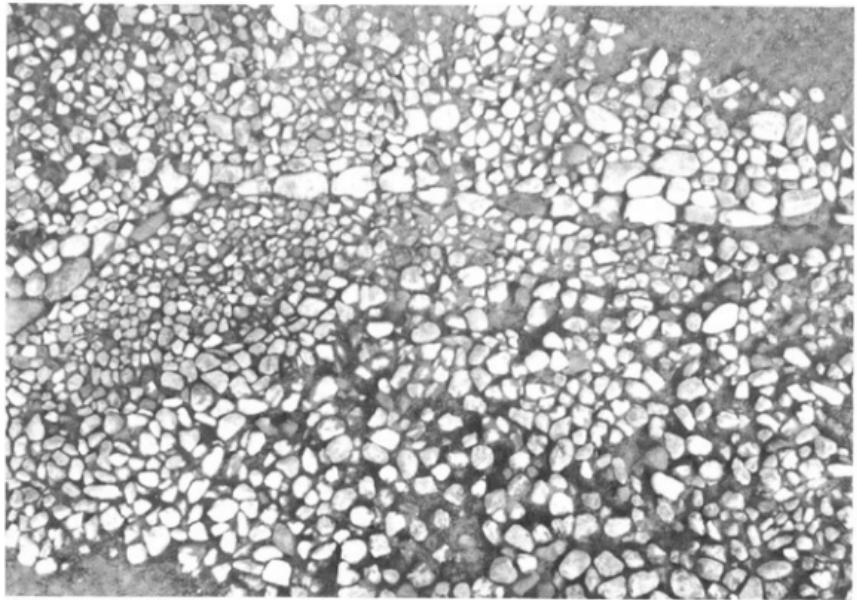
2 トレンチ土層



3 トレンチ葺石



5 トレンチ葺石 (南から)



5 トレンチ葺石 (西から)



7 トレンチ葺石



8 トレンチ葺石



5 トレンチ埴輪列（南から）



5 トレンチ埴輪No 1



5 トレンチ埴輪No 2



6 トレンチ埴輪No 4

図版8

堅穴式石室



南から

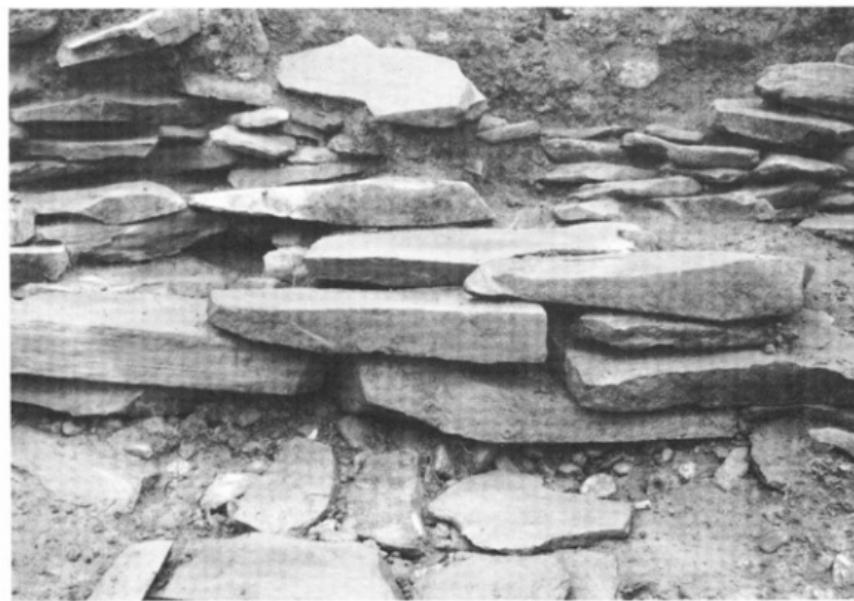


北から

図版9 堅穴式石室北壁



南から



南から



北から



北から



西壁中央（東より）

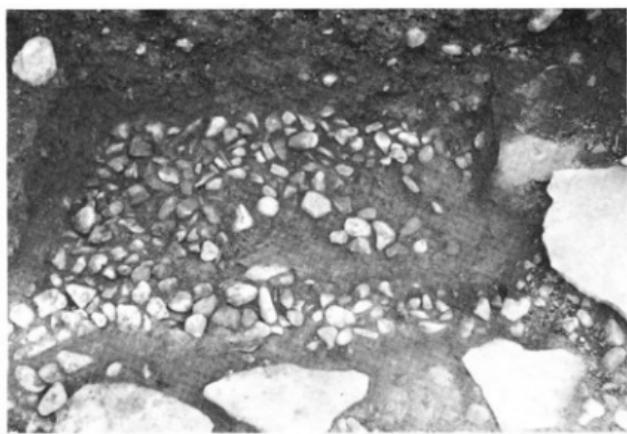


西壁南（東より）

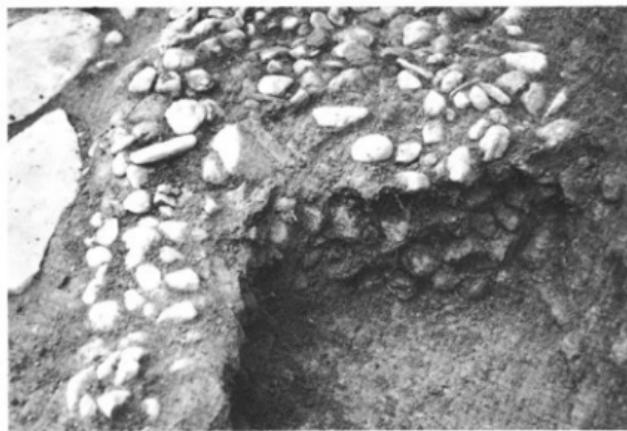


東壁中央（西より）

東壁下磚敷（西より）



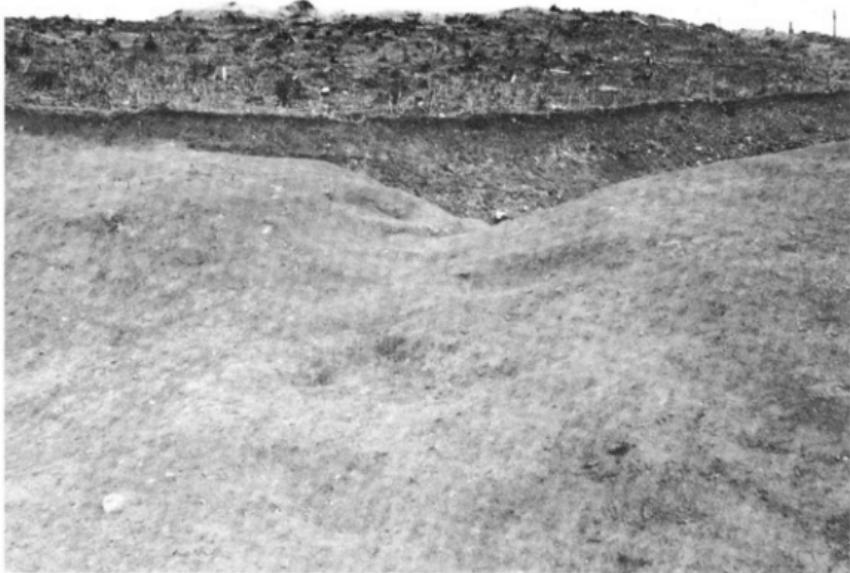
東壁下磚敷断面（南より）



西壁鉄劍出土状況







西から



西から



南西から



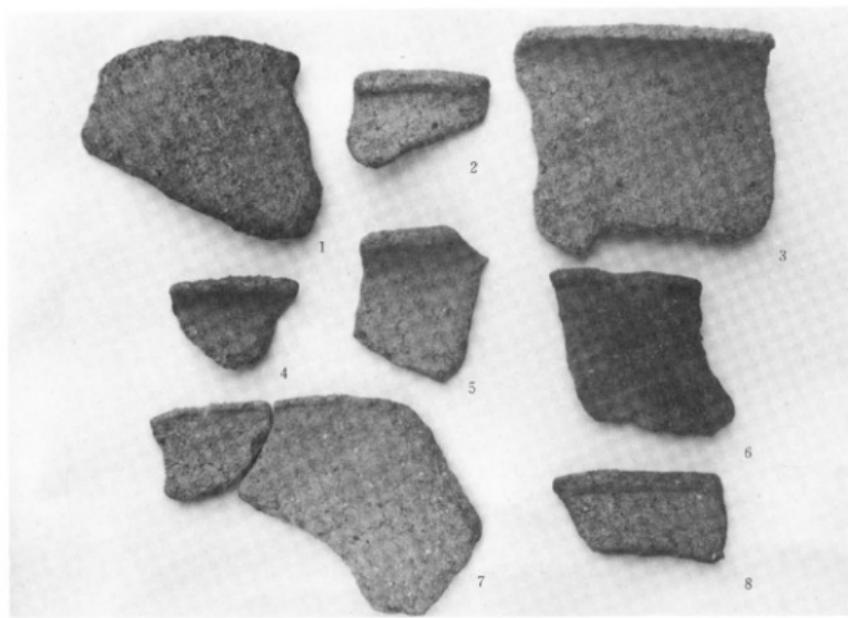
南から



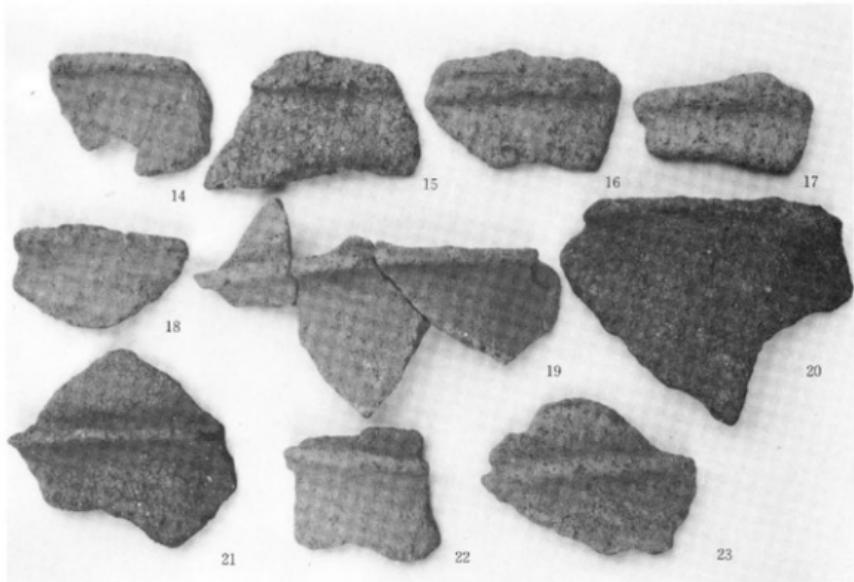
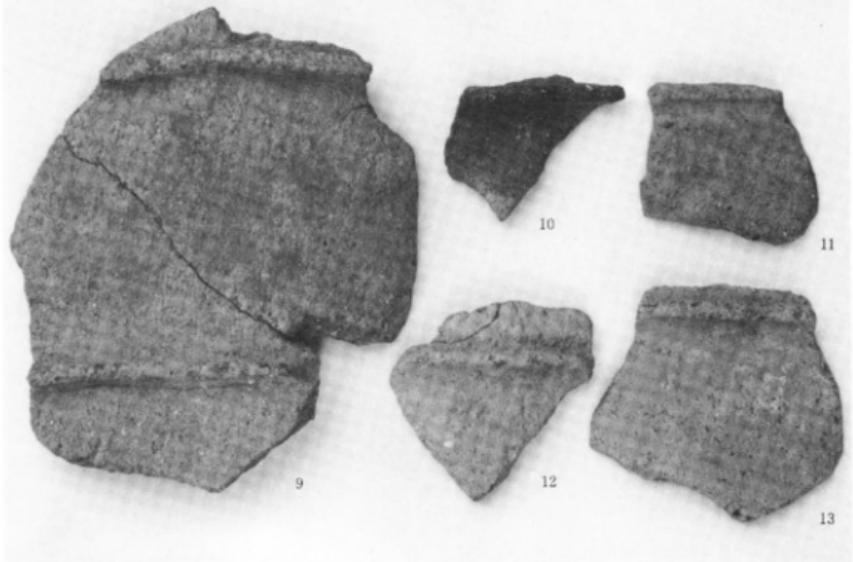
鉄剣先



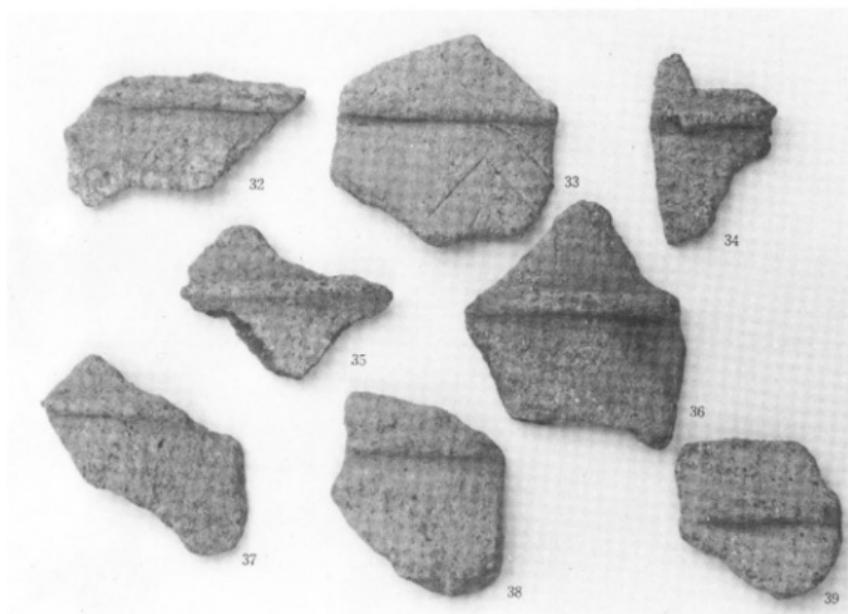
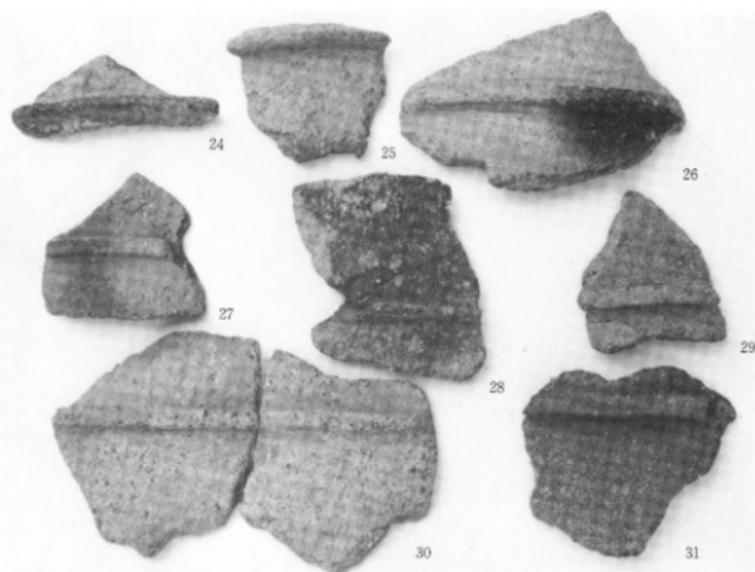
土師器



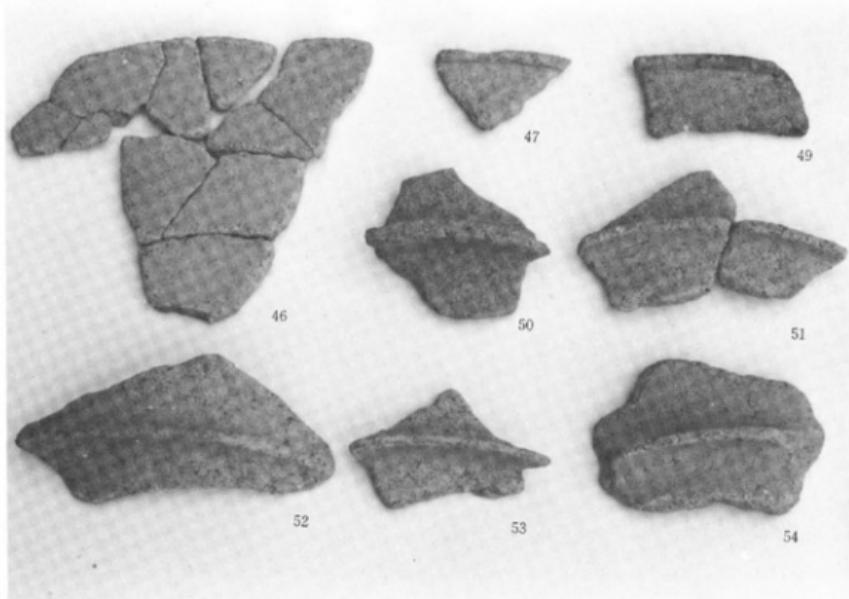
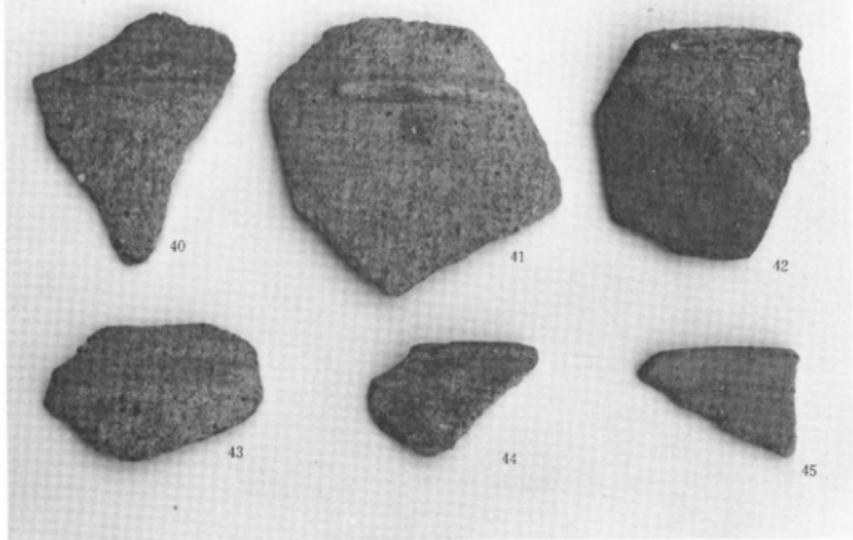
円筒埴輪口縁部



円筒埴輪体部



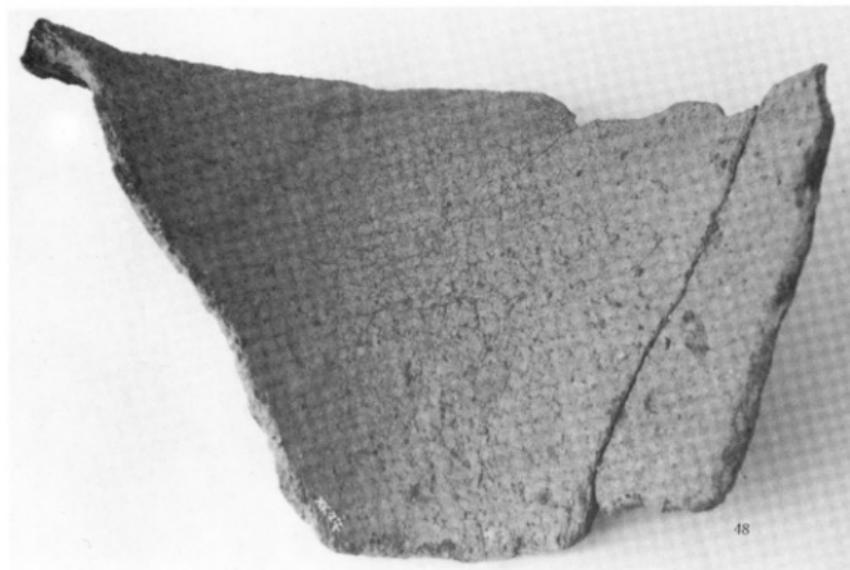
圓筒埴輪部



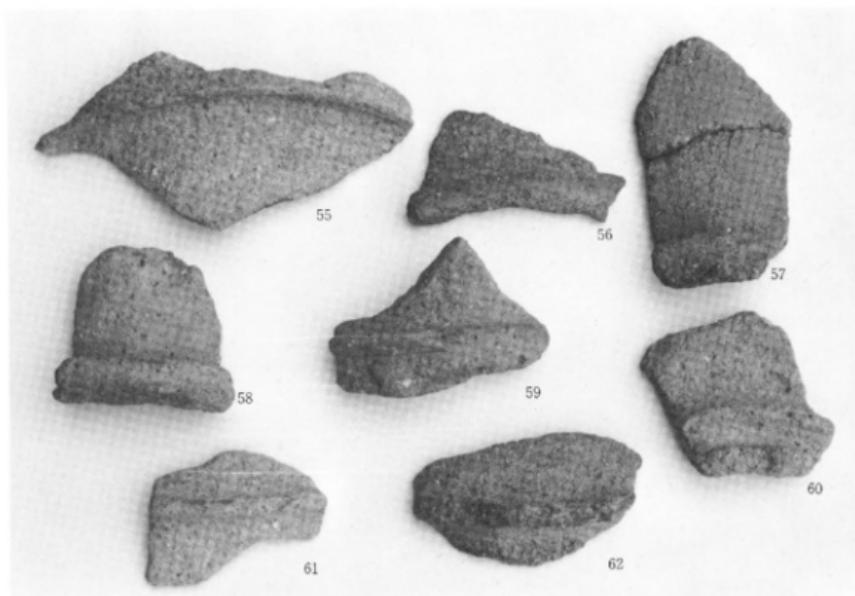
円筒埴輪体部・朝顔形埴輪口縁部



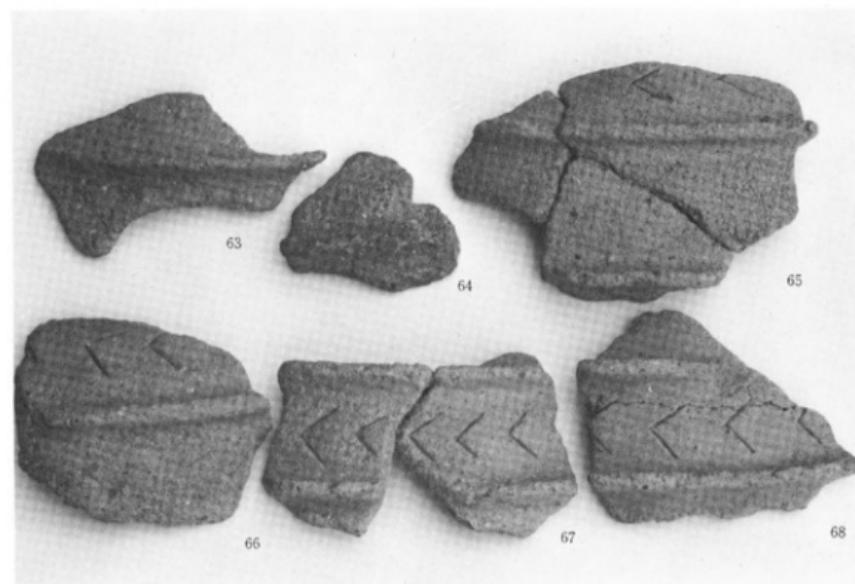
朝頭形埴輪口緣部・外面



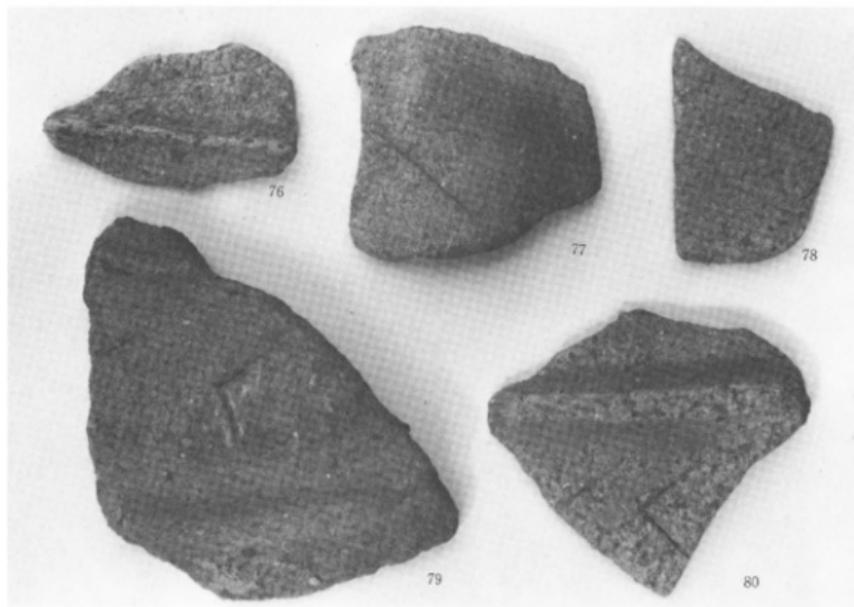
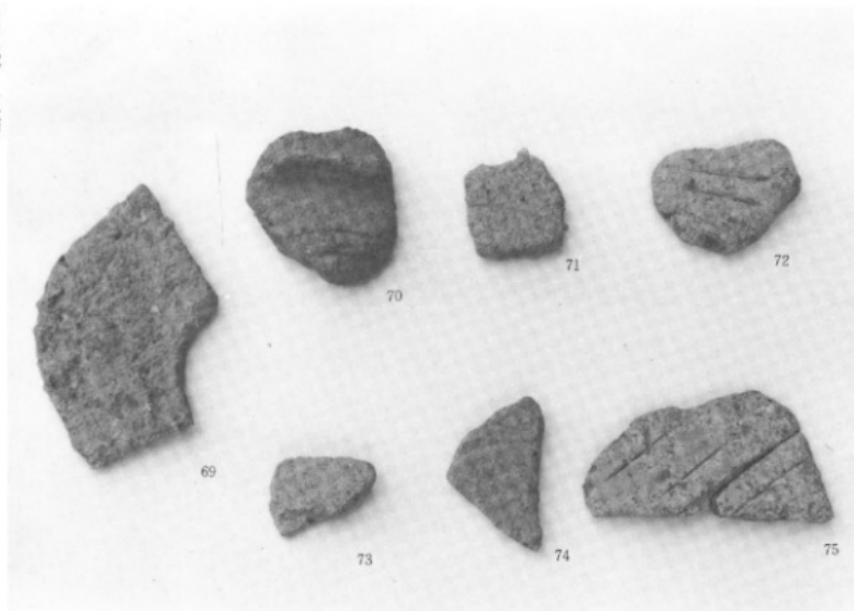
朝頭形埴輪口緣部・内面



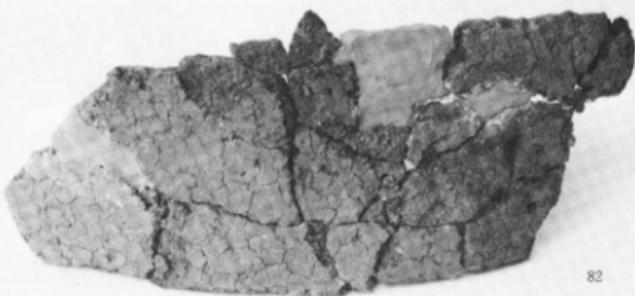
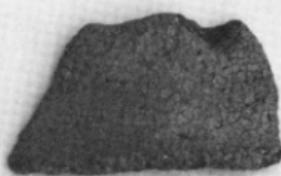
朝顔形埴輪頭部



朝顔形埴輪肩部



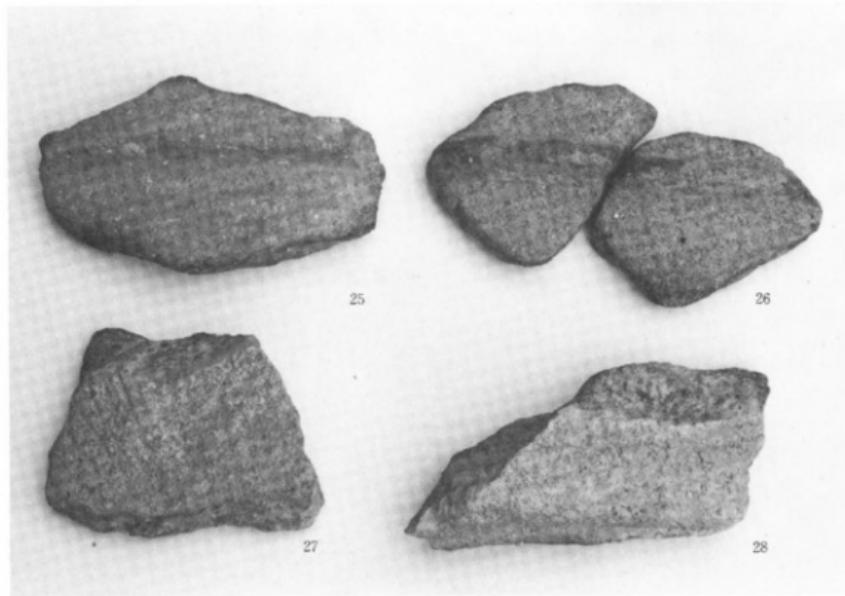
線刻文様を有する埴輪





85

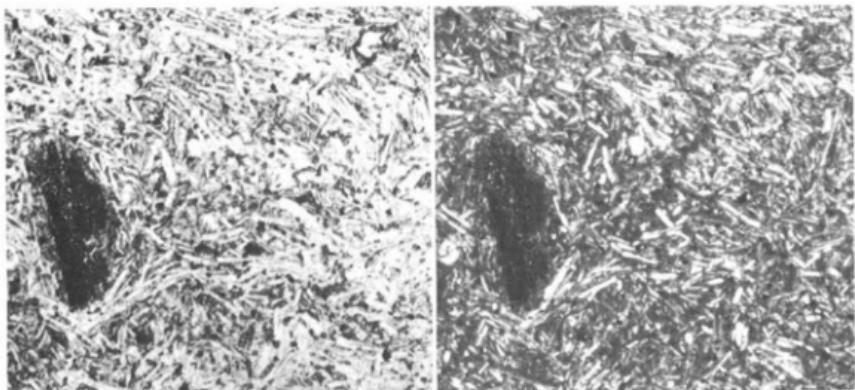
埴輪底部



西側斜面出土埴輪

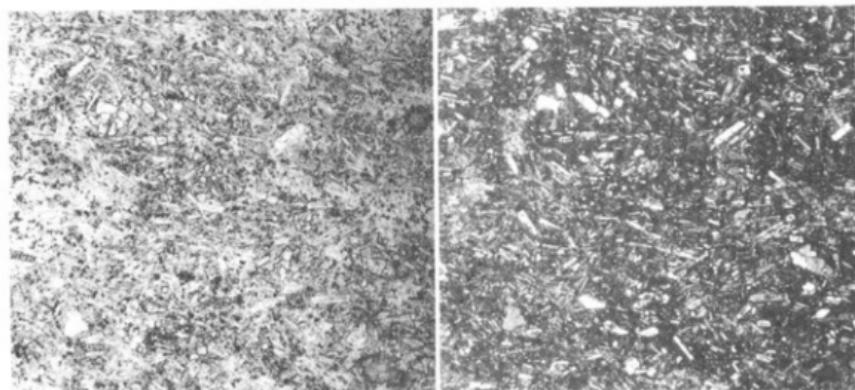


龜ノ瀬東方大和川右岸
の石材採石推定地



玉手山9号墳石室石材・オープンニコル ($\times 48$)

クロスニコル ($\times 48$)



龜ノ瀬東方の岩石・オープンニコル ($\times 32$)

クロスニコル ($\times 32$)

玉手山9号墳

編集・発行 柏原市教育委員会

〒532 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 0729 (72) 1501 内線716

発行年月日 1983年11月1日

印 刷 K.K. 中島弘文堂印刷所

